



モ  
ー  
リ  
ー

司 法 省 文 庫			
和	政	一	共
書	治	五	八
門	及	三	冊
	法	九	架
	律	號	
	部		

日本國行政字典第八冊

正久部

松田正久 訳

翻譯課

169





莫氏仙國行政字典第 冊目次

テエ之部

官有財産 (ドノーヌ)

公用徵買 (エキスポプリアション)

B250  
B I  
I L

司 法 省





官有財産

凡<sup>ク</sup>國有<sup>官有</sup>別有及<sup>レ</sup>邑有<sup>ノ</sup>財産ニハ公有ニ係ル者有リ又私有ニ係ル者有リ今余ハ其性質ノ如何ヲ論セス總テ以<sup>テ</sup>等ノ財産ニ関シテ説述スル有ラントス若シ夫ノ各人私有ノ財産ハ茲ニ之カ説述ヲ為スヲ要セサルナリ

目次

第一章 緒言

第一節 舊王朝ニ於ル官有財産ノ制度

第二節 千七百九十年以降ニ於ル官有財産ノ制度

第一項 官有財産ノ可轉付

第二項 官有財産ノ轉付

第三項 特別ノ官有財産

第二章 官有財産ヲ組成スル財産ノ種類

第一節 財産ノ區別

第二節 公有財産

第三節 私有財産

第一項 有形私有財産

第二項 無形私有財産

第四節 王室財産

第三章 官有財産ノ管理法

第一節 總論

第二節 公有財産ニ持施スル定則

第三節 私有財産ニ持施スル定則

第一款 財産ノ變換



第一則 財產、得有

第二則 財產、轉付

第三則 財產、交換

第二款 財產、處置

第一則 財產、處置ニ任スル職官

第二則 財產、公事ノ供用

第三則 不動産、貸借契約

第四章 官有財產ニ関スル訴訟

第一節 訴訟、管轄權

第一款 行政裁判、管轄權

第二款 司法裁判、管轄權

第二節 官有財產ノ訴訟ニ関シテ政府ノ代理ニ任スル職官

新産

第一款 官有~~■~~、所有權ニ関スル訴訟

第二款 各般ノ徵收ニ関スル告訴

第三節 官有財產ニ関スル訴訟ノ法式

第一款 官有財產ノ所有權ニ関スル告訴

第二款 各般ノ徵收ニ関スル告訴

索引書目

對照行政法

目次畢

第一章 緒言

第一節 舊王朝ニ於ル官有財產ノ制度

〔一〕余ハ以ニ官有財產ノ起源ニ溯求スルヲ欲セス唯夕官有財產ニ関スル舊法ノ其最モ重要ナル二三ノ件項ヲ奉示スルノミ



三官有財産ノ不可轉付昔時「ヒューグカペー」王ハ其故封タル「イルドフ  
ランス」及ヒ「オルレア子」ノ二列ノ土地ヲ奉ケテ婚資ト為シ以テ更ニ  
王室財産ヲ組成シタリ故ニ或人ハ王室財産ヲ不可轉付ノ者ト為スノ  
制度ハ「ヒューグカペー」王ノ治時ニ起源スト言ヘリ夫レ官有財産ヲ不可  
轉付ノ者ト為セル精神ノ已ニ此際ニ胚胎シタルハ固リ疑フ可カラズ  
ト雖ヒ其実ハ「フリッパル、ベル」王ノ治時即チ千三百十八年七月十八日ノ  
勅令ニ於テ始メテ此不可轉付ノ趣意ノ法制上ニ見ハル、有リ而シテ  
此ヨリ以降尚ホ二百有餘年ヲ経テ總ニ公法ノ一原則ト為ルニ至レリ  
之ヲ歴史ニ徵スルニ「ロピタル」氏ノ發意ニ由リ千五百六十六年二月「ム  
ウラン」地名ノ全國顯<sup>名</sup>■大家會議ニ於テ一個ノ勅令ヲ發下セリ所謂ル王  
室財産勅令是ナリ此勅令ヲ以テ明クニ王室財産ヲ不可轉付ノ者ト為  
セル原則ヲ公告ス爾後王室財産ノ事ニ関シテ制定頒布セル諸般ノ規  
則ハ皆此勅令ニ根基セサル者ハ莫シ

三王室財産勅令ノ第一條ニ依レハ王室財産ハ唯タ二個ノ場合ニ於  
テノミ之ヲ轉付スルヲ得可キ者ト規定セリ其第一ノ場合ハ佛蘭西  
王家ノ嫡男ニ非カル諸男ニ分與スル是ナリ然レハ此場合ニ於テハ若  
シ其諸男ノ男子ヲ遺存スル無クシテ死スレハ則チ其原状及ヒ原資ニ  
照シテ之ヲ王室ニ収回ス又其第二ノ場合ハ戰費ノ度支ニ必要スル有  
レハ之ヲ見金ニ賣換スル是ナリ此場合ニ於テハ國王ハ其轉付ヲ「パル  
ハマン」昔時ノ最上等ノ裁判所ノ名ニ命令スル為ニ特ニ制詔ヲ發下シ而シテ永遠ニ  
之ヲ買還スル権理ヲ割留ス

四又同年同月「ムウラン」ニ於テ別ニ一個ノ勅令ヲ發下シ王室財産不可  
轉付ノ原則ニ對シテ更ニ第三ノ特例ヲ立定セリ此勅令タル已ニ王室  
財産ニ大財産ト小財産トノ區別ヲ設ケ其後千六百六十七年ノ勅令千



六百六十九年、勅令、千六百七十二年四月八日ノ勅令、千六百八十二年十一月二十九日ノ參議院裁令、千七百二年四月ノ勅令及ヒ千七百八年四月ノ勅令ヲ以テ累次ニ以テ區別シテ彌益明確ナラシメタリ其大財産トハ上中下ノ各裁判所ヲ具フル國土及ヒ舊來地ヲ謂ヒ而シテ大財産ハ將來之ヲ不可轉付ノ者ト爲シ又其小財産トハ大國土及舊來地ヨリ分離セル諸物件ヲ謂ヒ而シテ其小財産ハ依然之ヲ可轉付ノ者ト爲セリ其小財産ノ種目ハ千七百八年八月ノ勅令ニ於テ細密ニ之ヲ列舉セル有ルナリ

**五**、ムーランニ於テ發下セル第一次ノ勅令第二條ニ王室財産ヲ組成スル所ノ者ヲ指定セリ乃チ曰ク王室財産ハ法令ノ明文ヲ以テ我カ王室ニ供進シ併入シ附属スル財産明認ニ因テ王家ニ歸セシムル者ト十年以來我カ收稅官及ヒ各官吏ノ保管ニ掌理シテ以テ王室ノ歲收ニ計合セル財産默認ニ因テ王家ニ歸セシムル者トヲ以テ組成スト其勅令ノ條文タル新ノ如シト雖モ而モ此ニ據テ以テ其明認及ヒ默認ニ因リ王室ニ歸セシメタル財産ノ外ニハ復タ王室財産ノ存スル有ラスト結論スルトヲ得ス蓋シ以テ他別ニ無兼襲財産ヲ收有スル原則ノ効力ニ因テ王室ニ歸スル財産ノ在ル有リ舊王朝ノ制例ニ依ルニ凡ツ王族ノ其王位ニ即ク、時際ニ所有セル財産ハ法律ニ於テ之ヲ王室財産ニ併入セシメ又其王位ニ即キシヨリ以後ニ兼襲若クハ購買若クハ其他ノ方法ニ依テ其所有ニ歸スル土地若クハ來地ノ如キモ亦然セリ抑モ王族ノ財産ヲ王室ノ財産ニ併入スルハ其人ノ意望ニ因ルニ非ス全ク即位ヲ國家ト約定セルニ成ル者ニシテ是レ國家ハ國家ニ屬スル財産ヲ君主ノ特有ニ歸シ而シテ君主モ亦君主ニ屬スル財産ヲ國家ノ專有ニ歸セシムルニ外ナラサルナリ



〔六〕王室財産ノ期滿不得有〔余〕既ニ上文ニ於テ詳カニ王室財産ノ不可轉付ノ者タル其原委ヲ説述セリ故ニ其期滿不得有ノ者タルトテ説示スルニハ復タ多言ヲ費スヲ要セサルナリ抑モ王室財産ノ期滿不得有ノ者タルハ即チ其不可轉付ノ者タルニ由來スル自然ノ結果ニ外ナラス若シ一人ノ多クノ年間王室財産ヲ占有シ因テ以テ其所有權ノ轉移スル者ト為セハ則チ緩令ヒ之カ為メニ不可轉付ノ原則ヲ立定スルニ復タ果シテ何等ノ功效ヲ見ル有ラレヤ然リト雖モ昔時不可轉付ノ原則ノ既ニ已ニ爭難ヲ容ル可カラサル日ニ於テモ尚ホ法學家ノ期滿不得有ノ原則ニ批駁ヲ加フル者往々ニシテ之レ有リ蓋シ此王室財産ノ期滿不得有ニ関スル法制ヲ立定シタルハ「フ」ラ「フ」第一世ノ治時即チ千五百三十九年六月三十日ノ勅令ヲ以テ嚆矢ト為シ次ニ千五百五十七年次ニ千六百六十七年ニ於テ又此事ニ関シ勅令ヲ發下セル有リ而シテ其千六百六十七年ノ勅令ハ法學家ノ異論ヲ一掃シテ其痕ヲ絶タシメタル所ノ者ナリ

〔七〕此ノ如ク王室財産ヲ期滿不得有ノ者ト為セル定則ハ即チ之ヲ不可轉付ノ者ト為スニ由來スルヲ以テ是レ得テ王室ノハ財産ニ施行ス可カラサルノ結果ヲ生ス是故ニ王室財産ニ生出スル收益物若クハ偶然ニ得有スル財産即チ無主財産、拋棄財産、無業製財産若クハ外國人ノ遺留財産ノ如キ凡テ期セシテ得有スル財産ニハ亦得テ此定則ヲ施行ス可カラサルナリ

〔八〕王室財産ノ分典典質及ヒ交換王室財産ヲ嫡男ニ非サル諸男ニ分典スル規則ハ其部門ニ於テ之カ説述ヲ為ス故ニ此ニ贅セス  
典質トハ昔時戦費ノ度支ヲ要スルニ當リ王室財産ヲ典質ニ付スルヲ謂フ此典質ヲ為スニハ三個ノ規約ヲ以テスルトテ要ス即チ第一ニ見



金、賣換し第二ニ國王ノ制詔ヲ得テ之ヲ「バル、マニ」ノ原簿ニ登録シ  
第三ニ永遠ニ買還スル権理ヲ割留スル是ナリ凡ソ典質セル王室財産  
ハ之ヲ王室ノ所有ヨリ割離シテ以テ轉付セル者ト看做スニ非ス蓋シ  
是レ其割留スル買還権理ノ永遠ニ消滅セサルガ故ナリ

[九]嘗テム「ラニ」ニ於テ發下セル勅令ニハ絶エテ明言スル所無キモ王  
室財産ハ交換ノ方法ヲ以テ之ヲ轉付スルコトヲ得可シ何トナレバ「ホス  
ケ」氏ノ觀察セル如ク政府若シ交換ノ方法ヲ以テ王室財産ヲ轉付ス  
ル有レハ則チ之ニ代フル財産ヲ要徴シテ登時ニ王室財産ヲ填償スル  
ニ因リ其状態モ猶ホ交換ニ付シタル財産ノ素ト王室財産ニシテ永夕  
初ヨリ交換セサルガゴトキ「ラニ」以テナリ然リ而シテ以テ交換ナル語辭ハ  
王室財産ノ要報契約ヲ掩飾スル為メニ嘗テ屢之ヲ使用セリ是故ニ千  
六百六十七年ノ勅令ニ依レハ國王ノ其財産ヲ交換ニ付シ而シテ若シ

過多ノ損害ヲ受ケ或ハ交換法式ノ踐行ニ完全ヲ缺ク「有レハ」則チ國  
王ハ其財産ヲ收回スルコトヲ得タリ今以テ交換法式ノ最モ重要ナル者ヲ  
舉ケレハ千七百十一年ノ勅令ヲ以テ凡テ交換ニ付スル財産ハ必ス其  
種目ヲ詳細ニ記列セシムルノ定例是ナリ

[十]典質ト交換トノ顯然ナル區別ヲ云ヘハ典質ハ一時假占ノ所有權ヲ  
與ヘ而シテ收回スル「有レハ」得ル者ニシテ交換ハ永遠確定ノ所有權ヲ與  
ヘ而シテ唯其交換契約ノ法規ニ背戻スル場合ニ於テノ「有レハ」解破スルコ  
トヲ得ル者トス

[十一]千七百九十年十二月一日ノ法律ハ國有財産法律ト題セル者ニシ  
テ以テ法律ヲ以テ千五百六十六年以還ニ典質ニ若クハ交換ニタル王室  
財産ノ処分法ヲ規定シ以テ後又更ニ數多ノ法律ヲ制定頒布シ而シテ共  
和曆第七年「ウァン」トウ「ス」十四日ノ法律ヲ以テ更ニ以テ等ノ法律ヲ鑄鑄シ



テ大ニ改正ヲ加フルニ至レリ

第二節 千七百九十年以降ニ於ル官有財産ノ制度

第一項 官有財産ノ可轉付

〔十二〕立憲議院ハ全ク舊法ノ精神ヲ排蕩シ舊法ニ於テハ獨リ王室財産ノ存在ヲ認識セルノハナリシモ是ニ至リテハ特ニ國有財産ノ存在ヲ認識スルノミニシテ復タ他種ノ財産ヲ存在セシムルハ又舊法ニ在リテハ不可轉付ノ禁例ヲ循守スルノ外ハ國王ヲシテ其財産ニ對シ眞正ノ所有主タラシメタルモ是ニ至リテハ國王ヲシテ國有財産ニ對シ毫モ權理ヲ有セシムルハ無シ故ニ國王ハ唯タ法律ノ明文ヲ以テ國王ニ許共セル保有權及ヒ收領得權ヲ有スルノミ王室財産ヲ不可轉付ノ者ト爲スハ即チ舊慣ノ制度ニシテ之ヲ可轉付ノ者ト爲スハ是レ新定ノ制度ニ係ル又往時ニ在リテハ王室ノ主要ナル收入ハ專ラ其財産ヨリ生出シタルモ是ニ至リテハ其收入全ク供給ヲ受クルノ金額ニ存セリ

〔十三〕舊法ニ依シハ王室財産ハ不可轉付ノ者タルニ因リ國王ノ其君主タル名義ニ於テ所有スル財産ト所有主タル名義ニ於テ所有スル財産トノ區別ヲ存スルハ無シ然レド國家ノ主權ノ國民ニ轉移スルニ從テ王室財産ノ國王ヨリ國民ニ轉移スルニ及ヒ始メテ此區別ヲ立ツルノ必要ナルニ會セリ即チ凡ソ國家ノ主權ノ本體ニ危害ヲ致タスハ無クシテハ則チ他ニ轉付スルヲ得サル財産ハ不可轉付ノ者ニ屬シ而シテ其他ノ財産ハ總テ可轉付ノ者ニ歸セリ

〔十四〕上文ノ區別ハ即チ是レ公有財産ト私有財産トノ區別ノ由来スル所トス此區別ヲ立ツル原則ハ千七百九十年十一月二十一日議定同年十二月一日頒布ノ法律第二條ニ於テ之ヲ掲ケ而シテ民法第五百三十



八條ニ此條文ヲ載セリ

〔十五〕公有及ト私有ノ財産ニ関シテ立憲議院ノ制定セル區別ハ其レ此  
ノ如シ然レモ立憲議院ハ單ニ此原則ヲ立ツルニ止マラス此財産ノ管  
理權ヲ其手中ニ握有シテ以テ鉅額多數ノ財産ヲ攫取シ而シテ可轉付  
ノ原則ヲ擴張シテ旋ヤ之ヲ賣放ニ付シ以テ當時財政ノ困難ヲ救済ス  
ルノ資ニ供セリ

第二項 官有財産ノ轉付

〔十六〕千七百八十九年十一月二日議定同月四日頒布ノ法律ヲ以テ寺院  
僧侶ノ財産ヲ奉ケテ之ヲ國民ノ自由處置ニ委シ而シテ濟貧院ニ附屬  
スル財産ノ如キハ嘗テ立憲議院ハ此例外ニ置キシモ民約議院ハ均ク  
之ヲ國民ノ自由處置ニ屬セシメタリ〔千七百九十三年三月十九日ノ議決〕初ノ立憲議院  
ハ千七百八十九年十二月十九日ヲ以テ僧侶ノ財産ヲ賣放スルコトニ開  
手シ而シテ共和曆第二年ニ至リテ梳子之ヲ賣放シ盡セリ是ニ於テ民  
約議院ハ又更ニ濟貧院ノ財産ヲ賣放スルコトニ開手シタリ是ヨリ先キ  
千七百九十二年七月十七日ノ布告ヲ以テ外國ニ逃移セル佛蘭西人ノ  
財産ヲ沒收シテ之ヲ賣放ニ付ス可キコトヲ明言シ遂ニ共和曆第二年デ  
ルメール十三日ノ法律ヲ以テ大中小各寺院ノ修營費ニ供スル資金及  
ヒ喜捨金ヲ國民ノ共有財産ニ却入シ又此等ノ供資金ヨリ由來スル動  
産及ヒ不動産ヲ他種ノ國民共有ノ動産及ヒ不動産ト一般ニ之ヲ管理  
シ之ヲ賣放シ若クハ登記稅管理官ノ之ニ生出スル收益ヲ徵收ス可キ  
コトヲ公告シタリ以上各種ノ財産ヲ總稱シテ民有財物ト言ヒ其轉付ハ  
特別ノ法律ニ規定スル所ニ遵ハシメ而シテ若シ此財物ニ関シ争訟ノ  
起發スル有シハ則チ之ヲ特命裁判官ノ判決ニ付スルコトヲ要セリ

〔十七〕僧侶ノ財産ヲ革收スル事業ハ是ニ至リテ全ク卒ヘ而シテ僧侶ニ



對シテハ俸給ヲ付共スルコトヲ約定保証セシニ因リ其勢復々華奴ノ財  
産ヲ僧侶ニ還付スルヲ要セサルニ至シリ然リ而シテ濟貧院ノ財産ノ  
如キハ共和曆第五年ウァンデミエール十六日ノ法律ヲ以テ之ヲ彼レニ  
復屬セシメ且ツ加持力教ニ關スル共和曆第十年セルミナル十八日ノ  
編制法律ニ於テ僧侶ノ住宅及ヒ之ニ附屬スル園庭ノ尚ホ未ク賣放ニ  
付セサル者ハ之ヲ邑寺トシテ住職トシテセルウァン村トシテ住職トシテ還付シ而シテ原ト  
當テ加持力教ノ禮拜式ニ供用シタル建造物ノ尚ホ見ニ國民ノ共有ニ  
屬スル者ハ一邑ノ管寺及ヒ一支寺ニ各一座ヲ付共スルノ比例ニ從ヒ  
別長ノ布達ヲ以テ之ヲ僧正ノ管理ニ歸セシムル者ト為セリ又寺院ノ  
修營費ニ供セル財物ノ尚ホ未ク賣放セサル者ハ共和曆十一年「テ  
ミドール」七日ノ布令ヲ以テ亦之ヲ其修營費ニ供セシメタリ若シ夫レ  
共和曆第八年ノ憲法ヲ以テ没収セル逃移人ノ財産ハ共和政府ノ確定  
所有ニ屬セシメタルモ其後千八百二十五年四月二十五日ノ法律ヲ以  
テ共和曆第十年及ヒ「アール」ボン家ノ佛國ニ歸來セル日ニ於テ特赦ニ  
遭ヒタル逃移人ニハ之ヲ償還セリ蓋シテ法律ハ十億萬「アラニ」ノ資本  
額ニ三千萬「アラニ」ノ年利ヲ賦加スル公債証書ヲ付共シテ以テ其償還  
ニ充テタリ

第三項 特別ノ官有財産

十八 今次ニ官有財産ニ關スル沿革ノ說述ヲ畢ルニ臨ミ彼ノ千八百十  
年一月三十日ノ元老院議定法律ヲ以テ組成シタル特別官有財産ノ何  
物タルヲ概示セン

十九 特別官有財産ハ拿破侖第一世ノ和戰ノ全權ヲ擅用シ侵掠若ク  
ハ公約若クハ密約ノ方策ニ因リ自己ノ占有ニ歸セシメタル財産及ヒ  
他ノ動産不動産ヲ以テ組成セル者タリ



二十 茲特別官有財産ハ以テ戦費ヲ資ケテ兵士ヲ賞シ紀念塔碑ヲ建テ公  
同工作ヲ興シ技藝工術ヲ勸メ帝王ノ華觀ヲ修メ及ヒ國家ニ對スル文  
事武事ノ功勞ヲ褒揚スルニ供備セリ

二十一 故ニ是レ通常官有財産トハ全ク其性質ヲ異ニシ特任ノ財務官  
ヲ置キテ以テ之ヲ管理セシメ為メニ特別ノ金庫ヲ建設シタリ

二十二 茲特別官有財産ニ取リテ以テ獨逸、伊太利ノ二國ニ於テ各級ノ  
贈典ニ充テタルト少トラス佛國ニ於テモ亦然シリ以テ等ノ財産ハ皆  
是レ取回ス可カラサル者ナリト虽モ終テ讓典契約ヲ以テ遂ニ國家ノ  
有ニ復歸ス可カラシメタリ又其世襲ヲ許ス者有リテ以テ場合ニ當リテ  
ハ貴族世襲財産ノ定則ヲ之ニ適施セリ

二十三 帝國政府ハ千八百六十年十一月二十一日ノ布告ニ依據シ英國臣  
民ノ佛國內ニ有スル不動産ヲ没収シテ官有財産ニ部入シ又佛國ノ南  
部ノ運河「ロワレー」及ヒ「ホルリアン」ノ運河ヲ賣放シテ其價直ヲ皇帝ノ  
有ニ歸セシメタルヨリシテ大ニ特別官有財産ノ數額ヲ増加シ且ツ贈  
典財産ノ受領者ハ其外國ニ有スル財産ヲ將テ佛國內ニ存セル世襲及  
ヒ復歸ノ定則ヲ施ス可キ財産ニ交換スル權理ヲ有スルヨリシテ亦漸  
次大ニ佛國內ノ特別官有財産ノ數額ヲ増加セシメタリ

二十四 帝國政府ノ覆滅スルヤ佛蘭西ノ領地外ニ在ル特別財産ハ下テ  
之ヲ失シ其財産ノ受領者ハ外國政府ノ縱マニ處分スル所ト為シリ  
帝國政府ノ嘗テ英國臣民ヨリ没収セシ不動産ノ佛國內ニ在ル者ノ如  
キモ亦然リ「巴里條約」第九條ヲ參觀ス可シ其後千八百十八年五月十五  
日ノ法律ヲ以テ以テ如ク減少セシ特別官有財産ヲ通常官有財産ニ併  
合スルコトヲ確定シ又千八百三十二年三月二日ノ法律ヲ以テ將來決シ  
テ特別官有財産ヲ組成セテ拿破侖第一世ノ侵掠若クハ公約若クハ



密約ニ依テ占有シタル財産ハ總テ之ヲ官有ニ屬セシムルヲ公告セリ

第二章 官有財産ヲ組成スル財産ノ種類

第一節 財産ノ區別

二十五 國家ハ無形人ニシテ即チ一國ノ人民ヲ併合總括スルノ称号ト為ス故ニ國家ハ以テ其國ノ人民ニ代ハルノ義務及ヒ権理ヲ有ス然リ而シテ其権理ヲ施行スルハ乃チ所謂ル主權ノ成ヌル所以ナリ是ヲ以テ國家ハ主權ノ効力ニ依テ租稅ヲ課收シ裁判ヲ宣告シ開戦ヲ公告シ且ツ凡百事物ノ其性質ヨリシ若クハ政治ノ紀綱及ヒ社會ノ秩序ヲ維持スル理由ヨリシテ一人ニ專屬セス一國ニ共屬スル者ヲ處理シ及ヒ提轄スル全權ヲ有ス凡ソ主權ニ密着セル各般ノ権理ト雖モ其毀滅ス可カラヌ又其拋棄ス可カラサルハ全ク主權ト異ナリト無キナリ

二十六 主權ノ存立スル外ニ於テ別ニ國家ニ存スル所有權ノ在ル有リ而シテ是レ彼ノ主權ト全ク其理旨ヲ異ニス蓋シ官有財産ノ一部分ニ關シテハ國家ヲ尋常ノ一人タル所有主ニ同視シ以テ決シテ主權者ト看做サハル場合ノ存スル有リ故ニ國家ハ其一部ノ財産ヲ賣放シ買取シ貸貸シ領收シ及ヒ之ガ為メニ協約ヲ為シ若クハ訟庭ニ辯護スルト猶ホ尋常ノ所有主ノゴトクナルヲ得ン

二十七 是故ニ官有財産ニ二種ノ區別ヲ存ス其一ハ公有財産ト称スル者ニ係リ而シテ政府ノ之ニ對スルヤ常ニ主權ヲ施行シ其一ハ私有財産ト称スル者ニ係リ而シテ政府ノ之ヲ所有スルヤ猶ホ尋常ノ所有主ノ其財産ヲ所有スルガゴトシ

二十八 公有財産モ亦自ラ二種ノ區別ヲ存ス其一ハ財産ノ性質ヨリシ



テ之ヲ賣買若クハ貸借ス可カラサル者ニ係リ其一ハ財産ノ供用ヨリ  
シテ之ヲ賣買若クハ貸借セサル者ニ係ル故ニ種ノ孰シヲ問ハス其保  
存費用ノ國庫ノ負擔ニ屬スル者ニ非サレハ則チ之ヲ公有財産ニ部  
入セサルナリ

二十九 一列及ヒ一邑ノ其財産ノ所有主タルハ亦全ク一國ト異ナル  
無シ故ニ列有及ヒ邑有ノ財産ニ對シテモ均ク上文第二十七項ノ區別  
ヲ施スルヲ要ス之ヲ詳言スレハ列有及ヒ邑有ノ財産ノ其一種ハ公有  
財産ヲ組成シ其一種ハ私有財産ヲ組成スルノ謂ヒナリ〔列制及ヒ邑制  
ノ款目ヲ參觀ス可シ〕

### 第二節 公有財産

三十 公有財産ハ左項ノ種類ヲ包括ス

第一 道路橋梁及ヒ街衢ノ其保存工事ノ政府ノ任ニ屬スル者

第二 鐵道〔列若クハ地方ノ利益ニ關スル鐵道ニ非ス而シテ是レ鐵  
道收益ノ其鐵道讓與ノ目的ト爲レル者ニ限ル〕

第三 電信線ノ其保存工事ノ政府ノ任ニ屬スル者

第四 堡寨及ヒ防禦地營舎ノ門壁塙壕濠塹并ニ要害ノ土地高地ノ  
城砦〔其土地及ヒ城砦ノ使用權ヲ公益若クハ其他ノ用ノ爲メニ讓  
與セルニ拘ラス軍用地ノ生草

第五 海岬地海水ト吞吐スル沼澤及ヒワレックゴエモニ等ノ海藻  
丸ツ沿海ノ斥鹵地ハ之ヲ官有財産ニ部入ス法律學家ノ多ク觀  
察ヲ下ス如ク民法第五百三十八條ニ於テ千七百九十年十一月  
二十二日議定同年十二月一日頒布ノ法律第二條ヲ寫スニ當リ  
誤リテ斥鹵地ヲ公有財産ニ部入シタルハ蓋シ過失モ亦大ナリ  
ト謂フ可シ若シ夫レ海水ハ其本体ノ流動不定ナルヨリシテ何



人ノ所有權ニモ屬スル一區キガ故ニ之ヲ以テ世界人類ノ共有物ト為ス

第六 港埠及ヒ海湾

第七 浮筏行舟ノ河川漕運ノ為メニ堆築セル堤壩浮筏行舟ノ運河及ヒ夏沿岸地

第八 行舟ノ河川運河ノ通過ニ利シキニ船客舟人ノ繫泊ニ便スル津口及ヒ埠頭波堤田地建造物行舟ノ河川ニ屬スル支川行舟ニ耐ハサル支川モ亦之ニ準テ渡船行舟ノ河川ニ通シテ其保存工事ノ政府ノ任ニ屬スル壕塹放水地通路行舟ノ河川ニ屬スル喂水場其他ノ土地

但夕岬路及ヒ引船路ノ如キハ夏沿岸地ノ地務ニ歸セシメテ以テ之ヲ開通ス

浮筏行舟ニ耐ハサル河川ノ流水及ヒ夏河身ハ公有財産ニ部入スルカ若クハ河岸地ノ所有主ニ歸屬スルカノ問題ニ至リテハ今日尚ホ紛紛ノ異論有ルヲ見ル然リト雖モアルセリ一地方ニ於テハ一切ノ水流ト水源トヲ問ハス終テ之ヲ公有財産ニ部入ス

第九 宗教中區ノ宗教大學校及ヒ中管寺其他ノ宗教用建造物ニシテ其保存工事ノ政府ノ任ニ屬スル者

第十 國史及ヒ政府ノ書籍館ニ保藏セル書畫記録製作物紀念牌其他貴重ノ物品博物館ニ保藏セル塑像匾額其他藝術製造ノ物品及ヒ政府ノ創立シテ以テ保存スル學科講習館ニ備具スル各種ノ物件

第十一 嚮形塔紀念碑共同井ノ政府ノ費用ヲ以テ築造セル者及ヒ公同ノ供用ニ充ツル一切ノ財産ニシテ公益ノ為メニ賣買ニ付セ



サレ者

第三節 私有財産

三十一 私有財産ハ有形財産及ヒ無形財産ヲ以テ之ヲ組成ス

第一項 有形ノ私有財産

三十二 有形ノ私有財産ニハ動産及ヒ不動産ノ二種ノ差別アリ

三十三 私有有形動産有形動産ハ五項ノ種類ヲ包括ス

第一 金剛石、玉石、寶具、塑像、匾額、石刻及ヒ動産保藏<sub>ニ</sub>装置<sub>ニ</sub>保藏ス

ル各般ノ動産并ニ君主ノ俸給及ヒ供進ニ関スル法律ヲ以テ使用  
權ヲ君主ニ付與セル各所ノ宮殿其他ノ建造物ニ供具セル各般ノ

動産

第二 觀古技術館、音樂大學、學校其他政府ノ保存工事ニ任スル同種類  
ノ建造物ニ供具セル各般ノ動産

第三 官省ノ局署、僧正ノ宮臺ニ供具セル各般ノ動産及ヒ電信、郵便

烟草、硝薬、印紙等ノ管理局ニ供具セル各般ノ動産

第四 各官衙ニ供用スル料紙及ヒ其保存スル帳簿

第五 渡船、徒刑場及ヒ中央監獄ニ供具セル各般ノ動産

第六 軍隊其他ノ公力ニ配付セル兵器及ヒ官有ノ艦船

第七 官有ノ土地ニ彙見スル寶物、茶見者ノ権理ニ屬スル者ハ以外

ニ在リ

第八 省衙ニ供用スル為メニ政府ノ兵庫倉庫、工場、製造場ニ保藏ス

ル原品及ヒ製作品

三十四 私有有形不動産有形不動産ハ森林、土地、草野、佃作地、宮殿、城、塔、屋

舎、温泉場、海水浴場等ノ公有財産ニ部入セラル者ヲ以テ之ヲ組成シ而  
シテ其種類ハ千八百七十三年十二月二十九日ノ法律第二十二條ノ制



規ヲ施行スル為メニ制定セル種目表ニ於テ之ヲ掲載ス

三十五 此種目表ニ掲載セル者ノ外ニ於テ尚ホ宜ク之ニ加フヘキ有形不動産ノ在ル有リ即チ左ノ如シ

第一 千七百九十年五月九日、九月二十一日及ヒ十一月一日ノ三布告ヲ以テ國家ニ屬セシメタル舊王室財産タル不動産

第二 千七百九十一年四月六日ノ法律ヲ以テ王家ノ諸男ヨリ華収シタル分地

第三 千七百八十九年十一月二日、千七百九十一年九月二十六日、十月十六日、千七百九十二年三月二十八日ノ四法律及ヒ其他ノ法律ヲ以テ漸次ニ國民ノ自由處置ニ屬セシメタル寺院僧侶ノ財産、宗教社團ノ為メ及ヒ、サンラガル<sup>地</sup>、モンカルメル<sup>山</sup>ノ寺院ノ兵士ノ為メニ供與シタル財産

第四 共和曆第七年、ウント<sup>ズ</sup>十四日ノ法律ヲ以テ收回セシ典質若クハ交換ノ不動産

三十六 上文第一項ノ有形不動産ハ其後五項ノ有形不動産ヲ併スニ至リテ大ニ其數額ヲ増加セリ

第一 千八百十年一月三十日ノ元老院議定法律ヲ以テ組成シ而シテ千八百十八年五月十五日ノ歲計法律第九十六條ヲ以テ官有ニ併セタル特別官有財産

第二 舊元老院ニ屬シ而シテ千八百二十九年五月二十八日ノ法律第七條ヲ以テ官有ニ併セタル財産

第三 「オルレアン」侯ニ分與シ而シテ侯ノ千八百三十二年ニ國王ノ位ニ即クニ當リテ官有ニ復シタル財産

第四 千八百八年十二月十一日ノ布告ヲ以テ創設シタル大學翰林



院  
ニ屬シ而シテ千八百五十年八月七日ノ法律第十四条ヲ以テ官  
有ニ係セタル財産

第五 王室財産即チ千七百九十四年五月二十六日、六月一日ノ國會  
議院ノ二布告、千八百十年一月三十日ノ元老院議定法律、千八百十  
四年十一月八日、千八百二十五年一月十五日、千八百三十二年三月  
十日ノ三法律及ヒ千八百五十二年十二月十二日ノ元老院議定法  
律ヲ以テ使用權ヲ君主ニ付與シタル官有財産ノ全部

三十七又左項ニ掲奉スル各種ノ有形不動産モ亦皆私有有形不動産ノ  
部分ヲ成ス者トス

第一 已ニ公益ノ用ニ供セサル堡寨ノ土地及ヒ防禦地ニ非サル都  
市ノ郊郭〔民法第五百一一条〕并ニ國道等ヲ廢シ若クハ削リタル其基地  
第二 久ク海水ノ漸漬スル所ト爲リシモ自然ニ乾涸シ若クハ人工

ヲ以テ乾涸セシメタル土地

第三 嶋嶼及ヒ行舟ニ耐フル河川ノ洲地〔未ク〕期滿ニ因テ人民ノ得  
有ニ係セサル洲地ニ限ル〔民法第六十條〕然レ民法第五百五十六條ノ  
制規ニ生出スル差別ハ之ヲ存セサル可カラス

第四 政府ノ賣買若クハ交換ノ契約ヲ以テシ或ハ不要報契約ヲ以  
テシ或ハ期滿得有ノ名義ヲ以テシテ得有セル不動産

三十八 空主且ツ魚主ノ財産即チ所有主ノ知ル可カラスシテ誰人ニモ  
屬セサル者ト看做セル財産及ヒ兼取者ヲ存セスシテ死セシ人ノ遺  
留シタル財産若クハ兼取者ノ兼取權ヲ拋棄シタル財産〔所謂ル魚兼取  
ノ財産〕ハ亦共ニ其動産タリ若クハ不動産タルニ隨テ官有有形動産ニ  
歸シ若クハ官有有形不動産ニ歸ス

抑モ此ニ種類ノ財産ヲ民法ニ於テ公有財産ニ部入シタル〔第五百三三ハ  
十九條〕



甚々其當ヲ得ス蓋シ民法ノ原條ニハ國有財産ニ部入スルノ語辭ヲ使  
用セシニ千八百七年ニ至リ却テ其國有ノ文字ヲ公有ノ文字ニ改定シ  
タリ

第二項 無形私有財産

三十九 私有無形財産ハ法律ヲ以テ供用スルヨリシテ動産ト為ル物件  
及ヒ収利ヲ生スル諸種ノ權理ヲ以テ之ヲ組成ス民法第五百二十七條及ヒ  
第五百二十九條其収利ヲ生スル權理ノ幾種ハ公有財産ニ由未シテ政府ノ人  
民ニ借貸スルコトヲ得ル者ニ係リ而シテ他ノ幾種ハ或ハ私有ノ有形財  
産ニ由未シ或ハ法律ノ制規ニ由未シテ政府ノ人民ニ借貸スルコトヲ得  
可キ者ニ非ス

四十 政府ノ借貸ニ付スル各種ノ權理ハ左ノ種類ト為ス

第一 浮筏行舟ノ河川及ヒ政府ノ保存工事ニ任スル運河ニ漁業ヲ

為スノ權理

第二 渡船ヲ造設シ及ヒ政府ノ保存工事ニ任スル橋梁ニ抽銭スル

ノ權理

第三 私有森林ニ獵業ヲ為シ及ヒ公有財産タル水流ニ獵業ヲ為ス

ノ權理

四十一 政府ノ借貸ニ付スルコトヲ得サル各種ノ權理ハ左ノ種類ト為ス

第一 法律ノ明文ニ依拠シテ重罪輕罪若クハ違警罪ニ由未スル物

件ヲ沒取スルノ權理

第二 罰金ヲ徵収スルノ權理

第三 無所屬ノ財産即チ所有主無ク若クハ之ヲ知ル可カラサル財

産ヲ占領スルノ權理

第四 漁業製ノ財産ヲ占領スルノ權理



第四節 王室財産

四十二 第二帝國政府ノ覆滅セルヨリ以還我カ佛國ニ於テハ復ク王室財産ノ存スルヲ無シ故ニ嘗テ千八百五十二年十二月十二日ノ元老院議定法律ヲ以テ皇帝ニ供与ミタル財産ハ今日ニ在リテハ其幾種ハ之ヲ公有ニ併セ他ノ幾種ハ之ヲ私有ニ歸ス此供與財産ヲ組成セル者ノ種類ハ宜ク本書ノ王室供與財産ノ款目ニ就キテ觀ルヘシ

第三章 官有財産ノ管理法

第一節 総論

四十三 夫シ官有財産ハ本來性質ヲ殊異ニスル二個ノ元素ヨリ成立シ而シテ余カ既ニ説述セシ如ク此二個ノ元素ハ畫一ノ原則ノ管知スル所ニ非スシテ各自ニ特別ナル原則ノ管知スル所ト為ルハ讀者能ク已ニ領會セシナル可シ

四十四 公有財産ト私有財産トハ其<sup>關</sup>聯甚ク密着セル者ニシテ彼等共ニ官有財産ニ外ナラス然リト雖モ其供用ノ殊異ナルヨリシテ彼等ノ間ニ一大區別ヲ生スルニ至ル夫シ國家ハ恰モ尋常ノ一人タル所有主ノ如ク財産ヲ所有シ全然ニ他人ノ干渉ヲ絶テテ以テ自由ニ其財産ヲ處置スル権理ヲ有ス然レモ其財産ノ幾部分ハ公同ノ供用ニ充ツル有リ而シテ其供用ノ殊異ナルハ即チ是レ之ニ公有財産ノ名義ヲ與ヘタル所以ナリ

四十五 此ノ如ク二種ノ財産ハ其供用ノ殊異ナルヨリシテ隨テ之ヲ管知スル原則ニ亦自ラニ種ノ差別ヲ存ス故ニ新法ニ於テ官有財産ニ可轉付ノ原則ヲ施スヤ唯之ヲ國家ノ其私有ノ名義ヲ以テ所有スル財産ノニニ限縮シ而シテ公同ノ供用ニ充ツル財産ハ之ニ及シテ不可轉付ノ原則ヲ施スハ依然昔時ニ異ナルヲ魚キナリ〔民法第二十二條〕



四十六 今ヤ不可轉付ノ原則ハ如何カ之ヲ領會スルヲ要スルカ以テ原則  
ハ今日ニ在リテハ昔時ニ於ケル如ク決シテ侵犯ス可カラサル者ニ非  
スニテ是レ寧ク唯タ不可轉付ノ規例ヲ提示シ以テ單純ニ其立存セル  
一ヲ證明スルニ過キサルノミ凡ク公有財産ヲ組成スル各種ノ原素ト  
雖他日ニ至リテハ其公同ノ供用ニ充ツル一ヲ罷ムルヨリシテ轉シ  
テ私有財産ト為ル一ニ充キニ非ス例ハ國道ノ如キハ公同ノ供用ニ充  
ツルヲ以テ之ヲ公有財産ニ部入スルモ若シ一旦其供用ヲ廢スレハ則  
チ其基地ハ便チ乍チ私有財産ト成リ又例ハ城砦地ノ塹壕ノ如キハ  
其土地ノ城砦ニ充ツルノ日ニ之ヲ公有財産ニ部入スルモ一旦防禦ノ  
準備ヲ撤スレハ則チ其塹壕ハ亦輒チ私有財産ト為ルガ如シ

四十七 以テノ如ク公有財産ノ部分ヨリ除奪シテ他ノ私有財産部分ニ轉  
屬セシムルニハ或ハ明許ヲ以テスルヨリ或ハ黙許ヲ以テスルヨリ凡  
ソ以テ除奪轉屬ノ明許ニ成ルハ明カニ之ヲ命令シタル場合ニ在リ而シ  
テ其黙許ニ成ルハ特別ノ供用ニ充テテ而シテ公同ノ共用ヲ容サレハ場  
合ニ在リナリ例ハ道路若クハ開墾地ニ關スルガ如シ又例ハ一旦  
賣放ニ付シ而シテ將來竟ニ原初ノ供用ニ復スル一ヲ得サルガ如シ

四十八 讀者ノ閱過ニ未ル如ク官有財産ノ一部分タル公有財産ヲ以テ  
不可轉付ノ者ト為スノ原則ハ決シテ政府ノ適當ナリト判定スル場合  
ニ於テモ之ヲ賣放スル一ヲ容ササルニ非ス然レモ主權者ノ明許ヲ取  
ラスニテ賣放スル如キハ則チ其原則ノ決シテ容ササル所トス何トナ  
レハ不可轉付ノ原則ハ常ニ必ス期滿不得有ノ結果ヲ生スル者タルヲ  
以テナリ

四十九 公有不動産ノ轉シテ私有不動産ニ屬スルニ或ハ明許ヲ以テシ  
或ハ黙許ヲ以テスルハ余カ上項ニ説示スル所ノ如シ然レニ總令ニ黙許



許ニ因テ轉屬セシムル場合ニ係ルモ必ズ行政官ノ事為ノ見ニ存スル  
有ルヲ要ス行政官ノ單ニ認容シ若クハ否ニ供用セサル場合ノ如キ  
ハ未タ以テ或者ノ説ク如ク之ヲ黙許轉屬ノ成ル者ト見ル可カラス若  
シ然ラスト言ハ、則チ其期滿不得有ノ定則ハ全ク後法ニ歸ス可キノ  
ニ是故ニ若シ一人有リテ城砦地ノ一部ヲ開墾シ而シテ行政官ノ見テ  
以テ之ヲ禁遏セサル有ルモ彼レ決シテ期滿法ニ據リテ其土地ヲ得有  
スルヲ能ハス之ニ及シテ行政官ノ其供用ノ自ラ公有財産ニ屬スル土  
地ヲ將テ既ニ其供用ヲ變換セル有ルニ若シ一人有リテ之ヲ占領シタ  
ル如キハ則チ期滿法ニ依リテ之ヲ得有スルヲ得可シ又或者ハ行政  
官ノ之ヲ供用セサルハ恰モ其事為ノ絶無ト一般ニ後未ノ供用ニ充テ  
サルノ旨趣ヲ表スル者タリト主張スト雖氏是レ實ニ徒贅ノ論辯ニ屬  
ス蓋シ若シ然ル者ト為セハ則チ何等ノ種類ニ係レル公有財産タルヲ  
問ハスニテ都テ期滿法ニ依リテ之ヲ得有スルヲ得シ然ルニ其期滿  
得有ノ一事ハ吾カ法律ノ正文ニ於テ明ニ禁止セル者ニ非スマヤ

第五節 公有財産ニ特施スル定則

五十一 公有財産ハ各種ノ原素ヨリ成立スル者ニシテ其原素ノ種世ニ隨  
ヒ管轄ノ權理ヲ各省ニ分有ス

五十二 故ヲ以テ城砦地ノ土地、塔、塚、堡、塞等、如キ陸軍ニ供用スル公用  
財産ノ監視及ヒ保持ノ管轄權ハ之ヲ陸軍省ニ屬シ海軍ニ供用スル公  
用財産ノ監視及ヒ保持ノ管轄權ハ之ヲ海軍省ニ屬シ陸路、水路等ノ如  
キ公有財産ノ監視及ヒ保持ノ管轄權ハ之ヲ工部省ニ屬ス

次各種ノ公有財産管理法ノ節目ハ本書ノ海軍、工部、城砦地ノ三款目ニ  
於テ之ヲ詳述ス防衛地務及ヒ聯合工作ノ各款目ヲ參觀ス可シ

五十二 今次ニ讀者ノ注意ヲ喚起スル一事ノ在ル有リ即チ凡ソ財産ノ



其何人ノ管理ニ屬スル者タルヲ問ハズ之ヲ賣放シ若クハ之ニ生スル  
収益ヲ徵收シ若クハ之ニ存スル所有權ヲ辯護スル如キ場合ニ當リテ  
ハ必ス官有財産管理局ノ其事ニ干渉スルヲ要スル者是ナリ

### 第三節 私有財産ニ特施スル定則

#### 第一款 財産ノ變換

##### 第一則 財産ノ得有

五十三 私有財産ヲ得有スル其第一ノ原由ハ敵地ヲ侵略スルニ存ス嘗  
テ帝國政府ノ法制ニ於テハ侵略ニ得有スル土地及ビ之ニ生出スル財  
産ヲ以テ所謂特別官有財産ナル者ヲ組成シタリニ千八百三十二年  
三月二日ノ法律ヲ以テ此種ノ財産ノ存立ヲ將來ニ禁シ而シテ之ヲ私  
有財産ニ歸セシメタリ是ヲ以テ「アルゼリ」ヲ侵略セルノ後「アルゼリ」  
「酋長」ノ政府ニ屬スル財産ヲ奪取シ以テ大ニ私有財産ノ數額ヲ増加  
セシムルニ至リ

五十四 此非常ナル得有ノ方法ヲ除キ凡ソ私有財産ノ數額ヲ増加セシ  
ムル方法ヲ舉グルハ左ノ如シ

#### 第一 生存贈與及ビ遺囑贈與

此等ノ贈與ニ関シテハ直チニ法律上ニ於テ其得有ノ成ルニ非マ  
受領者ノ承諾ヲ表スルヲ待テ始メテ成ル者トス然リ而シテ凡  
ソ民法ニ規定スル所ノ承諾ハ此場合ニ於テハ政府ハ都テ布告ヲ  
以テ之ヲ表セサル可カラス千八百七十四年四月二日ノ布告ニ依ル  
ニ政府ノ此承諾ヲ表スル布告ヲ發スルヨリ以前ニ其踐行ヲ要ス  
ル各般ノ法式ヲ指示セリ

#### 第二 購買

凡ソ要報契約ヲ以テスル購買ハ或ハ假約法ニ依リ或ハ徵買法ニ



依リテ益ノ為メニ國庫ノ帑金ヲ以テ之ヲ為ス

根約法ヲ以テ購買スルニハ其有効ヲ証スル為メニ時ニ布告ヲ發スルヲ要セス然レ氏若シ購買ノ價直ニ充ラタル定額ヲ以テ見  
實ノ價直ヲ支辨スルニ足ラサレハ則チ其要用スル金額ハ必ス特  
別ノ法律ヲ以テ之ヲ伎ス可キナリ

又根約法ヲ以テスル購買ハ行政上ノ法式ヲ用ヒテ以テ之ヲ為ス  
トヲ得可シ之ヲ詳言スレハ州長若クハ其代理官ノ購買ヲ決行ス  
ルニ妨ケ莫キナリ又或ハ公証人ノ干渉ニ依リテ以テ之ヲ為ス  
ヲ得可シ若シ財務省ノ所轄局署ノ經費ヲ以テ購買スル場合ニ在  
リテハ凡ソ契約書ノ交換財産ノ授受及々其他購買ニ関スル事為  
ハ總テ官有財産管理局ノ其關係局署ニ協議シテ以テ之ヲ施行ス  
〔千八百二十四年十月十日〕若シ夫レ他ノ各省ノ所轄局署ノ經費ヲ以  
テ一日ノ管轄省ノ裁令

テ購買スル場合ニ在リテハ官有財産管理局ハ唯其關係局署ノ照  
會ヲ受ケタル時ニ於テノ職外ノ名義ヲ以テ其事ニ関與ス

第三 期滿得有

凡ソ財産ノ期滿法ニ依リテ官有ニ歸スルハ猶ホ官有財産ノ期滿  
法ニ依リテ一己人ノ私有ニ歸マルカコトニ〔民法第百二十二條〕

第二則 財産ノ轉付

五十五 政府ハ其私有財産ヲ轉付スル権理ヲ有シ而シテ其之ヲ轉付ス  
ルニ競賣法ヲ以テスルハ是レ通常ノ規例ト為マ又或ハ特ニ指定セル  
或種ノ場合ニ於テ根約法ヲ以テスルモ之ヲ轉付スルヲ得可シ

五十六 競賣法ヲ以テ轉付スルヤ其不動産ノ價直ノ百萬ヲラシニ超過  
セサル場合ニ於テハ特別ノ法律ヲ以テスルヲ要セス〔千八百六十四  
年六月一日ノ  
法律〕然レ其金額ニ超過マル場合ニ於テハ必ス特別ノ法律ヲ以テスル



トヲ要ス

五十七 左項ノ場合ニ於テハ政府ハ協約法ヲ用ヒテ其私有財産ヲ轉付スルコトヲ得可シ

第一 沮澤地若クハ斥鹵地ヲ轉付シ堤壩ヲ築キテ海水ヲ去ル權理ヲ轉付シ及ヒ河川湍瀨ノ裏泥若クハ洲渚ヲ轉付スル場合（千八百七十九年九月十六日ノ法律第四十一條）

第二 路傍地ノ所有者ニ對シ其道路ノ一部ニ取リテ其所有地ヲ展増スルコトヲ允許スル場合（同上ノ法律第五十三條）

第三 邑道ノ線限内ニ在ル官有地ヲ轉付スル場合（千八百三十九年九月十一日ノ法律第五十五條以下ノ各條）

第四 州邑ノ公益ノ為メ若クハ公同ノ工作ノ受讓者ノ為メ徵買法ヲ用ヒテ官有地ヲ轉付スル場合（千八百四十一年五月十三日ノ法律第十三條及ヒ第二十六條）

第五 徵買セル土地ヲ其目的ノ使用ニ充ラサルニ當リテ原所有者ノ更ニ其轉付ヲ請求スル場合（同上ノ法律第六十條及ヒ第六十一條）

第六 陸路若クハ水路ノ廢絶ニ由ルル土地ヲ其傍地ノ所有者主ガ轉付ヲ請求スル場合（千八百四十二年五月二日ノ法律第三條）

第七 官有ニ屬スル分界壁ヲ轉付スル場合（民法第六百一十一條）

五十八 允ラ競賣法ヲ用ヒ若クハ協約法ヲ用ヒテ私有財産ヲ賣放スルニ當リ其價直ヲ算定シ廣告貼紙ヲ掲示シ及ヒ射票規約簿ヲ録製スル如キ允ラ豫メ踐行ス可キ法式ハ官有財産管理局長ノ別長ノ許可ヲ取リテ以テ之ヲ踐行ス然リ而シテ別長ハ躬親ヲ其賣放ノ事務ヲ處理シ或ハ郡長若クハ賣放ニ付スル不動産ノ存在セル邑ノ邑長ニ委任シテ之ヲ處理セシム別長ハ此權理ヲ郡長若クハ邑長ニ委任スルヤ其賣放ニ付スル不動産ノ價直ノ五百フランニ超過スル場合ニ在リテハ必ス



關係者ノ准許ヲ取テサル可カラス又官有財産管理局ハ官有財産管理局長若クハ代理官ヲシテ其實效ノ事務ニ干渉セシム

### 第三則 財産ノ交換

五十九 轉付ト得有ト一時ニ併到スルヲ交換ト謂フ故ニ交換ハ必ス財産ノ轉付ヲ致ス者タルニ因リ法律ヲ以テスルニ非サレハ則テ之ヲ為スコトヲ得ス然リト雖モ別ニ一特例ノ存スル有リ即チ新道ヲ開通スル為メニ政府ノ要申スル基地ノ所有主ト舊道ノ基地ノ所有主タル政府トノ間ニ交換ヲ為ス場合はヤリ（十八百三十九年五月法律第四十條）

六十 凡ソ私有財産ノ交換ヲ為スニハ必ス之ヲ財務卿ニ申請スルコトヲ要シ而シテ後ニ財務卿ハ交換スル財産ヲ鑑定シテ以テ其結果ヲ別長官有財産管理局及ヒ參議院ニ通報ス財務卿ノ此事ヲ處理スル順序ハ千八百二十七年十二月十二日ノ條例ニ規定セハ法式ニ準依ス可キ者トス

### 第二款 財産ノ處置

#### 第一則 財産ノ處置ニ任スル職官

六十一 凡ソ政府ノ私有ニ屬スル一切ノ財産陸軍ニ屬スル財産ヲ除クテ管理シ處置シ及ヒ保持スルハ純テ財務卿ノ職掌ニ存シ而シテ財務卿ハ之ヲ其補助官ニ委任ス故ニ補助官ハ財務卿ノ權下ニ屬シテ其監視ヲ受ケテ以テ其等ノ事務ヲ處置ス各州ノ官有財産管理局長及ヒ森林管理局長ハ即チ財務卿ノ補助官ト為シ而シテ其補助官ニ附屬スル官吏ハ各州各郡ニ於テハ州長ノ補助官ト為ス又州長ハ其等ノ事務ニ關シテハ亦均ク財務卿ノ權下ニ屬ス

六十二 凡ソ私有財産ノ管理及ヒ處置ニ關シテ意見ヲ提出スルハ通常各州ノ官有財産管理局長ノ職權ニ屬シ州長ハ唯之ニ對スル監視ノ作



用ヲ施スノミ以テ職官ノ意見ノ合致セサル有レハ則チ總テ財務卿ニ  
取決ス

六十三國地防禦ノ必要ナルヨリシテ陸軍卿ニ許典スルニ軍用供備ノ  
財産ヲ管理スル一大権理ヲ以テシテ而シテ其管理ノ権理ハ千七百九十  
一年七月八日議定十日頒布ノ法律ヲ以テ之ヲ陸軍部ノ職官ニ委任セ  
リ然レ氏今日ニ在リテハ凡ソ軍用供備ノ土地及ヒ屋舎ノ貸借契約ヲ  
締結シ若クハ之ヲ改換スル如キハ必ズ官有財産管理主務官ノ之ニ干  
渉スルヲ要ス故ニ其土地及ヒ屋舎ノ賃金ヲ徴収スルハ總テ官有財産  
管理局ノ主務官ノ職任ニ屬ス

六十四上文ニ説ク所ニ録テ之ヲ觀シハ官有財産管理局ノ職務ハ凡テ  
有形物件ヲ處置スルノ存スルヲ知ル可シ故ニ官有財産管理局ハ各  
種ノ債金土地屋舎ノ賃金及ヒ財産ノ價金ヲ徴収シ動産ノ賣放ヲ處置  
スルノ任シ又財産ノ貸借賣買交換ノ契約書并ニ射票規約簿ヲ録製  
スルノ任シ又別長ニ協議シテ以テ公事ノ供用ニ充ツル者ト吾テサ  
ルトラ問ハス凡ソ官有財産ニ係ル告訴ノ法式ヲ按查シ且之ヲ踐行シ  
テ各種ノ裁判所ノ裁判執行ヲ完結セシムルノ任シ又政府ノ名義ヲ  
以テ凡ソ官有財産ニ屬スル各般ノ財産ヲ所有スルノ任スル者トス

第二則 財産ノ公事ノ供用

六十五私有財産ニ或レ之ヲ公事ノ供用ニ充テ或レ之ヲ公事ノ供用ニ  
充テサルノ有リ千八百五十年二月十六日ノ法律第四條ニ依リ官有  
不動産ヲ公事ノ供用ニ充ツルニハ法律ヲ以テスルニ非カレハ則チ能  
ハサル者ト為セリ此制規ハ千八百五十二年三月二十四日ノ布告ヲ以  
テ之ヲ廢銷シタリ蓋シ公事ノ供用ニ常ニ多クハ要急ノ場合ニ係リ且  
ツ緩急ニ供用スルモ其不動産ノ官有タル性質ニ害スル魚キヲ以テナ



リ此ノ如ク單ニ千八百五十年ノ法律ヲ廢銷ニ付シタルニ因リ當テ此  
法律制定以前ニ官有財産ヲ管制セル彼ノ千八百三十三年六月十四日  
ノ條例ヲシテ再々其効カヲ生セシメタリ故テ以テ今日ニ在リテト私  
有財産ヲ公事ノ供用ニ充ツル為メニ布告ヲ發スルニハ關係者ト財務  
省ト相協議スルトヲ要シ而シテ其布告ニハ財務卿ノ意見ヲ表証シ關  
係者卿々之ニ對署シ以テ法律編冊ニ加載ス

六十六條ノ如ク公事ノ供用ニ充ツル私有財産ノ處置ヲ為スノ權理ハ  
其供用セル衙署ニ專屬スト雖モ其供用財産ノ所有權ニ關スル訴訟ヲ  
提起スル權理若クハ其供用財産ノ收益ヲ徵收スル權理ハ即チ官有財  
産管理局ニ專屬ス

第三則 不動産ノ貸借契約

六十七條公事ノ供用ニ充テサル私有財産ニシテ而モ之ヲ轉付スルノ事  
宜ニ合セスト判定スル者ハ千七百九十年十月二十八日ノ布告第二篇  
第一條ノ終則ニ準依ミテ以テ之カ處置ヲ為ス即チ私有財産ハ總令ニ  
無形ノ權理ニ係ルモ之ヲ貸貸ニ付スル義務ヲ行政官ニ負擔セシメタ  
リ此定則タル常ニ能ク實際ニ行ハレ唯其時宜ニ應ミテサシク斟酌ヲ  
加ヘタル有ルノミ余ハ既ニ無形權理ノ得テ貸貸ニ付ス可カラサル者  
アルトテ説述シ而シテ其種類ハ亦既ニ之ヲ舉示セリ他別ニ此貸貸ノ  
定則ニ對スル一大特例ノ存スル有リ彼ノ千七百九十一年八月十九日  
ノ布告ニ據レハ凡ソ貸貸ニ付スルモ亦得テ多クノ利益ヲ見ル可カラ  
サル者ハ行政官ノ直接ニ之ヲ管理スルトテ認許ニ以テ千七百九十年  
ノ布告ノ廣泛ナル定則ニ對スル特例ヲ立定メタリ

六十八條長ハ本州ノ首地タル郡ニ於テ郡長ハ本郡ニ於テ邑長ハ郡長  
ノ委任ヲ受ケ本邑ニ於テ共ニ政府ノ名義ヲ以テ各自ノ管轄スル行政



區域ハ見在セル不動産ノ貸貸契約ヲ締結スル貸貸契約ハ官有財産  
管理局ノ指揮ヲ受ケ且ツ通常勅令競借法ヲ用ヒテ以テ之ヲ締結スル  
レ氏其勅令ノ遂ニ結果ヲ得ス若クハ特別ナル景況アルヨリニ其財  
産ヲ公衆ノ競借ニ付ス可カラサルハ關係省卿ノ裁令ヲ以テ協約ノ  
貸貸ヲ為スヲ認許ス而シテ管轄省卿ハ以テ権理ヲ州長ニ委任シ以テ貸  
金額五百フラン以内ニ係ル者ヲ要セシメタリ

第四章 官有財産ニ関スル訴訟  
第一節 訴訟ノ管轄権

六十九凡ソ官有財産ノ訴訟ニ関シテハ收益金及ヒ資本金ノ徴収ヲ目  
的ト為セル告訴ト動産及ヒ不動産ノ所有權ニ関スル告訴トヲ區別ス  
ル區別ノ由示スル所ハ此ニ個ノ場合ニ於テ其告訴ヲ為ス方法ノ相異  
ナルニ在リ

七十行政権ノ管轄ト裁判権ノ管轄トヲ指定スル法律及ヒ規則ニ於テ  
官有財産ニ起生スル訴訟ニ関シテ一個ノ區別ヲ立テ其行政権ノ管  
轄ニ歸スル訴訟ハ以テ行政上ノ訴訟ヲ成シ其裁判権ノ管轄ニ歸スル  
訴訟ハ以テ裁判上ノ訴訟ヲ成ス

七十二次行政権ノ管轄ト裁判権ノ管轄トノ分立ハ千七百九十年八月  
十六日議定二十四日頒布ノ法律第二篇第十條ヲ以テ之ヲ規定シ又爾  
後ノ法律就中千七百九十一年九月三日ノ憲法第三篇第五條第一條第  
三條及ヒ共和憲法三年アリユクテ千七百九十六日ノ法律ニ於テモ此分立  
ノ事ヲ明揭セリ

七十二官有財産ニ関スル訴訟ノ行政裁判ノ管轄ニ歸スル者ハ凡ソ政  
府ノ其一國ノ主權ヲ以テ施行スル各種ノ権理ニ関シテ起生スル諸般  
ノ訴訟是ナリ又其司法裁判ノ管轄ニ歸スル者ハ政府ノ其一已ニタル



資格ヲ以テ施行スル各種ノ権理ニ関シテ起生スル諸般ノ訴訟是ナリ  
七十三 行政権ト裁判権トノ管轄ヲ區別スル大則ハ此ノ如シ故ニ若シ  
單純ニ之ヲ解釋シ去レハ則チ容易ニ行政<sup>裁判</sup>管轄ニ屬スル訴訟ト司  
法裁判管轄ニ屬スル訴訟トヲ辨別スルコトヲ得ニ然ルニ特別ノ法律ヲ  
以テ以テ互管轄ノ大別ニ對スル特別ヲ設ケタル者蓋シ多シトセサル  
ナリ

第一款 行政裁判ノ管轄権

七十四 共和曆第八年「アリウウ」ノ二十八日ノ法律ニ於テ行政権ノ管  
轄ニ歸スル訴訟事件ヲ指定セリ

七十五 共和曆第八年ノ法律第四條ニ依リハ凡ソ官有財産ニ關シテ  
起生スル訴訟ハ別參事署ニ於テ之ヲ裁決シ得ス

七十六 常テ千七百八十九年ノ革命ヲ經ルニ迄ニ僧侶并ニ外國ニ逃移

セル者ニ收奪ニ及ビ政変ニ刑罰ヲ受ケタル者ニ收奪セシ財産ヲ賣  
放ニ付スルニ當リ魚數ノ賣放契約ヲ締結シ然シテ其賣放契約ヲ踐行  
スルヤ亦隨テ多般ノ紛<sup>争</sup>ヲ起發セリ蓋シ此紛<sup>争</sup>ノ起因ハ原<sup>有主</sup>有主ノ  
其所有權ヲ主張シ或ハ行政官ノ其所有權ヲ證明ス可キ憑記ヲ有セザ  
ルニ存ス是ニ於テ多般ノ紛争ヲ排解スル為メ之ヲ司法裁判権ノ  
管轄ニ付セントスルカ司法裁判権ハ專ラ純正ノ法理ヲ執ルヲ主眼ト  
為ス者ナルヲ以テ必ス多クハ失宜ヲ見ル有ラシ是故ニ必ス之ヲ政府  
ノ權下ニ屬スル官司ノ管轄ニ付セサルコトヲ得サルノ情勢ニ在リ然リ  
而シテ初メ賣放契約ヲ締結スルヤ多クハ地方行政官ノ之ヲ處理セル  
ヨリシテ其事ニ起因スル訴訟ハ總テ之ヲ別參事署ノ裁決ニ付シタリ  
七十七 上文ニ説述セル如ク政治ノ餘勢ヨリシテ此種ノ訴訟ノ管轄権  
ヲ別參事署ニ歸セシメタルハ是レ不動産所有權ノ争訟ニ關スル裁判



管轄ノ原則ニ抵触スル情状タル形勢カ、変更スルト同時ニ宜ク消滅ニ  
歸スヘキ者ニ似タリ然ルニ之ニ及ミテ其賣放ノ何レノ時代ニ係ルヲ  
問ハス九ツ賣放ノ事ニ関シ起生スル訴訟ヲ別參事署ノ管轄ニ歸セシ  
ムルハ尚ホ是レ今日ニ見行スル確定不変ノ原則ト為ス乃チ今見ニ別  
參事署ノ管轄ニ於テ裁決スル者ハ左ノ如シ

第一 行政官ノ締結セル賣放契約ノ効力ヲ裁決ス之ヲ詳言スレハ  
賣放契約ノ法式ヲ踐行スル完全ナルカ若クハ賣放ノ禁例ニ背反  
スル所ナキカ若クハ詐偽ノ事為ニ出ツル者ナキカヲ審査スルナ  
リ

第二 其契約書ノ意義ヲ解釋シ及ヒ契約書ニ包載セル物件ヲ指定  
ス之ヲ詳言スレハ契約書ノ包括スル領域ヲ明ニスルナリ

〔七十八〕別參事署ノ賣放契約書ヲ解釈スル権力ハ當之ヲ落案條約書ニ  
施スノミナラス尚ホ鑒定審査書落案公告書其他賣放ニ附随スル一切  
ノ文書ニ施スヲ得可シ

〔七十九〕茲ノ如ク賣放契約書ヲ解釋スル権力ハ專ラ之ヲ行政官ニ屬セ  
シムルト雖モ其賣放契約ヲ実行セシメ又原所有券票貸借契約書証人  
申告書實地検査書若クハ假所有証書ニ依據シ或ハ普通法ノ定則ヲ適  
用シテ以テ其契約書ノ緘黙若クハ脱漏若クハ疎錯ニ係ル者ヲ補正シ  
或ハ其賣放契約書ノ緘黙ニ付セル場合ニ於テ舊法律ノ制規若クハ普  
通法ノ定則若クハ本地方ノ慣例ヲ施スニ非サレハ則チ得テ判明ス可  
カラサルノ事件ヲ裁定スルニ至リテハ一ニ裁判権ノ職掌ニ屬シ復タ  
行政権ノ興リ知ル所ニ非ス

〔八十〕裁判権ヲシテ行政官ノ録製セル文書ニ解釋ヲ興フル権理ヲ有セ  
シメサルハ即チ是レ社會ノ秩序ヲ維持スル方法ノ然ラシムル所ナリ



抑モ社會ノ秩序ヲ維持スル方法ハ凡ソ何等ノ事由ヲ存スル者モ能ク  
之ヲ壓スルコトヲ得テ而シテ若シ或ハ其方法ノヤシク具ハラサル有シ  
ハ則チ政府ハ常ニ之ヲ補ハサル可カラス

八十一 故ヨ以テ司法裁判所ハ若シ行政官ノ録製セル文書ノ意義ニ関  
シテ争訟ノ起テスルコト有シハ則チ原告兩造ヲ行政裁判所ニ送付シ以  
テ其解釋ヲ請求セシムルヲ要ス然リト虽モ裁判官ノ行政官ノ録製セ  
ル文書ノ意義已ニ明瞭ナルコトヲ認定シテ之ヲ実行セシムルハ縱令ハ  
其意義ニ兩様ノ解釋ヲ下<sup>ス</sup>可ク若クハ其曖昧ナルコトヲ口實ト爲シテ原  
被兩造ノ裁判官ニ抗辯スル有ルモ決シテ其権限ヲ踰越スル者ト言フ  
可カラス若シ政府ノ代理官ガ文書ノ意義ニ説明ヲ取ルヲ必要ナリト  
思量スル有レハ則チ裁判官ハ行政官ニ付シテ以テ其解釋ヲ爲サシメ  
サル可カラス但夕其本件ヲ裁決スルノ職権ハ猶ホ之ヲ裁判官ノ掌裡

ニ握存ス

八十二 抑モ刑參事署ノ官有財産ノ賣放契約書ニ解釋ヲ共<sup>ル</sup>ハ是レ  
裁判權ヲシテ行政官ノ録製セル文書ニ解釋ヲ共<sup>ハ</sup>シメサル原則ヲ施  
行スル所ニシテ且ツ其文書ヲ録製セル官司ヲシテ之ニ解釋ヲ共<sup>ハ</sup>シ  
ムル常則ニ拘ラサル所ノ特例ニ係ル者ナリ

八十三 共和曆第七年ウント<sup>ノ</sup>ガ十四日ノ法律第十四條ニ據レハ舊王  
室財産ヲ典質ニ取レル人ニシテ其法律ノ規定セル所ニ準テ依スル者ハ  
之ヲ彼ノ民有財物ヲ購買得有セル人ニ同視セリ故ニ其典取人ノ爲メ  
ニ締結セル賣放契約ノ有効無効ヲ裁決スルハ亦タ刑參事署ノ職権ニ  
屬ス然レモ若シ本來典質ノ部分ニ入ラス隨テ其法律ニ規定セル方法  
ヲ以テシテハ有効ニ賣<sup>放</sup>スルコトヲ得サル官有財産ヲ把テ却テ其賣放  
契約中ニ包載セルコトヲ摘發シ以テ其契約ノ無効ニ帰ス可キコトヲ言フ



者有レハ則チ豫審ヲ以テ最初ノ典質契約ニ包括スル所ヲ裁判セサル  
可カラズ斯ノ如キ場合ニ在リテハ此法律第二十七條ニ依ルニ未タ別  
參事署ノ其本訟ヲ受理セサル以前ニ司法裁判所ニ於テ先ツ豫審ノ裁  
判ヲ下ス可キ者トス

八十四以上ノ各項ヲ約括スレハ則チ曰ハシ九ツ裁判ノ管轄ニ區別ヲ  
立テ以テ嘗テ轉付セル官有不動産ニ関シ政府ト各人トノ間ニ起ル  
ル争訟ハ之ヲ司法裁判所ノ管轄ニ歸シ其轉付契約ノ意義ノ解釋ニ関  
スル争訟ハ之ヲ行政裁判所ノ管轄ニ歸スルハ是レ裁判例ト法學家ノ  
意見ト相合致シテ復タ異議ヲ見ル魚シト

八十五立法権ノ干渉ニ若クハ干渉セサル官有財産ノ讓與ニ関シテモ  
并同一ノ區別ヲ立ツルヲ得可シ故ニ若シ行政官ノ録製セル文書ノ  
意義ニ解釋ヲ要スルト有レハ則チ行政裁判所ニ於テ之ヲ管轄ス然レ  
氏其文書ノ意義明白ニシテ而モ之ヲ実行ニ若クハ受讓者及ヒ他ノ関  
係外人ノ讓與契約ニ依據セス他ノ名義若クハ普通法ノ定則ニ依據シ  
テ以テ争訟ヲ提起スル場合ハ則チ司法裁判所ニ於テ之ヲ管轄ス

八十六官有財産ノ賣放契約ノ意義ヲ解釋スルハ專ラ別參事署ノ職程  
ニ歸ヤシムルヤ以テ如シ然レハ讓與契約ノ意義ヲ解釋シ及ヒ之ヲ評  
定スルハ即チ參議院ノ直轄ニ屬セシム蓋シ主權者ノ録製セル文書ニ  
起生スル争訟ヲ裁判スルハ獨リ參議院ノ管轄スル所タシハナリ

八十七凡ソ官有財産ヲ交換スル場合ニ於ケルヤ其交換ノ為メニ法律  
ヲ發スル以前ニ行政官ノ其所屬職官ニ交換ノ結約ヲ為スルヲ認許ス  
ル如キ單純ナル行政上ノ行為ニ關シテ起生スル争訟ハ行政裁判所ニ  
非サレハ則チ<sup>決</sup>ニテ裁判ヲ為スルヲ得ヌ又交換ノ為メニ發スル法律  
ニ於テ認許セル交換契約ニ起生スル争訟モ均ク之ヲ行政裁判所ノ管



轄ニ帰セシメサレハ則チ官有財産ノ轉付ニ関スル裁判例ニ確遵スル者ト謂フ可カラス嘗テ參議院ノ千八百三十七年四月二十三日ニ於テ下セル裁判ヲ觀ルニ即チ此旨趣ヲ取レル者ニ似タルモ其他二三ノ裁判ニ於テハ交換契約ニ起生スル争訟ヲ民事裁判所ノ管轄ニ屬セシメタリ然リ而シテ又更ニ此裁判例ニ齟齬スル裁判ノ在ル有リテ或ハ民事裁判所ノ管轄ヲ交換契約ノ意義ニ解釋ヲ供フルニ止メ或ハ其争訟ノ裁判ヲ為スニ及ハシメタリ

〔八十八〕行政官ト各人トノ間ニ締結スル交換契約ノ若シ協議ニ成リテ以テ公益ノ工作ニ供スル土地ヲ得有セシムル者ニ係レハ之ニ関シテ起生スル争訟ヲ民事裁判所ニ管轄セシムルヲ猶ホ其契約ノ公益ノ工作ニ供スル土地ヲ徵買スル者ニ於ケルゴトキハ復シ毫モ疑ヲ存セス然リト雖モ主権者ノ錄製セル文書ノ意義ニ解釋ヲ供フルニ至リテハ乃チ常ニ行政裁判所ノ管轄ニ歸スル者タルヲ知ル可シ

〔八十九〕共和曆第八年「フロール」三日ノ法律第二條及「千八百二十三年六月十八日」布令第二十二條ニ依レハ鎮泉ノ所有權ニ関シ邑ト政府トノ間ニ起生スル争訟ハ之ヲ別參事署ノ管轄ニ歸セシム然レモ此持例ハ其後「千八百五十六年七月十四日」ノ法律第二十條ヲ以テ之ヲ廢止シ而シテ更ニ民事裁判所ノ管轄ニ歸セシメタリ

〔九十〕行政官ノ締結スル不動産貸借契約即チ行政官ノ或ハ不動産ノ貸借者タリ或ハ其貸借者タル一方ノ契約主ト爲リテ以テ締結スル契約ハ之ヲ本書ノ不動産貸借契約ノ款目ニ於テ説述スルニ因リ唯此ニハ官有財産ノ貸借契約ニ起生スル争訟ハ法律ノ特ニ之ヲ行政裁判所ノ管轄ニ歸セシムル場合ニ非サレハ則チ行政裁判權ノ管知スル限ニ在ラサルヲ讀者ニ注意セシムルノミ



九十一 凡つ州參事署ノ行政詞訟事件ニ関シ宣言セシ裁判ニ對スル控  
告ノ必ズ參議院ノ管轄ニ屬スル場合ハ即チ是レ行政裁判權ノ管轄ニ  
歸スル訴訟ニ係ルコトヲ知ル可シ

第二款 司法裁判ノ管轄權

九十二 凡つ特別裁判所タル行政裁判所ニ委任スル職務ハ即チ當ニ通  
常裁判所タル司法裁判所ノ職務ヨリ分割セシ者ニ係リ其然カセル  
所以ハ何ツヤ蓋シ是レ一大緊要ノ存スル有レハナリ其法律ノ明カニ  
司法裁判所ノ職務ヨリ分割セシ者ヲ把テ已ニ之ヲ上文ニ舉示シタシ  
ハ其彼レニ遺殘スル者ハ自ラ之ヲ知ルヲ得ニ

九十三 司法裁判所ノ管轄スル重要ノ訴訟ヲ舉ケレハ左ノ如シ

第一 所有權ヲ護<sup>持</sup>シ若クハ之ヲ回復スル訴訟

但チ政府ノ私有ニ屬ス可キ性質ノ不動産ニ関スル者タルコトヲ要  
ス之ヲ詳言スレハ其不動産ノ不可轉付及ヒ期間不得有ノ公有財  
産ニ係ラサル者タルコトヲ要ス之ニ及スル場合ニ於テハ其所有權  
ハ本来必ズ他人ノ權ニ繫屬スル者ナルニ因リ所有權回復訴訟  
ノ根據ト為ラサルナリ

第二 動産及ヒ不動産ノ所有權ニ関スル訴訟

其訴訟ノ公益ニ涉ルト否ヲサルトヲ問フテ也又行政官ノ其不  
動産ヲ公有財産ノ部ニ屬スト主張スル場合ニ亦同シ

第三 界標及ヒ期間得有ノ事ニ関スル訴訟

第四 對物權抵當權領先權及ヒ行地務權ニ関スル訴訟

但チ行地務權ニ関シテハ其存立及ヒ施行ノ實ニ行政官ノ獨リ專  
ラ監視スル所ノ公益ニ關係スル場合ノ如キハ之ヲ本項ノ外ニ置  
ク又會計官吏ノ財産ニ對シ國庫ノ有スル抵當權及ヒ領先權ニ関



シテハ唯其公簿登記ノ先後及ヒ効力ノ如何ニ係ル訴訟ノ司法  
裁判權ノ管轄ニ歸ス

第五 不動産賃借契約ノ踐行ニ関スル訴訟

但ト上文ノ九十項及ヒ不動産賃借契約ノ款目ニ準示スル特別ハ  
此限外ニ在リ

第六 政府ノ有ニ歸スル諸般ノ遺産及ヒ其私有財産ノ部分ニ屬ス  
ル無形権理ニ関スル訴訟

第七節 官有財産ノ訴訟ニ関シテ政府ノ代理ニ任マル職官

九十四条ハ既ニ上文ノ六十九項ニ於テ公有財産タル動産若クハ不動  
産ノ所有權ニ関シ起生スル訴訟ト政府ノ收益金若クハ資本金ノ徴収  
ニ関シ起生スル訴訟トヲ區別スルノ意ヲ緊要ナルコトヲ説述マリ讀者  
宜ク就キテ觀ルヘシ

第一款 官有財産ノ所有權ニ関スル訴訟

九十五 千七百九十年十月二十八日議定十一月五日頒布ノ法律千七百  
九十一年三月十五日議定同月二十七日頒布ノ法律共和曆第四年ニウオ  
一ノ十九日ノ法律及ヒ訴訟法第六十九條ニ據ルニ官有財産ノ所有權  
ニ係リ起生スル訴訟ニ関シテハ原告ト為ルト被告ト為ルトヲ問ハス  
別長其事ニ任ス蓋シ別長ハ此事ニ関シテハ換事ニ代ハリ且ツ特別ノ  
代理者ニ任ス

九十六 然レ氏千七百九十一年八月十九日議定九月十七日頒布ノ法律  
ヲ以テ官有財産ヲ保存スル職任ヲ官有財産管理局ニ委ニタルニ由リ  
凡ク其公益ニ供スルト否ラサルトヲ問ハス官有財産ノ所有權ニ関シ  
起生スル訴訟ニ必要ナル各般ノ文書ハ總テ換局ノ干渉ヲ經可キ者ト  
ス千八百三十八年五月六日ノ布令ノ前引ニ於テモ亦此事ヲ明言セル



有リ

九十七 其千八百三十八年、布令ヲ發下スルヨリ以前已ニ千八百三十  
四年七月三日ノ財務卿ノ布達ヲ以テ官有財産ニ関シ訴訟ノ起生スル  
ニ當リ司法裁判所ニ向テ政府ノ辯護ニ関スル職官ノ負擔ス可  
キ義務ヲ規定セリ有リ其第六條ニ依リハ凡ソ政府ノ利益ヲ護持スル  
為メニ構起スル訴訟ハ別長其  
刑ノ官有財産管理長之ヲ追理ス又其第七條ニ依リハ別長、自ら辯護  
者タル為メニ司法裁判所ノ召喚ヲ受ケレハ則チ別長其召喚狀ヲ官有  
財産管理長ニ送付ス又其第八條ニ依リハ官有財産管理長ハ辯護書ヲ  
草定シテ以テ別長ノ認可ヲ取り第二十條ニ依リハ本別ノ官有森林管  
理局長及ヒ其他ノ局署ノ管理ニ若クハ使用スル官有財産ニ関シテ訴  
訟ノ起生スル有リハ則チ關係局署ノ職官ヲ以テ政府ノ権理ヲ辯護ス

ル丁ニ関スルセシム

九十八 千八百三十八年五月六日ノ布令ハ其千八百三十四年ノ布達ノ  
効カラ確認シテ曰ク凡ソ公事ノ供用ニ充ワルト否ラサルト問ハス  
官有財産ニ関シ起生セル訴訟ニ必要ナル各般ノ文書ハ本別ノ官有財  
産管理長先ツ別長ニ商議シ且ツ財務卿ノ監視ヲ受ケテ以テ之ヲ草定  
シ司法裁判所ノ裁判ノ執行ヲ完結スルニ至ルマテ其追理ニ任ス又各  
首所轄ノ在列事務長ハ各其管理スル事務ニ関シ政府ノ権理ヲ辯護ス  
ル丁ニ関スル為メニ各其保存スル地圖及ヒ証憑文書ヲ別長ニ送付  
シ以テ官有財産管理長ニ轉致セシメ且ツ各其意見ヲ之ニ副具スル丁  
ヲ要スト

九十九 其和曆第八年カレウイオノ二十八日ノ法律ハ別長ヲ以テ本別  
ノ権理ヲ施行スル丁ニ任セシメ而シテ若シ別ト政府トノ間ニ争訟ノ



起生スル有レハ則チ別參事署ノ宿任議官李別ノ名義ヲ以テ其管理及  
ニ辨護ニ任ス

百 若シ司法裁判所ノ裁判ノ政府ノ名義ヲ以テ為シタル結言ニ及對セ  
サル場合ニ當リ若シ對主ノ破毀裁判所ニ上告ヲ有レハ則チ  
官有財産管理局長ハ其争訟財産ノ見在セル別ノ別長ノ名義ヲ以テ直  
チニ其上告ニ對スル辨護ヲ為シ復タ豫メ財務卿ノ許可ヲ取ルルヲ要  
セス

百一 若シ司法裁判所ノ裁判ノ政府ノ名義ヲ以テ為シタル結言ニ及對  
セル場合ニ當リテハ財務卿先ツ官有財産管理局ノ意見ヲ聽キ而ル後  
ニ其裁判ニ對スル上告ヲ為スト其官有財産ヲ裁判ノ要分ニ委スルト  
ヲ決定ス若シ上告ヲ為スニ決定スル場合ニ於テハ官有財産管理長其  
争訟財産ノ見在セル別ノ別長ノ名義ヲ以テ上告ス

百二 官有財産ニ關スル告訴ノ権理ヲ施行スルハ全ク別長ノ職權ニ存  
ス其告訴ノ司法裁判所ノ管轄ニ歸マスニテ別參事署ノ管轄ニ歸スル  
場合ノ如キモ亦然リ但タ參議院ノ管轄ニ歸スル告訴ニ關シテハ財務  
卿ノ政府ノ名義ヲ以テ其事ニ任ス可キ者トス

百三 千七百九十一年七月十日ノ法律ヲ以テ軍用地ノ保存ヲ陸軍卿ノ  
職務ニ屬セシメタルニ因リ陸軍卿ハ軍用地ニ關スル告訴ヲ查覈シ及  
ヒ之ヲ為スノ権理ヲ握有ス是ヲ以テ官有財産管理局ノ如キハ復タ其  
告訴ニ關涉スルル一區ニ辨及ビ百三十四年三月三日ノ參議院ノ裁然リト  
雖モ訴訟法第六十九條ニ依レテ官有財産及ヒ之ニ存スル諸般ノ権理  
ニ關スル争訟ノ起奈マルニ當リテハ別長ヲ以テ政府ニ代リ司法裁判

所ノ名譽ニ應セシムルガ故ニ軍用地ニ關スル告訴ノ如キモ亦均ク此  
訴訟法ノ制規ニ遵依ス可キニ似タリ



第二款 各般ノ徴収ニ関スル告訴

百四 千七百九十一年三月二十日ノ法律ニ於テ官有財産管理局ニ委任スルニ封建政度ノ世代ニ慣行セル賦課金其他官有財産及ヒ民有財物ニ屬スル無形権理ノ收益金ヲ徴収シ且人民ノ此等ノ無形権理ヲ買回スル價直金及ヒ人民ノ此等ノ無形権理ヲ貸借スル貸直金ヲ徴収スル職務ヲ以テシ又同年九月十二日ノ法律ニ於テ此他更ニ之ニ委任セルニ官有財産ニ生出スル收益金ヲ徴収スル職掌ヲ以テセリ加之ノミナラス共和曆第九年ウニトゾ二十七日ノ法律第十七條ニ依レハ曰ク司法裁判所ハ辯護人ノ辯護ヲ待タス又代書人ノ干渉ヲ待タスニテ單純ノ告訴狀及ヒ各辯書ヲ原被ノ彼等ニ送達シ以テ官有財産管理局ノ擔<sup>任</sup>セル諸般ノ徴収ニ関スル訴訟事件ヲ審査スト是レ共和曆第十一<sup>年</sup>アリウイオゾ十三日ノ破毀裁判ニ依テ之ヲ解スレハ官有財産タル

收益金資本金其他登記税金抵當税金裁判費用金ノ如キ凡其官有財産管理局ノ徴収ヲ擔任セル諸般ノ收入金ヲ指言スル者タリ

百五 是ニ録テ之ヲ觀シハ凡ク此等ノ徴収ニ関スル告訴ハ官有財産管理局直接ニ之ヲ提起シ復タ別長ノ干渉ヲ待タサルヲ知ル然レ其告訴ノ根據スル権理若クハ各分ノ有無ヲ争フ場合ニ在リテハ別長ハ官有財産ニ関スル訴訟ノ法式ニ遵依シテ之ニ干渉ス

第三節 官有財産ニ関スル訴訟ノ法式

百六 官有財産ニ関スル訴訟ノ法式ニ於テモ亦其<sup>財產ノ</sup>所有權ニ関スル訴訟ト其財産ノ收益金及ヒ資本金ノ徴収ニ関スル訴訟トヲ區別セザル可カラス

第一款 官有財産ノ所有權ニ関スル<sup>告</sup>訴訟

百七 別長ノ提起スル告訴ハ其一部ハ普通訴訟法ニ遵依シ他ノ一部ハ



特別訴訟法ニ遵依ス可キ者トス今其特別訴訟法ヲ下文ニ約説セシ

百八十七百九十年十一月五日ノ法律第三章第十五條ニ據ルハ何人タルヲ問ハス政府ニ對シ司法裁判所ニ告訴スルニハ豫メ單純ノ請告書ヲ本列ノ統宰官今日ニ在ラハ別長ニ呈致セリル可カラズ又請告書ニハ必ス其鳴訴セントスル事件ヲ叙述ス抑テ其請告書ヲ呈致スルハ其目的務メテ裁判上ノ告訴ヲ為スルヲ避ケルニ在ルヲ以テ其對主タル行政官ニ上庭狀ヲ傳達スル以前ニ先ツ之ヲ彼レニ呈致スルヲ要ス是レ勸解ヲ取ルノ初歩タリ訴訟法第四十九條ニ於テ官有財産ニ關スル告~~事~~ハ勸解ヲ經由スルヲ須ヒスト規定ミタルハ蓋シ其請告書ヲ呈致スル一法式ノ存スル有ルニ由レリ若シ別長ノ其請告書ヲ接受セル月内ニ之カ答辯ヲ為サレハ則チ對主ハ直チニ司法裁判所ニ告訴スルヲ得可シ

百九十七百九十年十一月五日ノ法律第十三條及チ第十五條ノ概説ナル文辭ニ依テ之ヲ推スルハ政府ノ對主ノ其分限ノ如何ヲ問ハス別長若クハ各人及チ各種ノ會社ヲ包括ス又本訴ト再訴ト附帶訴トヲ論セス總テ豫メ請告書ヲ行政官ニ呈致スルヲ要スル者ト結論セサル可カラズ

百十然リト雖モ又對訴若クハ追証訴ニ至リテハ假令モ附帶訴ニ係ルモ其本訴ノ目的ト性質トヲ變換セサレト必シモ豫メ請告書ヲ行政官ニ呈致スルヲ要セズ若シ參議院ヨリ司法裁判所ニ訴訟事件ヲ送付スレハ則チ其送付ハ以テ其告訴ノ豫准ト其効力ヲ同クス若シ行政官ノ施セル催督ノ處分ニ服セシテ構成スル告訴ニシテ普通法ニ依拠スル等タルハ之ヲ司法裁判所ニ投呈セサル可カラズ又初審裁判ニ於テ被告タル者ノ政府ノ勝訴ニ對シ上告スル場合ノ如キ亦均ク其豫准



ヲ取ルルヲ要セス

又別参事署及び参議院ニ投呈スル訴訟ニ関シテハ行政官ノ豫准ヲ取  
ルルヲ要セス蓋シ此ニ個ノ行政裁判所ハ亦来自ラ政府ニ對スル紛議  
ヲ評定スル職權ヲ有スルハナリ

百十二 千七百九十年十一月五日ノ法律ニ從一ハ若シ豫メ請吉書ヲ行  
政官ニ呈致セサレハ則チ其訴訟ハ全ク無効ニ歸スト明言セリ然ルニ  
裁判例ニ於テハ稍ヤ此制規ニ斟酌ヲ加ヘテ以テ之ヲ施行セリ蓋シ其  
決定スル所ニ據レハ謂ヘラリ此條ニ規定セル無効ノ制規ハ社會ノ秩  
序ヲ維持スル目的ノ存スルニ非ス是ヲ以テ其或ハ已ニ告訴ヲ裁判所  
ニ投置シテ被告ニ上庭狀ヲ送付セル頃叙ヲ履ミタル以後而モ未タ他  
ノ順叙ヲ履マサル以前ニ於テ請吉書ヲ行政官ニ呈致シ行政官ノ其許  
認ニ答辨セル有レハ則チ以テ此無効ヲ承タス丁無シト

百十二 已ニ豫メ請吉書ヲ行政官ニ呈致シ且ツ已ニ之ヲ別廳書記局ノ  
公簿ニ登録スレハ則チ經令ヒ一月内ニ被告ニ上庭狀ヲ送付スル法式  
ヲ缺クテ有ルモ亦以テ期滿失權期間ノ經過ヲ遮断ス之ニ及シテ豫メ  
請吉書ヲ行政官ニ呈致スル丁無クシテ直チニ司法裁判所ニ告訴スル  
丁有レハ經令ヒ已ニ其投呈頃叙ヲ履ミテ被告ニ上庭狀ヲ送付シタル  
モ  
テ期滿失權期間ノ經過ヲ遮断セカレ何トナレハ此上庭狀ノ送付ハ  
遂ニ無効ニ歸シ而シテ民法第二百四十七條ニ依ルニ若シ法式ヲ  
踐行スルノ完全ナラザル為メニ上庭狀ノ無効ニ歸スル場合ニ於テハ  
期滿失權期間ノ經過ヲ遮断セカレ者ト為セハナリ

百十三 又千三百三十四年七月三日ノ司法編ノ布達第一條ニ據ルニ何  
人ニ對スルヲ問ハス政府ノ名義ヲ以テ司法裁判所ニ告訴スルニハ亦  
別ノ官有財産管理長豫メ請吉書ヲ別長ニ呈致シ以テ別長ヲシテ証憑



書類ト共ニ其訴訟事件ヲ對主ニ通知シ以テ一月内ニ之カ答辯ヲ為ス  
可キヲ命令セシムルニ非サレト則チ其告訴ヲ為スルヲ得ス若シ其一  
月ノ期間ヲ超過スレバ則チ別長ハ指令ノ法式ヲ用ヒテ其請告ヲ裁決  
ス  
百十四 此請告<sup>書</sup>ヲ呈致シ又之ヲ對主ニ傳達シ若クハ又對主ノ之ニ答辯  
シタルモ決シテ期滿失權期間ノ經過ヲ遮斷シテ以テ政府ノ利益ヲ成  
スノ結果ヲ生スルト無シ

百十五 別長ノ稟告ト為リテ告訴ニ若クハ被告ト為リテ辯護スルニハ  
刑務署ニ諮問ヲ經ルヲ要セ又參議院ニ豫准ヲ取ルヲ要セス唯政  
府ノ訓令ニ遵フヲ要スルノミ若シ政府ノ権理ヲ法度ニ張ルヲ要スト  
判定スル則チ財務卿ノ豫准ヲ取ルヲ待タスモ直チニ司法裁判所ニ  
告訴ニ若クハ之ニ辯護ス之ニ及ビテ對主ノ申訴ヲ有理ナリト思量セ

ハ則チ其意見ヲ對主ニ通知スルト無クシテ八日内ニ財務卿ニ具申シ  
財務卿ニ官有財産管理局ニ諮詢シテ以テ別長ノ意見ノ可否ヲ裁定ス  
百十六 又別長ノ稟告ト為リ若クハ被告ト為ルモ決シテ代書人ノ干渉  
ニ頼ル<sup>ト</sup>ヲ要セ又共和曆第四年<sup>テ</sup>ルミドール十日ノ統率政府ノ布達  
ニ據ルニ別長ヲ以テ政府ノ権理ヲ維持スル告訴狀若クハ答辯書ヲ換  
事ニ送致セシメ而シテ換事ニ對シテハ其事件ノ性質ニ應ジテ必要ナ  
リト判定スル方法ヲ施シ及ヒ結言ヲ為スノ権理ヲ付與シタリ今日ニ  
在リテモ率子裁判例ニ於テ其布達ヲ施行シ而シテ別長若クハ政府ノ  
代官タル官有財産管理局ノ主務員ニ對シテハ代書人ノ干渉ニ頼ラ  
サル権理ヲ認識ス然リ而シテ其之ヲ用フルト否ラサルトハ一ニ政府  
ノ隨意ニ付スト由<sup>レ</sup>政府ノ概子其干渉ヲ待タサル無シ

百十七 別長ノ控訴裁判所ニ控告シ及ヒ破毀裁判所ニ上告スルニハ必



ス財務卿ノ豫准ヲ取ルヲ要ス〔千八百三十四年七月三日ノ規則第十四條及ヒ第十八條〕然レハ是レ唯タ政府ノ利益ヲ謀ルニ出ツル所ノ處置ニシテ法律ノ規定セル者ニ非サルニ由リ綴令ニ依リ規則ニ遵依セサルモ對主ハ決シテ之ヲ其口ニ藉キテ以テ其無効ヲ訟撃スルコトヲ得ス

百十八 訴訟法第四百五十六條及ヒ第四百七十七條ニ於テ其第六十九條第一款第一項ノ制規ヲ以テ控訴ノ通知狀ニ推施セリ之ヲ詳言スレハ其原裁判ノ通知狀ハ假令ヒ本列ノ官有財産管理長ノ住居ヲ指署シタルモ其控訴ノ通知狀ハ必ス之ヲ列長ニ送達シ若クハ其住居ニ送達セサル可カラズ

百十九 動産ノ所有權ト官有財産主務員ノ賣放セル動産物件ノ買得權トニ交渉スル司法裁判上ノ争訟ハ綴令ニ其動産物件ノ本ト陸軍省ノ管轄ニ屬スルモ列長ト官有財産主務員ト相協議シ而シテ官有財産ニ關スル訴訟ノ法式及ヒ千八百三十四年七月三日ノ規則ニ準據ニ以テ其始終ノ處事ニ任ス〔千八百四十三年十二月〕殊ニ其動産物件ノ老廢軍馬ニ係レル場合ノ如キハ固ヨリ然ルナリ

百二十 凡ソ刑參事署ニ告訴スル事件ハ原被ノ請告書ト答辯書トニ依テ審査ヲ行ヒ以テ其裁決ヲ為ス者ニシテ即チ千八百六十五年七月十二日ノ布告ニ於テ凡ソ刑參事署ニ告訴シ訴牒ト証憑書類トヲ供呈シ被告ノ答辯ヲ原告ニ通知シ裁判宣告書ヲ録製シ且ツ其騰本ヲ原被ニ送付シ及ヒ之ヲ保存スル各般ノ法式ヲ規定セリ〔本書刑參事署ノ款目ヲ參觀ス可シ〕

百二十一 共和曆第八年アリウイオーズ二十八日ノ法律ヲ以テ刑參事署ノ管轄ニ付シタル官有財産ノ訴訟ニ關スル裁判ニ對シテ控訴スル者アルヤ千八百十一年ヨリ以前ニ在リテハ財務省ニ設置スル官有財産



管理部ノ主任參議院議官之カ審査ヲ行ヒ而シテ直接ニ參議院ニ向テ  
其報告ヲ為セリ然ルニ千八百十一年二月二十三日ノ布告ヲ以テ財務  
省ノ官有財産管理部ヲ廢シ刑參事署ノ裁判ニ對スル控訴ハ直接ニ之  
ヲ行政詔訟委員ニ投呈シ行政詔訟委員ハ千八百六年六月二十二日ノ  
規則ニ準依シテ以テ其事件ヲ審査ス可キカヲ規定シタリ

第二款 各般ノ徵收ニ関スル告訴

百二十三 官有財産ノ課税及ヒ收益ノ徵收ニ関シテハ官有財産管  
理局ノ專任ヲ以テ共和曆第七年アリノルニ二十二日ノ法律及ヒ共和  
曆第九年ウアントーニ二十七日ノ法律ニ規定セル法式ニ遵依シラ司法  
裁判所ニ告訴ス登記税ノ徵收ニ関シテモ亦之ニ同シ唯々<sup>其</sup>異ナル所ヲ  
舉ケレハ以徵收ノ催督狀ハ官有財産管理長之ヲ捺付シ而シテ其財産  
ノ所在地ヲ管轄スル民事裁判所ノ所長<sup>其</sup>催督狀ヲ換認シテ施行ノ効  
カヲ具ヘシメ<sup>〔千七百九十九年九月〕</sup>且ツ徵收金額ノ多クニ隨テ或ハ二  
個ノ裁判所ノ裁判ヲ經ル有ルニ

百二十三 官有ノ動産及ヒ不動産ヲ賣放セル價直ノ徵收ニ関シテハ其  
催督狀ハ官有財産管理長之ヲ捺付シ而シテ所長之ヲ換認シ以テ施行  
ス可カラシム又<sup>其</sup>催督ニ服セズシテ構起スル告訴ハ若シ其不服ノ催  
督權ノ有無如何ニ存セサレハ則チ猶ホ課税及ヒ收益ノ徵收ニ関スル  
事件ノコトクニ之ヲ處置ス若シ催督權ノ有無ヲ爭フ場合ニ於テハ千  
八百三十四年七月三日ヲ以テ財務卿ノ捺下セル規則ニ掲示スル法式  
ニ遵ヒ猶ホ官有財産ノ所有權ニ關スル事件ノゴトクニ之ヲ處置ス  
百二十四 不動産ヲ賣放セル價直ノ殘額ヲ徵收スルニ就キテモ亦官有  
財産管理長其催督狀ヲ捺付シ而シテ所長之ヲ換認シ以テ施行ス可カ  
ラシム



百二十五 共和曆第十一年、テリミドール四日ノ政府ノ布達第四條ニ依  
リ、別長ハ、終審ヲ以テ裁決ヲ為ス、但シ計算上ノ争訟ニ関シテハ對主  
ニ許ス、財務卿ニ上告スルノ一途ヲ以テシ、又千八百十三年十一月十  
一日ノ布告ニ據レハ、對主ヲシテ財務卿ノ裁令ニ對シ、參議院ニ上告ス  
ルヲ得セシメタリ

アルバールウエルビー識

索引書目

官有財産管理局ノ訓令告達類集（定時刊行）  
「アンウ」ノ著述セル國有財産摘要（本書ハ國有財産ニ生出スル既往  
及ヒ將來ノ収入額ヲ係記スル者ニ係ル）千八百十九年巴里印  
「サラン」ノ著述セル官賣不動産賠償須要（千八百二十一年  
刊行）千八百二十一年巴里印  
「ピリエ」ノ著述セル官賣不動産賠償須要（千八百二十一年  
刊行）千八百二十一年巴里印

「ピリエ」ノ著述

新鐫博物誌官有財産篇（是レ印刷師モローノ抄）刊行セル者ニ係ル（千  
八百二十七年）

「バリエ」ノ著述

セル「バリエ」ノ著述セル典質官有財産論（千八百二十七年）刊行セル者ニ係ル（千  
八百二十七年）

「ログロン」ニ氏ノ合著セル古今官有財産法制考（附典質官有財  
産司法行政面義）千八百二十九年巴里書肆「アレキス」

「セウフル」ノ著述セル典質官有財産論（本書ハ、獨逸皇帝ノ各時代及ヒ  
佛蘭西國王ノ各時代ニ於テ典質ニ付シタル官有財産ヲ論スル者ニ係  
ル）千八百三十年ストラスブル書肆

「エル」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆

「バリエ」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆

「バリエ」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆

「バリエ」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆

「バリエ」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆

「バリエ」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆

「バリエ」ノ著述セル「バリエ」ノ著述セル佛蘭斯國有財  
産考（附國有財産管理法）千八百三十八年巴里書肆



「フザール」ノ著述セル公簿登記及國有財産辞典（本書第二部ノ第一篇ニ  
國有財産第二篇ニ抵當証記第三篇ニ管理方法第四篇ニ會計方法ヲ記  
述ス（著者發兌（巴里）

「オービシエー」ノ錄製セル登記兼官有財産管理局訓令告律（合當表）  
十八年（巴里）書肆「アー」  
「グウラ」發兌

「ペーガルブロー」ノ著述セル羅馬佛蘭西公有財産法典附羅馬公用徵  
買法註釋（千八百五十九年巴里）

「デーガラ」ノ著述セル國有財産賣放期滿得有法（千八百五十九年巴  
里書肆「アー」發兌

國有邑有公立院舎附屬財産賣放期滿得有法（千八百六十年巴里書肆「オ  
「ビュルペラ」ノ著述セル公有財産論附緒言（本書）期滿得有及ヒ裁判管  
轄ノ二点ニ関シ公有財産ト私有財産トノ區別ヲ論スル者ニ係ル（千八

十年巴里書肆「オ」  
スト「グウラ」發兌

「マシヤル」ノ著述セル海岬地管制法律概略（是レ千八百六十年五月  
七月及ヒ九月發兌ノ行政新誌ニ余ヲ逐ヒ刊載セル者ニ係ル（千八百六

「ウル」ノ著述セル國別邑及公立院舎附屬財産賣放期滿得有法（千八百六十二年巴里書肆  
「ゴウドリ」ノ著述セル公有私有財産論（千八百六十二年巴里書肆

「ゼロ」ノ著述セル官有財産主務職員必携會計辞典（千八百六十九年巴  
里書肆「オ」發兌

「ダロー」ノ裁判例類集（第七卷）「カバント」ニ「ユル」五十二「五」フル及ヒセリ

ニ「諸氏」ノ著述セル各行政法論  
其他ノ書目ハ本書登記局ノ款目中索引書目（新）就キテ觀ル可シ

對照行政法



各種ノ官有財産ヲ區別スルハ本ト羅馬法ヲ以テ基礎ト為セル者ニ  
シテ是レ蓋シ物理ノ自然ニ從フト言フモ不可ナル莫シク何等ノ  
邦國タルヲ問ハス其官有財産ハ必ス之ヲ公有ト私有トノ二種ニ區  
別シ又其國有部舒ノ財産ト州有及ヒ邑有ノ財産トヲ混濇セシムル  
ト庶シ世ノ著述家就中獨逸國ノ著述家ハ專ラ王室財産ノ權理ヲ論  
明スルニカム思フニ日久シカラスニテ必ス各邦國ニ於テ一變不変  
ノ制度ヲ立ツルニ至ラン今日已ニ各邦國ニ於テモ其王室財産ハ多  
クハ之ヲ國有ニ歸シ而シテ唯ク國家ノ所有ト君主ノ私有トノ二種  
ヲ存スル有ルノミ然ルニ是レ內國ノ政治ニ關マル問題タルヲ以テ  
今茲ニ之ニ論及スルヲ要セス鑛山若クハ田野ノ如キ不動産ヲ管  
理スル方法ノ得失如何ハ獨逸國ニ在リテハ其著述家ノ大ニ講究ス  
ル所タルモ余ハ復ク之ヲ以テ論セス但ク余ハ殊ニ讀者ニ注意セシ  
ムル者有リ獨逸國ノ如キハ封建政度ノ之ヲ統治スル年歴既ニ久シ  
ク遂ニ許多ノ小侯領ニ分裂スルノ結果ヲ致シ隨テ國家ト君主トヲ  
混視シ君主特權ノ理論大ニ張リテ以テ羅馬法ノ官有財産ヲ區別ス  
ル基礎ヲ蕩没シ而シテ以テ論旨ノ歸極スル所ハ君主ノ權力ニ附  
シムルニ神秘幻妙ノ職務ヲ以テスルニ至レリ以テ理論タル今日全ク  
衰滅ニ歸セルニ非サルモ頗ル勢力ヲ失スルニ傾向ス之ヲ詳論ス  
ルハ公法歴史ニ屬ス余ハ唯ク讀者ニ其概要ヲ知ラシメント欲スル  
ノミ

英吉利ニ於テハ千八百六十六年八月六日ノ法律ヲ以テ海岸地及ヒ  
河身地等ヲ王室財産ニ部入セリ是レ君主ノ特權ニ尚ホ餘セル所ノ  
財産ナリ而シテ之ヲ國有ニ歸セシムルニハ必ス其賠償ヲ君主ニ供  
與スルヲ要ス



モリスブロック識



公用徵買

目次

第一章 徵買不可キ物件ノ公用徵買公告ノ請求者及ヒ其公告ヲ為スノ法式

第二章 徵買以前ニ施行ス可キ行政上ノ措置

第一款 総則

第二款 邑工作ニ特施スル定則

第三章 協約讓與

第四章 徵買裁判及ヒ徵買不動産ニ對スル優先權抵當權對物權

第一款 徵買ノ裁判

第二款 徵買裁判ノ公布及ヒ結果

第三款 所有主ノ徵買ヲ要催スル場合

第四款 徵買裁判ニ對スル控訴

第五章 賠償金ノ評定

第一款 豫辨ノ事務關係者ノ指定及ヒ行政官ノ供給

第二款 徵買審査員ノ編制

第三款 徵買審査員及ヒ關係者ノ招集并徵買審査員ノ踐行スル

法式

第四款 賠償金額評定ノ規則

第五款 徵買審査員ノ裁判ニ對スル控告及ヒ其裁判ノ解釋

第六章 賠償金ノ交付

第七章 雜則

第一款 徵買ニ必要ナル文書ノ錄製法式其送達及ヒ登記稅其他ノ課稅ノ免除



第二款 先買、権理

第八章 特別、定則

第一款 要急、徴買

第二款 要急若クハ非要急、軍用工作

索引書目

對照行政法

目次畢



第一章 徵買ス可キ物件○公用徵買公告ノ請求者及テ其公告ヲ  
為スノ法式

一千八百四十一年五月三日ノ改定徵買法律ハ今日ニ在リテ凡ソ公用  
不動産ノ徵買ニ関スル完全ノ成法ト視ル可キ者ニシテ其第一條及テ  
第二條ノ正文ヲ擧クレハ左ノ如シ

公用不動産ノ徵買ハ裁判權專ラ之ヲ行フ

裁判所ハ已ニ其公用タルヲ認ムル檢覈ヲ經テ此法律ニ規定スル法  
式ニ準シ徵買ヲ公告シタル不動産ニ非サレハ徵買ヲ命スルヲ得  
ス

其法式ハ第一ニ法律若クハ布告ヲ以テ各人ノ所有スル不動産ノ徵  
買ヲ要スル共同工作ノ舉行ヲ准許シ第二ニ若シ其法律若クハ布告  
ニ於テ共同工作ヲ舉行スル場處若クハ土地ヲ指定セサルニ當リテ

ハ州長ノ布達ヲ以テ之ヲ指定シ第三ニ州長ノ布達ヲ以テ徵買ヲ行  
フ可キ不動産ヲ指示スルニ在リ

凡ソ何等ノ不動産タルヲ問ハス此法律第二篇ニ掲載スル定則ニ照  
遵ニ關係者ヲシテ不服ノ申告ヲ為スヲ得セシムル頃叙ヲ踐ムノ後  
ニ非サレハ則チ之ヲ徵買スルヲ得ス

二上文ニ擧示スル二條ニ依テ之ヲ觀レハ法律ノ精神ト物理ノ自然ト  
ヲ論セス純然タル不動産ニ對スルニ非サレハ則チ徵買ヲ行フ可カラ  
サルヲ知ルニ足ル是ヲ以テ千八百三十五年八月二十六日及七十月  
二十一日ノ參議院ノ審判ニ於テモ彼ノ千八百三十三年七月七日ノ法  
律即チ千八百四十一年五月三日ノ法律ヲ以テ改正ヲ加ヘタル者ハ唯  
夕地屬不動産徵買ヲ目的ト為スニ因リ特別ノ法律ニ明言スル場合ニ  
非サレハ則チ一工業ヲ傳廢セル為メニ賠償ヲ要求スル者アルニ當リ



テ之ヲ施サ、ルヲ裁定シ又千八百二十六年三月三日ノ破毀裁判ニ  
據ルモ公用ノ為メニ著述者ノ專賣權ヲ徵買スルハ未タ嘗テ法律ノ許  
サ、ル所ナルヲ認識セリ此原則タル即チ以テ各般ノ無形財産ニ施  
ス可キ者タルヤ明白疑フ無キナリ

一工業ヲ停廢スル場合ニ當リテハ絲毫モ賠償金ヲ付與セサル可キ  
カ是レ別種ノ問題ニ係ル故ニ此ニ之ヲ論究セス

三假令ニ不動産タルモ其性質ノ本来不動産ニ係レル者ニ非サレハ則  
チ徵買ヲ行フ可カラズ若シ夫レ其供用ヨリシテ不動産ト視做ス者ハ  
徵買ヲ行フ可キ限ニ非サルナリ

又純然タル不動産ニシテ千八百四十一年三月三日ノ法律ヲ適施ス可  
カラサル者有リ即チ或種ノ商會ニ讓與シタル運河及ヒ鑛道ノ如キ殊  
ニ其著シキ者トス抑モ運河及ヒ鑛道ハ倘シ純粹ニ之ヲ言ハハ縱令ニ

無期ノ讓與ニ係ルモ決シテ真正ノ所有物ヲ成スヲ無ク是レ唯タ特殊  
ノ契約ニ因リ受讓者ニ帰屬セシメタル有用ノ財産タルニ過キサレヲ  
以テ之ニ通常ノ徵買法ヲ施スハ未タ十分ニ適切ナリト為ス可カラズ  
是故ニ特ニ千八百四十五年五月二十九日ノ法律ヲ制設シ以テ彼ノ千  
八百二十一年及ヒ千八百二十二年ノ二法律ニ照準シテ開鑿ヲ竣成シ  
タル運河ノ純益株券ヲ買還スルノ権理ヲ政府ニ許與セリ若シ夫レ讓  
與ノ鑛道ニ關シテハ射票規約簿ニ於テ明カニ其買還ス可キヲ揭示  
セル有ルナリ本書ノ公益鑛道ノ款目第四十七項ヲ參觀ス可シ

此千八百四十五年五月二十九日ノ法律ヲ施行スル的例ヲ知ラント  
欲セハ宜ク之ヲ千八百五十二年一月二十一日五月十三日ノ二法律  
及ヒ其他ノ法律ニ問フヘシ

四徵買ハ即チ是レ各人ノ所有不動産ヲ褫奪スルナリ又是レ其不動産



ヲ共同工作ノ舉行ノ爲メニ行政官若クハ之ニ代ハル受讓者ニ轉移セ  
シムルナリ是ヲ以テ其不動産ノ全部若クハ一部ヲ轉移セシムルニ非  
スレテ唯ク不動産ニ損害ヲ致シ若クハ其便益ヲ妨ケ若クハ其收利ヲ  
減セシムルヲ有レハ則チ所有主ハ之カ賠償ヲ要求スルヲ得ル推理  
ヲ有スト至モ此場合ノ如キハ本ト徵買ヲ行フニ非サルニ由リ徵買法  
律ヲ施サス語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ凡ソ此種ノ損害ニ關スル賠償ノ裁  
決ハ縱令ニ其損害ノ永遠ニ亘ル可キ者ナルモ千八百十年、千八百三十  
三年及七千八百四十一年ノ法律ヲ制定セル以前ニ在リテ之ヲ行政裁  
判權ノ管轄ニ屬セシメタル如ク今日ニ在リテモ尚ホ宜ク行政裁判權  
ノ管轄ニ屬セシムヘキ者トス蓋シ法律ニ於テハ唯ク徵買ノ公告ニ關  
シテノミ其管轄ヲ變更シ損害ノ賠償ニ關シテハ未ク嘗テ之ヲ變更セ  
サルヲ以テナリ此一問題ハ千八百五十年ヨリ以前ニ在リテハ參議院  
ノ裁判例ト破毀裁判所ノ裁判例トニ異同ヲ生スル有リシモ特開ノ權  
限審理裁判所ニ於テ千八百五十年三月二十九日、四月三日及七七月十  
七日ノ三裁判決ヲ下シテ之ヲ一定ニ歸セシメテ參議院ノ裁判例ヲ認  
識シ而シテ其後破毀裁判所ハ千八百五十二年三月二十九日ノ裁判ヲ  
以テ明カニ此權限審理裁判所ノ裁判決ヲ採用シタリ

**五** 徵買法ハ實ニ是レ所有權不可侵ノ原則ニ對スル一大特例ニ係ル者  
タリ是故ニ徵買ハ其法ヲ興シ其理ヲ証スル所ノ社會ノ公益ヲ限度ト  
爲サ、ル可カラズ之ヲ詳言スレハ徵買ハ法律ニ照シテ檢覈セル公用  
ヲ以テ其目的ト爲スヲ要ス然レハ則チ各人ノ私益ノ爲メニハ設令ニ  
其事業性質ノ至大至正ナル者ニ係ルモ決シテ徵買ヲ行フヲ許ス可  
キニ非サルナリ嘗テ參議院ノ其千八百十八年十二月二十四日ノ裁判  
ニ於テ何人ヲ問ハズ私設製造所ノ用水路ニ充ツル爲メニ其所有地ヲ



割交ス可キ義務ヲ有セスト決定シタルハ即チ以テ此例証ト為スニ足  
リ又千八百二十一年三月七日ノ參議院ノ裁判及ヒ千八百二十三年四  
月二十二日ノ破毀裁判所ノ裁判ノ如キ亦以テ同一ノ例証ト為ス可シ  
六元來法律ノ精神ニ於テハ公用ヲ單ニ一國ノ通益ノミニ限ルニ非ス  
州邑ノ工作ノ如キ亦是レ公用ノ性質ヲ帶フル者ニシテ以テ各人ノ所  
有不動産ノ徵買ヲ行ハシムルニ足ル蓋シ千八百四十一年五月三日ノ  
法律ヲ制定セルヨリ以前ニ於テ既ニ己ニ其意義ヲ此ニ取り殊ニ千八  
百七年九月十六日ノ法律第三十條及ヒ第三十五條ニ於テ之ヲ明示シ  
其後千八百三十三年七月七日ノ法律第三條及ヒ千八百四十一年五月  
三日ノ法律ヲ以テ又之ヲ確認セリ加之ノミナラズ濕地疏濶ニ関スル  
千八百五十四年六月十日ノ法律及ヒ地主共會ニ関スル千八百六十五  
年六月二十一日ノ法律ヲ以テ或種ノ會社ノ創興スル工作ニ對シ此公  
用ノ性質ヲ付與セル有ルヲ見ルナリ

然リトモ行政官若クハ集合體ニ非サレハ則チ公用徵買ノ權理ヲ施  
行スルヲ得ス濟貧院ノ如キハ即チ決シテ此權理ヲ有セサルヲ以テ  
若シ公用徵買法ニ從ヒ其工作ヲ舉行セント欲スレハ則チ必ス本邑ノ  
干涉ヲ待チ本邑ノ名義ヲ以テ其公用徵買ノ公告ヲ發布ス千八百五十  
年九月十日ノ參議院ノ意見

夫ノ學術文章若クハ義濟等ノ會社ハ縱令ヒ公益ノ者ニ係ルモ徵買法  
ニ依リテ人民ノ所有不動産ヲ收ムルヲ得サルハ復タ論ヲ俟タス此  
レ亦嘗テ參議院內務部ノ千八百五十三年十二月一日ノ意見書ヲ以テ  
既ニ認定シタル所ナリ

千八百七十三年七月二十四日ノ法律ハ巴里宗教大區管長ニ允許シ  
テモシマルト也地名ノ丘陵ニ一寺院ヲ造築スル為メニ必要ナル土地



ヲ徵買スルヲ得セシメタリ此法律タル本文ニ開示セル所ノ原則  
ヲ破ルニ似タリト虽氏本来此原則ハ立法者ヲ制スル者ニ非サルカ  
故ニ立法者ハ之ニ遵依セシテ一特例ヲ設ケタル者ト謂フ可シ  
然リト虽氏公同ノ工作ハ悉皆行政官ノ自カラ之ヲ奉行スルニ非ス  
テ往々之ヲ他ノ人ニ轉讓シ條約ヲ訂締シテ以テ奉行セシムルヲ有リ  
若シ其轉讓條約ノ確定スルニ至レハ則チ併セテ其徵買ノ權理ヲ委任  
セサルヲ得ス是レ千八百四十一年五月三日ノ法律第六十三條ニ於テ  
一制規ヲ明掲シタル所以ナリ今之ヲ下文ニ舉示セン  
曰ク凡ソ公同工作ノ受讓者ハ法律ノ行政官ニ委付セル各般ノ權理  
ヲ施行ス可ク又法律ノ行政官ニ負擔セシムル各般ノ義務ヲ踐行ス  
可シト

七夫ノ公用ノ事實タル未ダ嘗テ一法律ヲモ之ニ解説ヲ加フル者ヲ  
ス蓋シ之ヲ解説セント欲スルモ到底能ハサルノ事タルヲ知ルニ足ラ  
ニ從來參議院若クハ其内務部ノ裁判例ヲ觀ルニ公用ノ事實ヲ辯スル  
其例尠ナカラスト虽モ皆以テ人民ノ所有權ヲ尊崇セシムル大則ヲ枉  
ケテ徵買法ヲ施ス可キヲ証明スルニ的切ナラス然レ氏之ヲ要スル  
ニ唯其時際ノ景況ヲ評量シ徵買法ヲ施行スルニ非サレハ決シテ公益  
ノ為メニ必要ナル一工作ヲ成ズル能ハサル場合ニ當リ始メテ此法ニ  
依テ以テ人民ノ所有不動産ヲ徵買スルヲ行政官ノ遵守スル定則ト為  
ス可キ有ルノミ

八公用ノ實ニ果シテ公用タルヲ評量スルハ其事自カラ其公用ヲ公  
告スル者ノ全權ニ屬スルカ故ニ其公告ニ對シテ控訴スルヲ許サ、  
ルハ蓋シ大體ノ原則タリ是ヲ以テ其公告ノ法律ヲ以テスル場合ハ固  
ヨリ疑ヲ容レス縱令ニ其布告ヲ以テスル如キモ亦大則ニ於テハ控訴



ヲ許ス<sub>7</sub>無<sub>レ</sub>ト<sub>由</sub>モ此場合ニ在リテハ一特例ノ存スル有リ然リ而シテ此特例タル本ト妄リニ之ヲ設ケタルニ非ス<sub>レ</sub>テ抑モ他ノ確固不拔ノ定則ニ由來セル者タリ即チ其公告ノ若シ管轄ノ域外ニ涉リ或ハ權限ノ踰越ニ係リ或ハ有形ノ法式ニ違フ<sub>7</sub>有<sub>レ</sub>ハ參議院ニ向テ行政詞訟上ノ控訴ヲ構起スル<sub>7</sub>ヲ得可カラシムル者是ナリ

九夫レ公用ノ事實ハ法律上ノ解說ヲ以テ之ヲ明ニス可カラズ又裁判上ノ辨明ヲ以テ之ヲ定ム可カラサルハ上文ニ開示スル所ノ如シト<sub>由</sub>モ<sub>由</sub>法者ハ公用不動産ノ果シテ公用タル<sub>7</sub>ヲ檢覈スルニ必要ナル法式ヲ規定スル<sub>7</sub>能ハサルニ非ス而シテ此法式ヲ設定スルハ其利實ニ二有リ即チ一方ニ在リテハ行政官ヲシテ某ノ土工ノ果シテ実益アルヲ保証シ且<sub>7</sub>其奉行ノ難易ヲ査定セシムル者是ナリ又他ノ一方ニ在リテハ裁判官ヲシテ法律ノ嚴密ナル施行ヲ經タル<sub>7</sub>ヲ確認シ而シ後

ニ徵買ヲ命セシメテ以テ其法式ノ完全ナル踐行ヲ得ル<sub>7</sub>ヲ保証スル者是ナリ

千八百四十一年五月三日ノ改定徵買法律第二條及七<sub>條</sub>第十<sub>四</sub>條  
譯者曰ク以下本文及七<sub>條</sub>單  
ニ第何篇若クハ第何條ト記ス者ハ總テ此千八百四十一年ノ法律ニ係ル省官之ヲ諒セヨ

十立法者ノ徵買ニ關シテ設定セル其第一ノ法式ハ法律若クハ布告ヲ以テ工作ノ奉行ヲ公告スルニ存ス此法律ヲ以テスルト布告ヲ以テスルトノ差別ハ初メ千八百三十二年四月二十一日ノ法律第十條ニ次キニ千八百三十三年七月七日ノ法律ニ次キニ千八百四十一年五月三日ノ法律ニ於テ之ヲ設定セリ今左ニ此最後ノ法律第三條ヲ舉示セン  
曰ク<sub>由</sub>河道運河、鉄道、碇泊埠頭及<sub>レ</sub>卸載埠頭ヲ修築スル如キ凡<sub>レ</sub>テ政府若クハ州邑若クハ私立會社ノ創興スル大工作ハ其通過稅ヲ徵スルト徵セサル<sub>7</sub>ト國庫ノ補助ニ賴ルト賴ラサル<sub>7</sub>トヲ問ハス又公有財産ヲ轉付スル<sub>7</sub>有<sub>レ</sub>ト否ラサル<sub>7</sub>トヲ問ハス先<sub>7</sub>行政上ノ審査ヲ經<sub>7</sub>タ



ル以後ニ於テ法律ヲ發スルニ非サレハ之ヲ舉行スルヲ得ズ州道橋  
梁及テ延長ニ萬ノ一トル以内ノ支線運河支線鐵道并ニ其他細小ノ  
工作ハ布告ヲ以テ之カ舉行ヲ准許スルヲ得其先ツ行政上ノ審査  
ヲ經ル可キハ上項ノ場合ニ異ナラス何レノ場合ニ於ケルモ其審査  
ヲ施行スルハ行政規則ニ遵依ス可シト

此ニ由リテ之ヲ觀レハ立法權ノ管轄ニ屬セシムル其部分ハ甚ク廣大  
ナルニ爾後千八百五十二年十二月二十五日ノ元老院議定法律第四條  
ヲ以テ頗ル其管轄權ヲ削奪シ而シテ又千八百七十年七月二十七日ノ  
法律ヲ以テ殆ト原制度ニ復スルニ至レリ今茲ニ此法律ヲ抄示セン

其第一條ニ曰ク國道運河鐵道碇泊埠頭及テ卸載埠頭ヲ修築スル如  
キ凡テ政府若クハ私立會社ノ創興スル大工作ハ其通過稅ヲ徵スル  
ト徵セサルト國庫ノ補助ニ賴ルト賴ラサルトヲ問ハス又公有財產

ヲ轉付スルヲ有ルト否ラサルトヲ問ハス先ツ行政上ノ審査ヲ經タ  
ル以後ニ於テ法律ヲ發スルニ非サレハ之ヲ舉行スルヲ得ズ橋梁ヲ

架設ニ國道ヲ修繕ニ延長ニ萬ノ一トル以内ノ支線運河及テ支線鐵  
道ヲ開鑿築造ニ其他細小ノ工作ヲ舉行スルハ布告ヲ以テ之ヲ准許  
スルヲ得其先ツ行政上ノ審査ヲ經ル可キハ上項ノ場合ニ異ナラス

何等ノ場合ニ於ケルモ經費ノ全部若クハ一部ヲ國庫ノ支出ニ屬ス  
ル工作ハ特別ノ法律ヲ以テ財計ヲ立テ若クハ豫美法律ノ一章ニ費  
金ヲ供スルニ非サレハ之ヲ舉行スルヲ得スト

其第二條ニ曰ク州邑ノ經費ニ屬スル共同工作ヲ准許シ及テ其公用  
タルヲ公告スル法式ニ關シテハ目今改正ヲ加フル無シト

千八百三  
十一年八月十日ノ六  
法律ヲ參觀ス可シ



十一 行政上ノ審査ヲ施行スル法式タル其一國ノ共同工作ニ関スル者ハ千八百三十四年二月十八日及千八百三十五年二月十五日ノ二布告ニ於テ之ヲ指定シ其一邑ノ共同工作ニ関スル者ハ千八百三十五年八月二十三日ノ布告ニ於テ之ヲ指定シタリ故ニ讀者ハ此等ノ布告ヲ觀ハ則チ其法式ノ節目ヲ知ルヲ得シ

審査ノ款目ヲ參觀ス可シ

今茲ニ讀者ニ開示スルヲ缺ク可カラサル二三條件ノ在ル有リ即チ第一ニ邑道ヲ開通シ及チ改修スル場合ニ在リテハ千八百三十五年八月二十三日ノ布告ニ規定セル所ニ遵行スルヲ須ヒスニテ今日ニ至ルマテ依然千八百三十六年五月二十一日ノ法律第十六條ノ制規ニ遵依スル是ナリ

邑道ノ款目ヲ參觀ス可シ

第二ニ公用徵買ノ公告ヲ爲シテ以テ遂ニ其不動産ヲ徵買スル場合ニ臨マサルハ行政上ノ審査ヲ施行シ且チ各布告ノ規定セル法式ヲ踐行スルヲ須ヒサル是ナリ是故ニ凡ソ不動産ノ徵買ヲ行ハサルモ舉行スルニ妨ケ無キ工作ニ至リテハ單純ノ布告ヲ以テ之或ハ時宜ニ隨ヒ州長ノ布達ヲ以テスルモ之ニ有効ノ准許ヲ與フルヲ得ニ第三ニ上項ノ主旨ニ反シテ若シ國境ノ線帶内若クハ防禦地ノ近傍ニ工作ヲ舉行スル場合ニ在リテハ唯チ行政上ノ審査ヲ施行シ及チ法規ノ法式ヲ踐行ス可キニ止マラスニテ必ズ聯合工作委員ノ之ニ干涉シ且ツ陸軍卿ノ許可ヲ經由スルヲ要スル是ナリ

聯合工作ノ款目ヲ參觀ス可シ

第四ニ凡ソ官有財産ノ讓與ヲ必要スル工作ニ関シテハ常ニ財務卿ニ商議スルヲ要スル是ナリ

千八百八十年二月二十一日ノ參議院ノ意見書

十二 破毀裁判所ノ裁判例ヲ觀ルニ嘗テ緊要ナル二點ニ就キテ裁決セ

ル所有リ即チ第一ニ凡ソ法律ヲ以テ一工作ノ公用タルヲ公告シタルニ當テハ裁判所ハ徵買ノ裁判ヲ下ス為メニ其公告ニ先チテ行政上

8



ノ審査ヲ完了シタルヤ否ヤヲ檢覈スルヲ須ヒス  
千八百四十一年八月二十五日ノ裁判 第

二ニ凡ソ一工作ノ公用タルヲ公告スル布告ニ於テ定規ノ法式ニ遵  
依シ已ニ行政上ノ審査ヲ完了シタルヲ宣示スレハ則チ是レ其審査  
ノ正実ナルヲ証スルニ足ル者ニシテ關係者ハ縱令ニ其詐偽ヲ証明  
スル憑証ヲ提供スルモ裁判所ニ向テ之ヲ争フヲ得サルナリ  
千八百四十一年八月十日及千八百四十三年二月九日ノ二裁判其他ノ審判

余ノ所見ヲ以テスルニ設令ニ公用公告ノ布告ニ於テ已ニ行政上ノ審  
査ヲ完了シタルヲ宣示セサルモ亦此點ニ關シテ均ク裁判所ノ干涉

ヲ絶ツ可キハ疑ヲ容レヌ蓋シ此審査ノ法式ハ改定徵買法律第三條ニ  
於テ之ヲ規定シ而シテ裁判所ノ職任ヲ指界限定セル其第九條ハ絲毫  
モ之ニ交渉スル所無キヲ以テナリ但夕關係者ハ此ノ如キ布告ニ對シ  
テハ其有形ノ法式ヲ完了セサルノ理由ニ依據シテ參議院ニ向テ行政  
詞訟上ノ告訴ヲ構起スルヲ得可キニ似タリ

十三 改定徵買法律第二條ニ於テ設定セル第二ノ法式ハ州長ノ布達ヲ

以テ工作經畫書ニ照シ其工作舉行ノ場處若クハ土地ヲ指示スルニ存  
ス然レモ公用公告ノ法律若クハ布告ニ於テ既ニ其場處若クハ土地ヲ  
指示セル場合ニ在リテハ復夕更ニ州長ノ布達ヲ發スルヲ須ヒサルナ  
リ  
若レ夫レ第三ノ法式ニ至リテハ此法律第二章ニ於テ之ヲ規定セリ今  
之ヲ下文ニ説述セン

### 第二章 徵買以前ニ施行ス可キ行政上ノ措置

#### 第一款 總則

十四 工師若クハ其他工作ノ奉行ヲ擔任スル者ハ各邑ニ亘涉スル工作  
地ノ部分毎トニ徵買ヲ必要スル土地及テ建造物ノ細分圖ヲ録製スル



ヲ要ス 第四

十五 又徵買土地ノ地圖ヲ製シ而シテ課稅簿ニ照シテ之ニ各所有主ノ姓名等ヲ詳記シ八日間之ヲ本邑ノ邑廳ニ存置シテ以テ各所有主ノ展

閱ニ供ス 第五

此八日ノ期間ハ關係者ニ對シテ邑廳ニ存置スル地圖ヲ展閱セシムル一般ノ告達ヲ為セル本日ヨリ之ヲ起算シ其告達ヲ為スニハ喇叭若クハ太鼓ヲ用ヒ及ヒ寺院其他衆人ノ會集スル家屋ノ戸扉ニ貼紙ヲ掲出シ加フルニ本郡発行ノ新聞紙ノ其一ニ刊載シ若シ本郡ニ新聞紙ノ設ケ無ケレハ本州発行ノ新聞紙中其一ニ刊載ス 第六  
被徵買者ノ唯タ一人ヲ存スル場合ト雖モ一般ノ告達ヲ為セハ則チ是レリ然レ氏其一人ヲ指定スル告達ハ未タ以テ一般ノ告達ニ換フルニ足ラズレテ必ス別ニ之ヲ為サ、ル可カラサルナリ  
千八百四十三年四月四日及ヒ千八百

四十五年四月三十日ノ破毀裁判

十六 邑長ハ告達ノ公布及ヒ貼紙ヲ檢証シテ之カ為メニ特製スル調査

書ニ開載シ若シ關係者ノ邑廳ニ到リ口述ヲ以テ不服ノ事旨ヲ開陳スルコト有レハ此レヲ其調査書ニ具載シテ之ニ署名セシメ又其文書ヲ以テ不服ノ事旨ヲ申告スルコト有レハ此レヲ其調査書ニ副附ス 第七

法律ノ精神ヲ推シテ之ヲ觀レハ此ニ所謂ハ關係者ノ不服申告トハ工  
作ノ公用タルコトヲ認メスレテ之ヲ争フノ謂ヒニ非ス抑モ其公用タルハ既ニ已ニ確定シテ復タ敢テ之ヲ争フコトヲ得サルナリ故ニ其不服ノ  
申告ハ全ク一人ノ私利ニ涉ル者ニシテ例ハ路線ノ方向ヲ此レニ取  
ラズレテ彼レニ取ルノ至當ナルコトヲ陳辯スルカ如シ且夫レ邑長ハ關  
係者ノ申告ヲ裁決スル分限ヲ有セズ唯之ヲ說諭シテ以テ能ク事理ヲ  
了解セシムルコトニ務ム可キノミ然リ而シテ若シ其說諭ニ服セサル者



アル片ハ則チ不服者ノ臆見ヲ調査書ニ開載シ若クハ其申告書ヲ之ニ  
副附シ且ツ法律ノ規定セル法式已ニ完了シ期間已ニ過リタルヲ  
檢証シ以テ八日ノ期間満過ノ後ニ於テ之ヲ州長ニ送致ス

十七 八日ノ期間已ニ満過スレハ本郡ノ首地ニ於テ委員ノ會議ヲ開ク  
此委員ハ州長ノ指定スル四名ノ州會議員若クハ本郡ノ郡會議員ト徵  
買財産ノ現在スル邑ノ邑長ト工作ノ奉行ヲ擔當スル一名ノ工師トヲ  
以テ編成シ而シテ本郡ノ郡長之カ會長ニ任ス此委員ハ少ナクモ五人  
ノ參場ヲ為スニ非サレハ有効ノ會議ヲ開クヲ得ス若シ其參場スル議  
員ハ六人ニシテ其意見ノ平分スル場合ニ在リテハ會長ノ意見ニ隨テ  
決定ス凡ソ被徵買者ハ此委員タルヲ得サルナリ

第八

此委員ハ彼ノ千八百三十四年二月十八日ノ布告ニ準シテ編制スル審  
査委員トハ別種ノ者ニ係リ而シテ法律ニ於テハ未タ嘗テ之カ為メニ

職掌反對ノ制規ヲ設ケサルカ故ニ第一委員ノ會長タリニ郡長ニシテ

第二委員ノ會長タルヲ得可ク

千八百四十二年十二月十四日ノ破毀裁判

又第一委員ノ數

内ニ入りシ者ニシテ第二委員タルヲ得可シ工師ノ如キモ亦然リ

千八百四十一年八月十日ノ破毀裁判

一 工作ノ數邑ニ亘涉スル場合ニ在リテハ各別ニ其委員ヲ編成ス但夕  
邑長ハ各自必ス其本邑ノ委員ニ班入スルヲ要スト虽モ其他ノ委員ハ  
各邑ノ委員ニ選定セラル、ヲ得ルナリ

十八 委員ハ其編成ヲ了リシヨリ以後八日以内ニ各所有主及ヒ其他ノ関  
係者ノ申告ヲ接領シ凡ソ之ヲ召喚スルノ適當ナリト認ムル場合ニ在  
リテハ乃チ之ヲ召喚シ且ツ或ハ之ニ其意見ヲ下示ス委員ノ調査ハ十  
日以内ニ完結シ其調査書ハ直チニ郡長ヨリ之ヲ州長ニ送致ス若シ此  
期限以内ニ委員ノ調査ヲ完結セサル片ハ郡長ハ三日ヲ出テスニテ其



調査書及び証憑文書ヲ州長ニ送致セサル可カラズ 第九

若シ委員ノ工師ノ製定セル經畫書ヲ變更スル意見ヲ提出スル中ハ郡長ハ第六條ニ規定セル法式ニ遵ヒテ直チニ其變更ニ關係ヲ有スル各所有主ニ通報スルヲ要ス此通報ヲ為セシヨリ以後八日間ハ其變更ニ關スル調査書及び証憑文書ヲ郡廳ニ存置シテ以テ關係者ノ展閱ニ供ス關係者ハ其意見ヲ文書ニ開具シテ郡長ニ呈致スルヲ得可シ此期限ヨリ三日ヲ經過スレハ郡長ハ一切ノ書類ヲ收聚シテ之ヲ州長ニ送

致ス 第十

十九 州長ハ郡長ノ送付セル調査書ト之ニ副附セル証憑文書トヲ檢査シ事由具載ノ布達ヲ發シテ以テ占領スル不動産ヲ指定シ併セテ之カ占領ヲ要スル日期ヲ指示ス然レモ若シ委員ノ意見ニ因テ工作ノ經畫書ヲ變更スルヲ要スル場合ニ當リテハ州長ハ其布達ノ施行ヲ中止シ

テ以テ行政上官ノ裁定ヲ待ツ行政上官ハ其時際ノ景況ニ從ヒテ或ハ終結ノ裁定ヲ為シ或ハ更ニ上文ニ奉示セル全体ノ法式若クハ數項ノ法式ヲ踐行セシムルヲ命スルヲ得可シ 第十

又州長ハ委員ノ意見ニ異ニシテ以テ工作ノ經畫書ヲ變更セント欲ス中ハ亦均ク其布達ノ施行ヲ中止シテ以テ關係省ノ長官ニ申報ス

州長ノ發付スル占領ノ布達ハ工作准許ノ布告ヲ以テ之ニ換フルヲ得ス 千八百五十七年三月二日ノ破毀裁判 且ツ工作ノ奉行ヲ准許スル法律若クハ布告ニ

於テ其工作ヲ奉行スル場處若クハ土地ヲ指定セサルニ當リテハ此占領ノ布達ヲ發スルニ先チテ必ス其場處若クハ土地ヲ指定スル為メニ特別ノ布達ヲ發スルヲ要ス若シ此布達ヲ發セサル有レハ其占領ノ布達ハ無効ニ歸ス可キ者タリ 千八百六十一年五月二十八日ノ破毀裁判

第二款 邑工作ニ特施スル定則

12



二十 改定徵買法律第八條、第九條及第十條ノ制規ハ以テ一邑ノ請求ニ因リ及ヒ一邑ノ利益ニ專關シテ徵買ヲ行フ場合ニ適施セス邑道ヲ開通シ若クハ之ヲ改修スル場合ノ如キ亦固ヨリ然ルナリ若シ一邑ニ於テ不動産ノ徵買ヲ要スル有ルニ當リテハ第七條ニ規定スル所ノ調査書ニ邑會ノ意見書ヲ副附シテ邑長之ヲ郡長ニ送致シ郡長ハ之ニ其意見ヲ附シテ以テ州長ニ送致ス是ニ於テ州長ハ州參事署ニ於テ其調査書ヲ検査シ第十一條ノ制規ニ照準シテ其布達ヲ發ス但タ行政上官ノ認可ヲ取ルヲ要ス

第十條

是ニ由テ之ヲ觀レハ一邑ノ公益ニ關シテ徵買ヲ行ヘル場合ニ在リテハ立法者ノ彼ノ第八條、第九條及ヒ第十條ヲ以テ編成セシムル委員ノ干涉ヲ絶チ而シテ之ニ換フルニ邑會ノ意見ヲ以テシタルヲ知ル可シ然レモ第二篇ニ規定セル各般ノ法式ニ至リテハ然テ邑工作ヲ舉行スル場合ニ踐行スルヲ猶ホ他ノ工作ニ於ケルカコトニ

二十一 抑モ第十二條ハ專ラ一邑ノ利益ニ關シテ徵買ヲ行フ場合ヲ言ヘリ之ヲ詳言スレハ一邑ノ區域ヲ踰エスシテ舉行スル所ノ工作ニ向テ一特例ヲ設ケタルナリ是ヲ以テ他邑管内ノ土地ヲ徵買スル場合ニ當リテハ決シテ此特例ヲ施行スルヲ得ス必ス特別ニ委員ヲ編成セ

カニ可カラズ  
千八百四十八年三月十三日ノ破毀裁判

二十二 立法院ニ於テ此千八百四十一年ノ改定徵買法律ヲ討議セル所ニ就キテ之ヲ觀ルニ其第十二條ハ何等ノ場合タルヲ問ハス行政上官ノ認可ヲ取ラシムルニ非ス唯タ各工作ニ關シテ特設セル法律若クハ規則ヲ以テ其々ノ工事ヲ指定シ以テ特ニ行政上官ノ認可ヲ取ラシムル場合ニ限リ是ヲ以テ例ヘハ邑道ノ開通若クハ改修ノ工作ハ州長ノ千八百三十六年五月二十一日ノ法律ニ遵依シテ單ニ其布達ヲ以テ



之ヲ准許スルヲ得ルハ千八百四十一年ノ改定徵買法律ヲ頒布セシヨリ以後ト雖モ是ヨリ以前ト異ナルヲ無キナリ

第三章 協約讓典

二十三協約讓典トハ行政官ト所有主トノ協議ヲ以テ不動産ノ賣買ヲ約定スルヲ謂フ改定徵買法律ニ於テハ最モ此協約ノ訂定ニ便スル所アリ其理蓋シ瞭解シ難キニ非サルナリ凡ソ協約ヲ訂定スルハ其機會唯タ一二ニ止マラス而シテ其目的モ亦頗ル許多ナリトス第一ニ已ニ公用ノ公告ヲ為セル以後而モ未タ第二篇ニ規定セル所ノ法式ヲ踐行セサル以前ニ於テ協約ヲ訂定スルヲ得可シ此場合ニ在リテハ其第二篇ノ法式ヲ踐行スルヲ要スル無ク又徵買ノ裁判ヲ宣告スルヲ要スル無ク而シテ其協約ノ一併ニ不動産ノ讓典及ヒ價直ニ関スル者ト單一ニ不動産ノ讓典ニ関スル者トノ差別ヲ問ハサルナリ但シ其協約ノ單一讓典ノミニ関スル場合ニ在リテハ日後定規ノ法式ニ遵ヒテ其價直ヲ評定スルヲ要ス

第十四條ノ後項  
凡ソ不動産ヲ所有シ而シテ自主ヲ以テ其不動産ヲ處置スルヲ得ル者ハ何レノ日時ニ於ケルト何レノ事由ニ係ルトヲ問ハス其不動産ヲ行政官ニ賣却スルノ分限ヲ有ス故ニ行政官ハ此ノ如キ所有主ニ對シテハ縱令ヒ未タ公用ノ公告ヲ發セサルモ之ト協約ヲ訂定スルヲ得可シ唯タ鉄道若クハ運河ノ受讓者ノ如キ自主作用ノ推理ヲ有セサル徵買者ハ政府ノ准許ヲ取ルヲ要スル有ルニ然レモ此協約ニ成レル不動産ノ讓典ハ以テ第十九條第五十六條及ヒ第五十八條ニ指定セル特種ノ結果ヲ生スル者ニ非ス

下文二十六項及ヒ二十九項ヲ參觀ス可シ且夫シ財産ヲ處置スルノ分限ヲ有セサル者ノ所有不動産ヲ徵買スル場合ニ當リテハ其代人タル者ハ協約ヲ為サント欲シテ其第十三條ニ



設定セル便宜ノ特例ヲ授証スルヲ得サル可シ蓋シ公同工作ノ為メ  
ニ不動産ノ徵買ヲ要スルニ當リ其所有主ト行政官トノ間ニ訂定スル  
契約ノ方法ハ止タ此協約アルノミニ非スミテ而シテ唯特リ此協約ヲ  
為ス場合ニ於テノミ法律ノ設立セル特例ニ依ルヲ得可ケレハナリ  
彼ノ第十三條ノ正文ハ完全ヲ缺ク所アリテ未タ以テ此ノ如キ鮮叙ヲ  
証明スルニ足ラズ讀者若シ當時ノ報告委員<sup>ガ</sup>エヲ<sup>ル</sup>司法御宇<sup>ア</sup>  
シ及ヒ政府ノ代理官<sup>ロ</sup>グ<sup>ラ</sup>ニ<sup>レ</sup>ノ辯明セル所ヲ觀ハ則チ善ク此主旨ヲ  
領會スルヲ得シ  
又裁判所ノ徵買裁判ヲ經サルニ及ヒテ協約ヲ訂定セハ則チ復タ其徵  
買裁判ヲ經ルヲ須ヒス設令ヒ己ニ此徵買裁判ヲ經ルモ徵買不動産ノ  
價直ヲ額定スルニハ彼此ノ協議ヲ以テスルヲ得可シ若シ協議ヲ以  
テ其價直ヲ約定スルヤ其第十五條及ヒ第十六條ニ遵依シテ徵買ノ裁  
判ヲ公告シ且ツ之ヲ公簿ニ登記スル以前ニ係レハ則チ亦是レ協約上  
ノ讓與ニ歸ス此場合ニ在リテハ均ク彼ノ第十三條第十九條第五十六  
條及ヒ第五十八條ノ制規ヲ施行ス可キ者トス若シ其協約訂定ノ徵買  
ノ裁判ヲ公告シ且ツ之ヲ公簿ニ登記シタル以後ニ係リ而ヒテ所有主  
ノ既ニ行政官ノ供與額ヲ承諾スレハ則チ其承諾ニ密着スル所ノ結果  
ヲ生出スル者タリ其詳ナルハ之ヲ後文ニ説示セシ  
二十四 立法者ハ協議ヲ以テ不動産ヲ讓與スル其契約ノ法式及ヒ結果  
ヲ指定スル以前ニ先ツ徵買不動産ノ所有主カ自主ヲ以テ其不動産ヲ  
處置スル能ハサル場合ニ施行ス可キ制規ヲ設定スルノ必要ナルヲ  
思量セリ此場合ニ當リ若シ普通法ノ制規ヲ適施セハ則チ協<sup>約</sup>ヲ行フ  
ヲ得サルニ至ル是レ千八百四十一年ノ改定徵買法律第十三條ニ於テ  
旧法律ノ制規ヲ改正シタル所以ナリ



其第十三條ニ曰ク凡ソ未成丁者、失踪者及シテ治産ノ禁ヲ受ケタル者其  
他財産處置ノ分限ヲ有セサル者ノ所有ニ屬スル土地其他ノ不動産ヲ  
第五條ニ遵依シテ邑廳ニ提出存置スル工作經書若クハ第十一條ニ  
照準シテ行政上官ノ認可セル變更經書ニ掲載セル場合ニ在テハ其  
後見人若クハ其財産ヲ假有スル者若クハ其他ノ代表人ハ裁判所ニ請  
告書ヲ呈致シ裁判所ノ其檢事ノ意見ヲ聽キ以テ付共スル許可ヲ得シ  
ハ協約ヲ以テ其財産ヲ讓與スルヲ得裁判所ハ其財産ノ價直金ヲ保  
存シ若クハ之ヲ以テ他ノ財産ヲ購買スル處置ヲ指揮ス此等ノ制規ハ  
總テ之ヲ嫁資ノ不動産及シテ不可轉付ノ貴族所有地ノ徵買ニ施行スル  
ヲ得可シ又州長ハ州會ノ議決ヲ取テ公用ノ為メニ州有財産ヲ讓與  
スルヲ得可ク邑長及シテ公立院舎管理長ハ邑會若クハ院舎會議ノ議決  
ヲ取リ且ツ州長ノ州參事署ノ會議ヲ經由セル許可ヲ得レハ邑有財産  
若クハ院舎所屬ノ財産ヲ公用ノ為メニ讓與スルヲ得可ク又財務卿  
ハ公用ノ為メニ官有財産ヲ讓與シ且ツ帝室會計總管ノ申告ニ應ジテ  
帝室附屬ノ財産ヲ讓與スルヲ得可シト

此條ハ以テ所有主ノ種類ヲ限定スルニ非サルガ故ニ以テ凡ソ財産處  
置ノ分限ヲ有セサル者及シテ其代表人タル者ニ適用ス可ク隨テ又治産  
ノ禁ヲ受ケサル失心者ノ代表人  
千八百三十八年六月三十日ノ法律  
第三百三十一條及シテ第三百三十二條  
及シテ第三百三十九條ト  
判所ノ職權ニ依リテ保助人ヲ附セラレタル者  
民法第四百九十九條ト  
及シテ第五百十三條ト  
無承襲財産ヲ管理スル者トヲ論セス之ニ適施ス可キナリ

二十五 財産處置ノ分限ヲ有スル所有主若クハ此分限ヲ有セサル所有  
主ノ代表人カ或ハ容易ニ不動産ヲ讓與スルヲ約諾シ而シテ其價直  
ニ至リテハ異議ヲ執ルヲ有リ此ノ如キ場合ニ當リテハ第十四條ノ末  
項ニ依リニ裁判所ハ唯ク協約讓與ノ裁判狀ヲ交付シ及シテ審査長ヲ指



定スルノミニテ復タ徵買ノ裁判ヲ下シ及ヒ第二篇ニ規定セル法式  
ノ完行ヲ保任スルヲ要セス然レ氏其裁判状ニ於テ第二篇ニ規定セル  
法式ノ完行ヲ保任シ併セテ協約ヲ訂定セル契約書ヲ檢証セサル可カ  
ラス千八百五十年一月二  
十九日ノ破毀裁判 縦令ニ行政官ノ見ニ不動産ヲ占領スル有ル  
モ以テ協約ノ訂定ヲ証明スルニハ足ラサルナリ千八百四十三年七月  
三十一日ノ破毀裁判  
二十六協約ヲ訂定スル契約書ハ其物件及ヒ價直ニ併閉スル者ト其唯  
夕物件ノミニ閉シテ而シテ價直ニ閉セサル者トヲ論セズ然テ第五十  
六條ノ制規ニ遵依シ行政上官ノ法式ヲ用ヒ以テ録製スルヲ得可シ  
其條ニ曰ク凡ソ賣買契約書領收証票及ヒ其他土地ノ購買ニ関スル文  
書ハ行政上ノ法式ニ遵依シテ以テ録製スルヲ得其本稿ハ悉ク州廳  
ノ書記局ニ保存シ其謄本ヲ官有財産管理局ニ送付ス可シト  
此類ノ文書ハ然テ課税ヲ納致スル無クシテ之ニ檢印シ且ツ之ヲ公簿  
ニ登記スルヲ要ス第五十  
八條 縦令ニ雙方カ第五十六條ノ認許セル擇定ノ  
権理ヲ行用シテ以テ行政上ノ法式ヲ踐マス及ヒテ公証人ノ干渉ヲ經タ  
ル場合ト雖モ亦然リ  
二十七協約讓與ノ契約書ヲ解釈シ若クハ之ヲ実行スルニ関シ若シ争  
訟ノ起發スル有レハ之ヲ裁判スルハ裁判所ノ管轄ニ屬シ而シテ其録  
製法式ノ如何ヲ問ハス蓋シ普通法律ノ部内ニ屬スル契約書タルヲ以  
テナリ嘗テ權限審理裁判所ハ其千八百五十年三月十五日及ヒ十一月  
三十日ノ二審判ヲ以テ然ク裁決シ參議院ハ其數次ノ裁判ヲ以テ亦均  
ク然ク裁決シタリ千八百五十二年八月二十二日千八百  
五十五年三月十五日及ヒ其他ノ裁判 破毀裁判所ノ  
裁判ノ如キモ亦異例ノ存スル有ルヲ見ス千八百四十九年七月十七日  
及ヒ千八百六十年一月三十日  
日ノ然レ氏此種ノ争訟ハ行政權ノ豫審ヲ經ルヲ要スルヲ柱々之レ有  
ルヲ知ラサル可カラス



二十八 佃耕者、賃屋者及こ其他ノ人有リテ協約讓與ノ不動産ニ對シ各  
自ニ推理ヲ有シ隨テ各別ニ賠償金ヲ支共ス可キ場合ニ當リ若シ彼等  
ヲ裁判所ニ召喚セス若クハ彼等其所有主ノ己ニ訂定セル協約ヲ拒ム  
ハ申ハ彼等ノ為メニ特ニ尋常ノ徵買法式ヲ踐行スルヲ要スルカ或ハ  
彼等ノ推理ハ唯タ工作ノ奉行ニ因テ被ワレル損害ノ為メニ州參事署  
ニ告訴スルヲ得ルニ止マレカ  
共和曆第八年アリユウオ一  
日二十八日ノ法律第四條 千八百四十  
九年八月十八日及七千八百五十年一月十九日ノ參議院ノ二裁判ハ此  
第一ノ解釈ヲ確認シ其後千八百五十二年九月十四日ノ裁判ハ之ニ反  
對スル解釈ヲ確認シタリ余ヲ以テ之ヲ考フルニ此後次ノ裁判ハ論理  
ヲ以テ之ヲ推セハ批難ス可カラサルニ似タリト雖モ是レ彼ノ千八百  
十年千八百三十三年及七千八百四十一年ノ三法律ノ精神ニ適合スル  
者トハ謂フ可カラス抑モ法律ニ於テハ佃耕者ノ如キ關係人ハ之ヲ所  
有主ノ推理ヲ承継スル者ト視做サスレテ却テ之ヲ關係外人ト視做シ  
因テ以テ之ニ特殊且ツ各別ノ推理ヲ付與シタルニ單ニ所有主ノ所為  
ニ因テ彼等ノ裁判管轄ヲ移シ以テ其便益ヲ害スルニ至ラシムル如キ  
ハ其理由ノ在ル所ヲ知ルニ苦ム者有リ中ニ就キ法律ニ於テ行政裁判  
權ノ保護ニ踰ユル一層ノ保護ヲ加ヘシカ為メニ特ニ其裁判管轄ヲ指  
定セル場合ノ如キハ尤モ以テ然ルニ非スヤ

二十九 協約讓與ニ関スル定則ハ第十五條ノ制規ヲ以テ之ヲ完全ナラ  
シメタリ今左ニ其條文ヲ舉示セル  
曰ク第十五條ノ初項及七第十六條ノ制規ハ以テ行政官ト所有主ト  
其協約ヲ以テ不動産ヲ買賣スル場合ニ施行ス然レモ行政官ハ以上  
ノ各條ニ規定セル法式ヲ踐行スル無クシテ五百アテ止以内ノ購買  
價金ヲ支辨スルヲ得但タ關係外人ハ各自ニ其推理ヲ行用スルヲ



得可シ又行政官ハ縱令ニ抵當權ノ存否ヲ審査スル法式ノ踐行ヲ缺  
ク有ルモ為メニ其不動産ヲ占領スルニ妨ケス但夕關係者ハ此法律  
第四篇ニ規定セル法式ニ遵依シテ以テ其權理ヲ行用スルヲ得可シ  
ト

第四章 徵買裁判及ニ徵買不動産ニ對スル領先權、抵當權對物權

第一款 徵買ノ裁判

三十 公用ノ土地若クハ建<sup>造</sup>物ノ所有主若クハ其代表人ト協約ヲ訂定、  
セサル場合ニ在リテハ州長ハ工作准許ノ法律若クハ布告及ニ第十一  
條ニ遵依シテ發付スル布達ヲ其不動産ノ現在セル地方管轄ノ檢事ニ  
送致ス可キ者トス<sup>第十三條ノ未項</sup>

又州長ハ第一篇第二條及ニ第二篇ニ規定セル各般ノ法式ノ完行ヲ  
檢証ヒタル書類ヲ併セテ檢事ニ送致シ以テ裁判官ヲシテ之ヲ檢閱  
スルヲ得可カラシム

是ニ於テ檢事ハ三日内ニ裁判所ニ要請ヲ為シ裁判所ハ州長ノ布達ニ  
指示セル土地若クハ建造物ヲ公用ノ為メニ徵買スル裁判ヲ宣告ス<sup>第十</sup>

四條ノ  
第一項

此制規ハ唯夕法律ノ精神ニ於テ事務處辨ノ疾速ナラニテヲ要望ス  
ルヨリシテ之ヲ設定シタルニ過キヌ是ヲ以テ縱令ニ檢事ノ此三日  
ノ期限ヲ經過シテ裁判所ニ要請スルモ為メニ無効ノ結果ヲ來ス無  
ク又過期失權ノ例ニ罹ルヲ無キナリ

又裁判所ハ其徵買裁判ヲ以テ一負ノ裁判官ヲ指定シテ審査長ニ命ジ  
之ヲシテ第四篇第二章ニ規定スル所ノ職掌ヲ執行セシメ且ツ別ニ一  
負ノ裁判官ヲ指定シ必要ノ場合ニ當リ審査長ニ代ハラシム若シ此二  
負ノ裁判官共ニ不在ニ會シ或ハ事障アル場合ニ在リテハ裁判所長ノ



請告ニ應レ布告ヲ以テ之カ代任者ヲ指令ス〔第十四条ノ第三項及七第四項〕

被徵買者タル所有主ノ協約ヲ以テ其不動産ヲ讓與スルヲ承諾スル有ルモ其價直ニ関シテ雙方ノ意見相協ハサル中ハ裁判所ハ唯其協約讓與ヲ証認スル裁判ヲ下シ且ツ審査長ヲ指定スルノミニシテ復タ徵買裁判ヲ宣告シ且ツ第二篇ノ法式ヲ完全ニ踐行シタルヲ保任スルヲ須ヒス〔第十四条ノ第五項及七末項〕

三十一 讀者ノ看來ル如ク法律ニ於テハ必スシモ被徵買者タル所有主ヲ裁判所ニ召喚セシムルニ非ス然レモ其自ラ裁判所ニ上庭セシト欲セハ亦其上庭ヲ禁スルニ非ス是故ニ縱令テ裁判所ノ所有主ヲ召喚セシテ徵買ノ裁判ヲ宣告スルモ決シテ違法ノ裁判ト視ル無ク又所有主ノ自ラ上庭シテ其意見ヲ開陳スルヲ聽取シ以テ其裁判ヲ宣告スルモ亦決シテ違法ノ裁判ト視ルヲ無シ此鮮叙ハ即チ是レ法律ノ條文ノ

証明スル所ニシテ嘗テ立法院ノ會議ニ於テモ亦之ヲ認識シタリ

三十二 夫レ裁判所ノ公用不動産ノ徵買ニ干涉スルヤ徵買ノ本件ニ涉リテ其推理ノ有無ヲ裁判スルニ非ス唯其法式ヲ踐了シタルト否トヲ裁判スルノミ此レ既ニ余カ説述セシ所ナリ然リト雖モ檢事ノ單純ナル布告ノ効力ニ依リテ徵買ノ裁判ヲ要請スルニ當リ裁判所ノ見行法制ニ照シテ其徵買ノ單ニ布告ヲ以テシテ足レルカ將タ法律ヲ以テス可キカヲ査定スル如キハ其職任ノ許シ且ツ要スル所ナリ蓋シ是レ彼ノ公用ヲ公告スル法律若クハ布告ヲ發スルニ先チテ施行ス可キ行政上ノ審査ノ如何ヲ檢覈スルトハ其事固ヨリ異ナリトス抑モ此行政上ノ審査ヲ行ハシムル制規ハ第三條ヲ以テ特ニ之ヲ設定シ而シテ行政權ノ之ニ遵行スルト否ヲサルトハ本ト裁判所ノ共リ知ラサル所ナリ之ニ反シテ法律若クハ布告ヲ發スルノ必要ナルハ即チ是レ第二條ノ



規定スル所トス

三十三 凡ソ法式踐行ノ完全ナルヲ檢証スルハ行政上ノ文書ニ存シ而シテ此証憑文書ハ州長已ニ悉ク之ヲ裁判所ニ送致シテ復タ遺セル者有ラス然リ而シテ其証憑文書ハ果シテ如何ナル効力ヲ有ス可キカ嘗テ立法院ニ於テ千八百三十三年ノ法律ヲ討議スルニ當リテハ此行政上ノ証憑文書ニハ對主ノ証憑文書ヲ提出スルマテハ効力ヲ付與シタルニ似タリ千八百三十八年八月二十二日ノ破毀裁判ヲ見ルニ能ク立法院ノ討議ノ主旨ヲ確認シ而シテ對主ノ辨妄証憑文書ヲ把テ行政上ノ証憑文書ヲ攻撃スルハ破毀裁判所ニ向テ控告スルニ非サレハ則チ能ハサル者ト為セリ余ヲ以テ之ヲ觀ルニ辨妄証憑ヲ把ル者ハ均ク始審裁判所ニ告訴スルヲ得シ夫レ所有主ハ其辨妄証憑ヲ有スルニ而モ何故ニ徵買裁判ノ執行ヲ中止セスシテ其不動産ヲ徵買セラル、ノ不幸ニ遭フ可キカ又何故ニ之ヲ把テ始審裁判所ニ争フヲ得サルカ始審裁判ニ於テ其辨妄証憑ノ真偽ヲ判定スルハ最も容易ニ最も疾速ニシテ且ツ最も費用ヲ減省スルニ非スヤ凡ソ辨妄証憑ニ據ル告訴ヲ受理スルハ此レ各種ノ裁判所ニ固有スル權理ニ屬ス然ルニ徵買法律ニ於テ此權理ヲ始審裁判所ニ褫奪スルヲ無キニ妄リニ之ヲ彼レニ褫奪スルハ抑モ亦何故ソヤ余ハ其理由ノ在ル處ヲ知ラヌ且夫レ辨妄証憑文書ヲ提出スル如キハ甚タ難事ニ屬シ決シテ其弊害ヲ慮カルヲ要セサルナリ

三十四 徵買裁判ノ裁判狀ニハ法律ノ規定セル法式及ヒ規約ノ踐行已ニ完全ナルヲ證明スルヲ以テ通常ノ定則ト為ス之ヲ證明スルノ方法ハ或ハ行政上ノ証憑文書ヲ檢証シ或ハ其文書ヲ舉ケテ悉ク之ヲ接領シタルヲ明記スルニ在リ千八百三十三年七月七日ノ法律ノ存立



スル時代ニ於ケル破毀裁判例ハ往々ニ此証明ノ方法ヲシテ甚ク嚴密  
ナラシメシテ要望セリ今茲ニハ裁判例ノ根據セル原則ヲ論究スル  
ヲ須ヒス要スルニ唯ク裁判所ノ其裁判狀ヲ録製スルニ當リ務メテ注  
意ヲ取り以テ其檢証ノ疎漏ニ涉ルヲ無ケレハ則チ可ナリ然レモ各般  
ノ証憑文書ヲ總括シテ之ヲ檢証シ而シテ一々ニ檢証ヲ加ヘス或ハ單  
ニ法律ニ規定セル法式ノ踐行已ニ完全ナルヲ証言スルニ止マル如キ  
ハ未ク以テ法律ニ適フ者ト謂フ可カラズ加之ナラズ其裁判狀ハ第十  
五條ノ制規ヲ以テ貼紙ニ抄録公布セシムル件項ヲ開載スルヲ要ス下  
文三十五項ヲ參觀ス可シ

第三款 徵買裁判ノ公布及ヒ結果

三十五 徵買裁判ノ辨明及ヒ斷案并ニ所有主ノ姓名ハ之ヲ抄録シ第六  
條ニ掲記セル法式ニ照シ以テ徵買不動産ノ見在スル邑内ニ公布シ且  
ツ貼示スルヲ要シ又本郡發行ノ新聞紙中其一ニ掲載シ若シ本郡内ニ  
新聞紙ノ設ケ無キ片ハ本州發行ノ新聞紙中其一ニ掲載ス又此抄録書  
ハ所有主ノ其不動産ノ見在スル邑ノ邑廳ニ申告シテ以テ其郡内ニ假  
定シタル住居ニ之ヲ送達シ若シ其假定住居ヲ申告セサル場合ニ在リ  
テハ之ヲ邑長及ヒ佃耕者若クハ賃借者若クハ管守者ニ各ニ通テ送達  
ス此他法律ニ規定セル各般ノ通知モ亦此法式ニ準依ス可キ者ナリ

第五

三十六 徵買裁判ノ主要ナル結果ハ被徵買者ノ所有權ヲ徵買者ニ轉移  
セシムル者是ナリ被ノ第十四條ノ末項ニ指示セル場合ニ於ケル裁判  
ノ如キモ亦均ク此結果ヲ生ズ此結果ハ裁判ヲ宣告スレハ輒チ直チニ  
生出スル者ニシテ而シテ徵買者ノ賠償金ヲ交付シ若クハ之ヲ爭訟財  
産管理局ニ供托スルマテハ被徵買者ノ猶未見ニ其不動産ヲ所有スル



ニ妨ケス立法院ノ會議ニ於テ既ニ此原則ヲ確認シ因テ以テ至大ノ結果ヲ生スルニ至レリ今之ヲ例セハ既ニ徵買ノ裁判ヲ宣告シ而シテ尚ホ未タ見実ノ占領ヲ行ハサルニ當リ其不動産ニ大害ヲ被フル如キト有レハ徵買者ノ損失ニ歸スルノミニシテ被徵買者ハ決シテ徵買ノ賠償ヲ要求スル権理ヲ失フヲ無シ其レ然リ是ヲ以テ徵買者ハ亦已ニ徵買裁判ノ宣告ヲ受クレハ乃チ其不動産ヲ以テ抵當ニ供スル契約ヲ締結スルヲ得ス

三十七 法律ニ於テハ此所有權轉移ノ事ニ關シテ特別ニ規定スル所アルヲ要セザリシト雖モ其徵買不動産ニ對スル領先權、抵當權及ヒ對物權ニ關シテハ特別ノ制規ヲ設定スルヲ要セリ蓋シ徵買ノ事タル特殊ノ緊要ニ係リ之ニ普通法ノ制規ヲ施行スルハ本ト適當ナラザルカ故ニ此點ニ關シテ一種ノ特例ヲ制定セリ是レ第十六條、第十七條、第十八條及ヒ第十九條ヲ設定シタル所以ナリ

徵買裁判ハ已ニ第十五條ノ法式ヲ踐行シ了レハ民法第二千八百一十一條ニ遵依シテ直チニ之ヲ本局ノ抵當管理局ノ公簿ニ登記ス

第十  
六條

徵買不動産ニ對スル領先權及ヒ契約ニ生シ若クハ裁判ニ生シ若クハ法律ニ生スル抵當權ハ徵買裁判ノ公簿登記ヨリ十五日以内ヲ限り皆之ヲ抵當管理局ノ公簿ニ登記セサル可カラズ若シ此期限内ニ於テ此公簿登記ヲ為ス者無ケレハ何等ノ種類タルヲ問ハズ領先權若クハ抵當權ノ其徵買不動産ニ存スルヲ無シト認定ス但タ未タ賠償金ヲ債主ニ交付セズ若クハ未タ債主ニ償還スル其次第ヲ確定セサレハ婦女未成丁者及ヒ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ賠償金ヲ領受スルニ妨ケス又債主ニシテ其債權ヲ抵當管理局ノ公簿ニ登記スル者ト雖モ決シテ再競賣法ニ依テ徵買不動産ノ價直ヲ増昂セシムルヲ得可カラズ唯タ第二



篇ノ條則ニ遵依シテ以テ其價直ヲ額定セシムル推理ヲ有スルノミ

第七

契約解破ノ訴訟、所有權回復ノ訴訟及ヒ其他對物ノ訴訟モ亦皆不動産ノ徵買ヲ止メ若クハ其徵買ノ結果ヲ礙フルヲ得ス此等ノ推理ハ之ヲ移シテ徵買ノ價直ヲ争フニ止マリ直チニ其不動産ニ對シテ施スルヲ得可カラス

第十

第十六條及ヒ第十七條ニ規定セル公簿登記ノ法式ハ必ス之ヲ踐行スルヲ要ス是レ當ニ其條文ニ就キテ然リ者認スルニ非ス立法院ノ會議ノ主意ニ依ルモ亦其然ルヲ知ルニ足レリ是ヲ以テ徵買者ハ獨リ協約ヲ以テ不動産ヲ購買シ而シテ其價金ノ五百アラヒニ超過スル場合ニ於ケルニ非サレハ此公簿登記ノ法式ヲ踐行セサルヲ得サルナリ

第三款 所有主ノ徵買ヲ要催スル場合

三十八 州長ノ第十一條ニ遵依シテ其布達ヲ發セシヨリ一年內ニ於テ行政官ノ其徵買ニ着手セサレハ則チ州長ノ布達中ニ指定セル土地ノ所有主ハ徵買要催ノ請告書ヲ裁判所ニ呈致スルヲ得可シ此請告書ハ檢事之ヲ州長ニ送致ス是ニ於テ州長ハ速カニ各般ノ証憑文書ヲ裁判所ニ送致シ裁判所ハ三日內ニ其徵買裁判ヲ宣告ス

第十四條 第二項

此一制規ヲ設定セル目的ハ所有主就中家屋若クハ製造場ノ所有主ヲシテ其推理ヲ人ニ屬シ以テ言フ可カラサル不便ノ地位ニ立タシムルヲ防止スルニ存ス夫レ此目的ニ達スルハ甚タ稀シニシテ實際或ハ毫モ其益ヲ見ルニ至ラサラレ蓋シルグラニ氏ノ説ノ如ク行政官ノ若シ速カニ其ノ土地ヲ徵買スルヲ欲セサレハ則チ州長ニ令シテ目下其布達ヲ發セシメヌマテ一年ノ期間ヲ策起ス可カラサラレハ則チ



被徵買者ノ請告ヲ抑止スルニ足ルハ実ニ然リ然レモ行政官ノ便利ヲ謀レハ概テ其工作ノ竣成ヲ速ニシ且ツ務メテ不用ノ土地ヲ購買セサルニ在ルヲ以テ行政官ノ此ノ如キ處置ヲ取リ以テ所有主ノ患害ヲ為スハ抑モ深ク憂フ可キ者ナシ若シ夫レ私立會社ニ至リテハ稍々異ナル所アリテ之ト同一ナル保証ノ存スル無シトモ行政官ノ縱令レ之カ為メニ州長ノ布達ヲ發スルヲ延推セシメント欲スルモ其理由ヲ索ムルニ苦ム所アラントス然レハ則チ此第十四條ノ制規ハ絲毫ノ功  
用ヲモ存セサル者ト謂フヲ得サルナリ

州長ハ檢事ノ通報ヲ受クレハ行政上官ニ商議スルヲ要ス時ニ或ハ更ニ審査ヲ行ハハ其ノ土地ヲ徵買セサルモ其工作ノ舉行ニ妨ケ無キヲ往々ニ之レ有リ此ノ如キ場合ニ當リテハ州長ノ已ニ發付セル布達ヲ廢銷シテ以テ其徵買ヲ実行セサルノミ之ニ及シテ必ス其徵買ヲ為スヲ要セハ裁判所ニ於テ徵買ノ裁判ヲ宣告シ且ツ第十四條ノ第三項及  
て第四項ニ遵ヒ徵買審査長ヲ指定ス

第四款 徵買裁判ニ對スル控訴

三十九 徵買ノ裁判ニ對シテハ獨リ其非管轄ニ涉リ若クハ權限ヲ踰越シ若クハ法式ノ踐行ヲ關ク有ルノ理由ニ依リテ破毀裁判所ニ上告スルヲ得可キノミ此上告ヲ為スニハ遲クモ裁判ノ通達ヲ受ケレヨリ  
三日内ニ原裁判所ノ書記局ニ申告ス又此申告ノ後八日內ニ或ハ第十  
五條ニ揭示セル關係者ノ假令住居ニ通達ニ或ハ工作ノ種類ニ從テ州  
長若クハ邑長若クハ受讓者ニ通達ス若シ此期限內ニ此通達ヲ為サ  
レハ過期失權ノ例ニ罹ルヲ免レス又是ヨリ以後十五日內ニ各般ノ  
証憑文書ヲ破毀裁判所ノ民事局ニ送致シ破毀裁判所ハ之ヲ接受セル其  
翌月內ニ之カ裁判ヲ宣告ス此期限ヲ滿過スルモ若シ關帝裁判ヲ宣告



スレハ其闕席ノ為メニ其裁判ニ對シテ上告スルヲ得可カラス 第二  
十條

及七第六  
十三條

四十 徵買ノ裁判ニ對シテハ徵買者ト被徵買者トヲ問ハス上告ヲ為ス  
トヲ得可シ縱令被徵買者ノ其裁判ニ關係セサル場合トモ亦然リ  
若シ夫レ徵買不動産ニ對シテ對物權若クハ其他ノ權理ヲ有スル者及  
七第二十一條ニ指示セル關係者ハ亦同ク徵買裁判ニ對シテ上告スル  
權理ヲ有スルカニ三ノ法學家ノ說ニ依レハ宜ク此權理ヲ付與スヘキ  
トヲ主張セリトモ破毀裁判所ハ其千八百五十四年八月七日ノ審判  
ヲ以テ債借者ノ此權理ヲ有セサルヲ裁決セリ其理由ノ辨明ヲ觀ル  
ニ他ノ關係者ノ如キモ亦之ニ異ナルヲ無キニ似タリ

四十一 第五十八條ノ語辭ハ極メテ廣泛ナリトモ凡ソ徵買ノ裁判ニ  
對シテ控告ヲ為スニハ若干ノ罰金額ヲ供托セサルヲ得ス但夕初メ原  
裁判所ニ申告スルト同時ニ其金額ヲ供托スルヲ要セス破毀裁判所ニ  
向テ之ヲ供托スルヲ得可シ蓋シ是レ破毀裁判所ノ裁判ヲ宣告スル  
ニ至ルマテ最モ必要ナル者ニ係レリ 千八百四十二年十二月十四日及  
千八百四十三年一月二日ノ破

毀裁  
判

四十二 上文ニ開示セル破毀裁判所ノ裁判ヲ宣告スル其期限ハ縱令七  
之ヲ滿過スルモ以テ過期失權ノ例ニ罹ルヲ無シ故ニ原告者ハ此期限  
ヲ過キルモ其上告ニ關スル証憑文書ヲ呈出スルヲ得テ而シテ破毀  
裁判所ハ亦之カ裁判ヲ下スヲ得可シ但夕被告者ハ此裁判ニ其利害  
ヲ繫クル有レハ則チ過期失權ノ理由ニ依據シテ其裁判ヲ拒ムヲ得  
ルナリ

四十三 此上告ハ以テ徵買裁判ノ執行ヲ中止スル効力ヲ存セス民法ノ  
例規ニ照セハ凡ソ破毀裁判所ニ上告スルハ唯夕法律ニ指定セル場合



ニ非サレハ原裁判ノ執行ヲ中止スルヲ無シ然リ而シテ徵買法律ニ於テハ未タ嘗テ普通ノ原則ニ依ラシメサル所ノ特例ヲ設定セル有ラス然レハ則チ徵買者ハ關係ノ上告ヲ為ス有ルニ拘ラスニテ其徵買裁判ヲ執行スルヲ得レ然レモ是レ極メテ危險ヲ履ム者ニシテ若シ破毀ヲ受ケハ被徵買者ノ損害ヲ償ハサルヲ得ス破毀裁判所ノ徵買裁判ヲ破毀スル有レハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ送付シテ更ニ之カ裁判ヲ為サシム其裁判所ハ新タニ徵買ノ裁判ヲ宣告シ且ツ審査長ヲ指定ス然レモ其管轄權ハ唯タ始審裁判及テ破毀裁判ニ關係シタル被徵買者ニ及ブノミ

### 第五章 賠償金ノ評定

第一款 豫辦ノ事務、關係者ノ指定及テ行政官ノ供給

四十四 被徵買者タル所有主ハ第十五條ニ準スル裁判ノ通達ヲ受ケレヨリ以後八日內ニ佃耕者、賃屋者及テ民法ニ規定セル寄住ノ権理若クハ使用ノ権理若クハ收額得有ノ権理ヲ有スル者并ニ所有主ノ所有券票若クハ其他ノ契約書ニ據テ各般ノ地務ヲ用フル者等ノ姓名ヲ指定シテ行政官ニ申報スルノ義務ヲ有ス若シ所有主ノ此義務ヲ充踐セサレハ自ラ此等ノ關係者ノ要求スル賠償ヲ支辨スルノ責メニ任セサル可カラス此他ノ關係者ハ第六條ノ規定セル告達ヲ得テ以テ隨意ニ其権理ヲ伸張スルヲ得ルノ地位ニ在ルカ故ニ裁判ノ宣告ヨリ八日以内ニ自ラ其姓名ヲ行政官ニ申報セサル可カラス若シ此期限内ニ申報セサレハ其賠償金要求ノ権理ヲ失スル者トス

第二十一 凡ソ被徵買者タル所有主及テ其債主ニ施行ス可キ各般ノ制規ハ皆是レ收額得有者及テ其債主ニ擬施ス可キ者トス

第二十一條ノ第二項ヲ適施ス可キ此他ノ關係者ハ之ヲ例スルニ複賃



借者若クハ森林法ニ規定セル使用ノ権理ヲ有シ若クハ所有主ニ關係セサル特別ノ名義ヲ以テ地務ヲ用フル権理ヲ有スル者等是ナリ

四十五 行政官ハ所有主及ヒ其指定申報シタル關係者并ニ此他第二十

一條ニ規定セル期限内ニ姓名ヲ申告シタル干涉者ニ對シテ其供給ス

ル賠償金額ヲ通達シ且ツ第六條ノ法式ニ遵ヒ貼紙ニ揭示シ新聞紙ニ

公告スルヲ要ス 第二十三條

州長ハ探問ヲ竭シ且ツ豫定ノ評價ニ從ヒ其布達ヲ以テ供給額ヲ限

定ス此州長ノ布達ハ之ヲ抄録シテ各別ニ所有主及ヒ其他ノ關係者

ニ送達ス可キ者トス

所有主及ヒ其他ノ關係者ハ此通達ヲ得タルヨリ以後十五日ニ其領

諾ノ事旨ヲ申告ス可ク若シ之ヲ領諾セサレハ其要求額ヲ申告ス可シ

第二十四條

此法式ハ必ス有形上ノ法式ヲ用フルヲ要ス故ニ口述ヲ以テ供給シ或

ハ互ニ論辨スル有ルモ以テ此法式ニ換易スルヲ得可カラス 千八百

五月二十六日ノ破毀裁判

且夫レ此法式ハ唯タ之ヲ主本タル賠償金ヲ供給スル場合ノニ用フ

可キニ非ス審査員ノ調査中ニ於テ新ニ別種ノ賠償金ヲ供給スル場合

ニ在リテモ亦之ヲ施サ、ル可カラズ中ニ就キ被徵買者ノ第五十條ノ

効力ニ依據シテ其不動産ノ全部ヲ購買セラレシヲ請求スルニ當リ

テハ固ヨリ其然ルヲ知ル可シ 千八百七十三年八月二十六日及ヒ千

四十六 後見人及ヒ財產共通法ニ依テ結婚セル婦女ノ其夫ノ保助ヲ得

ル者并ニ失踪人ノ財產ヲ假有スル承産者、此他財產處置ノ分限ヲ有セ

サル者ノ代表人ハ若シ第十三條ニ規定セル法式ニ準シテ裁判所ノ認

許ヲ受ケレハ則チ第二十三條ニ揭示セル賠償金ノ供給額ヲ承諾スル



一ヲ得可シ第二十  
五條

又財務卿、州長、邑長若クハ公立院舎管理長ハ各第十三條ニ規定セル所ノ許可ヲ經シハ官有財産若クハ王室財産若クハ州有財産若クハ邑有財産若クハ公立院舎所屬財産ノ徵買賠償金ノ供給額ヲ兼諾スルヲ得可シ第二十  
六條

第二十五條ニ規定セル十五日ノ期間ハ第二十五條及ヒ第二十六條ノ場合ニ在リテハ一月ト為ス第二十  
七條

四十七 所有主及ヒ其他ノ關係者ノ第二十四條及ヒ第二十七條ニ規定セル期限内ニ於テ行政官ノ供給額ヲ兼諾セサレハ乃チ行政官ハ彼等ニ上庭狀ヲ送付シテ審査負ノ審度ニ抵ラシメ以テ第二章ニ指示セル方法ニ照準シテ賠償金額ヲ評定セルハ此上庭狀ニハ各關係者ノ拒却セル供給額ヲ記載スルヲ要ス第二十  
八條

上文ノ制規ニ録テ之ヲ觀ルニ行政官ハ法律ノ各關係者ヲシテ相共ニ商議セシムル為メ之ニ付共シタル期間ノ全ク過リタルニ非サレハ上庭狀ヲ送致ス可カラサルヲ知ルニ足レリ故ヲ以テ此期間ノ未タ満過セサルニ上庭狀ヲ送致スル有レハ縱令ヒ十五日以後若クハ一月以後ノ日ヲ期スルモ是レ法律ノ條文ト其精神トニ違背スルヲ免シス千八百五十五年五月  
十九日ノ破毀裁判然リト雖モ此種ノ違規ト他事ノ違規トヲ問ハス關係者ノ之ニ應スル作用ノ如何ニ因テ効力ノ有無ヲ異ニスル者タリ同上ノ破  
毀裁判

第二款 徵買審査負ノ編制

四十八 州會ハ毎年其會議ニ於テ各郡ノ選舉人名簿ト刑事陪審負ノ第一二部名簿トニ就キ本郡内ニ本住居ヲ定ムル者ニ取リテ三十六人以外七十二人以内ノ常備審査負ヲ選定シ而シテ翌年ノ通常會ヲ開クマテ



ハ公用土地ノ徵買ヲ行フノ節次ニ其見任審査員ヲ此員内ニ取り之ヲ  
シテ徵買スル不動産ノ賠償金額ヲ評定セシム特リセリ又州ニ於テハ  
常備審査員ニ充ツル人負六百名ヲ選定ス〔第二十九條〕  
千八百四十五年六月二十二日ノ法律ヲ以テリヨシ府ノ常備審査員  
ニ充ツル人負ヲ二百名ニ限定セリ

凡ソ審査員ノ招集ヲ要スル有ルヤ控訴裁判所ヲ設置セル州ニ在リテ  
ハ其第一局他ノ州ニ在リテハ裁判區域ノ首地ニ設置セル裁判所ノ第  
一局ニ於テ徵買不動産ノ現在セル本郡ノ為メニ選定セシ常備審査員  
名簿ヨリ十六名ヲ取り以テ其徵買ニ要スル見任審査員ヲ編制シ之ヲ  
シテ徵買スル不動産ノ賠償金額ヲ評定セシム又別ニ四名ノ代補審査  
員ヲ指定ス若シ其局ノ閉鎖期間ニ當レハ其代理局ニ於テ之ヲ選定ス  
又裁判區域ノ首地ニ設置セル裁判所裁判官ノ自カラ此選定ヲ為ス

ヲ辞シ若クハ人ノ之ヲ拒ム場合ニ在リテハ其控訴裁判所ニ於テ之ヲ  
選定ス凡ソ審査員タルヲ得サル者ハ第一ニ州長ノ第十一條ニ遵テ  
發セル布達ヲ以テ指定徵買スル土地及ヒ家屋ノ所有主、佃耕者、賃屋者  
第二ニ此等ノ不動産ニ抵當權ヲ有スル債主第三ニ第二十一條及ヒ第  
二十二條ノ規定スル所ニ遵テ指定シ若クハ干涉スル關係者即チ是ノ  
リ年齢七十歳以上ノ者ハ若シ申請スレハ則チ審査員タルヲ免ル  
ヲ得可シ〔第三十條〕

凡ソ一任期間審査員ノ職務ニ服シタル者ハ州會ニ於テ之ヲ翌年ノ常  
備審査員名簿ニ録載スルヲ得〔第四十七條〕

四十九州會ノ毎年常備審査員名簿ヲ録製スル處置ニ對シ控告スルハ  
是レ法律ノ明許スル所ニ非ズ故ニ此事ニ関シテハ破毀裁判所ニ上告  
スルヲ得可カラズ〔第四十二條〕



是ヲ以テ州會ノ偶マ誤リテ法律ニ規定スル資格ヲ具セサル人ヲ常備  
審査員名簿ニ録載シ而シテ其人ノ見任審査員ノ數内ニ加ハ、ル有  
ルモ若シ關係者ノ之ヲ作外セズ若クハ第三十二條ノ後項ニ規定スル  
所ニ遵ヒ之ヲ撤除セサレハ則チ其人ノ見任審査員ノ數内ニ加ハ、リ  
タルノ事由ヲ以テ破毀上告ノ根據ト為スニ足ラス  
千八百四十六年十一月二十四日千八百五十二年八月十八日  
及シテ其他ノ破毀裁判

五十 見任審査員ハ必ズ本年選定セシ常備審査員名簿ノ中ニ取ラサル  
可カラズ然ルニ若シ之ヲ此名簿ノ外ニ取ルル有レハ則チ其見任審査  
員ノ決定ハ破毀ヲ受ルルヲ免レサルナリ  
千八百五十二年四月十日ノ破毀裁判

五十一 邑道ノ工作濕地疏涸ノ工作及シ地主共會ノ工作ニ關スル見任  
審査員ハ本任四名ト代補三名トヲ以テ之ヲ編制ス  
千八百三十六年五月二十六日ノ法律  
第五十六條及シテ千八百五十四年六月十日ノ法律第四條

第三款 徵買審査員及シ關係者ノ招集并ニ徵買審査員ノ踐行  
スル法式

五十二 十六名ノ本任審査員及シ四名ノ代補審査員ノ名簿ハ州長之ヲ  
郡長ニ送付シ郡長ハ審査員ニ協議シ少クモ八日以前ニ其參集ノ場  
地ト日期トヲ報道シ以テ審査員及シ關係者ヲ招集ス其關係者ニ送達  
スル報<sup>道</sup>書ニハ必ズ見任審査員ノ姓名ヲ明記セサル可カラズ  
第三十一條  
法律ニ於テハ審査員及シ關係者ヲ招集スル法式ヲ明示セル無シ是ヲ  
以テ凡ソ行政屬官ニシテ裁判所ニ向ヒ其録製セル調査書ノ正実ヲ証  
スル分限ヲ有スル者ハ第三十五條ノ第三項及シ第四項ニ規定スル所ニ  
遵ヒ以テ之ヲ招集スルヲ得可シ

五十三 凡ソ審査員ニシテ正當ノ事故無キニ臨場ヲ缺キ若クハ會議ニ  
參集スルヲ拒メル者ニ對シテハ百アラシ以外三百アラシ以内ノ罰



全ヲ責徴ス此罰金ハ審査長之ヲ宣告ス若シ其審査員ノ不服ヲ訴フル有レハ則チ亦終審推ヲ以テ之カ裁決ヲ為ス又審査長ハ審査員ノ申告スル故障ヲ裁決シ且ツ第三十條ニ依據シテ審査員ヲ選定セシ以後ニ偶到シ若クハ發露セル斥除并ニ職掌反對ノ事由ヲ裁決ス 第三十條 凡ソ故障若クハ斥除若クハ職掌反對ノ為メニ見任審査員名簿ヨリ除名セラレ、審査員有レハ則チ審査長ハ補闕審査員ノ記名順叙ニ從テ之ヲ取り以テ其闕ヲ補フ若シ悉ク補闕審査員ヲ取りテ尚ホ闕員ヲ見ル場合ニ當リテハ審査長ハ第二十九條ニ依テ録製セル常備審査員名簿ニ就キテ更ニ之ヲ取り以テ見任審査員十六名ノ定數ヲ補充ス 第三十條

此第三十三條ノ制規ハ假令之ニ遵行セサルモ決シテ破毀ノ原因ヲ成スヲ無シ 第四十條 又本條ハ補闕審査員ノ選定及ヒ招集ノ法式ヲ規定セス故ニ之ヲ監視スルハ專ラ審査長ノ職掌ニ屬ス

**五十四** 審査長ハ見任審査員ノ外別ニ裁判所ノ書記官若クハ書記生ノ臨場ヲ得テ以テ其職務ヲ施行ス此書記官若クハ書記生ハ順次ニ審査員ノ裁決ニ付ス可キ事件ヲ提出シ且其事務處辨ノ調査書ヲ録製ス此裁決事件ヲ提出スル時ニ當リ行政官ハ審査員二名ノ斥外ヲ要請スルヲ得可ク而シテ其對主タル關係者モ亦之ト同一ノ推理ヲ有ス若シ一事ニ關シテ數人ノ關係者有ル場合ニ於テ此斥外要請ノ推理ヲ施行スルニハ相商議シテ共同ノ名義ヲ以テシ又若シ相商議セサルナレハ則チ抽籤法ヲ用ヒテ其推理ノ施行者ヲ指定ス又若シ全ク斥外ヲ要請セス若クハ各自ニ之ヲ要請スル有レハ則チ審査長ハ見任審査員名簿ノ末後ノ記名者ヨリ逐次ニ罷除シテ以テ之ヲ十二名ニ減ス 第三十條 法律ニ於テハ絶エテ明言セル無キモ凡ソ審査員ノ調査書ハ當ニ對主



ノ反對証憑ヲ呈出スルニ至ルマテ其効力ヲ有スルノミナラス對主ノ  
辨妄証憑ヲ呈出スルニ至リテモ尚ホ其効力ヲ失ハス  
千八百三十五年  
一月十九日、千八  
百五十二年十一月二十六日及千八  
百五十七年八月十一日ノ破毀裁判此調査書ニハ總テ其事務處辨ノ  
顛末ヲ録記シ殊ニ各般ノ法式ヲ完全ニ踐行セシ事實ヲ明載セサル可  
カラス若シ有形工ノ法式ノ踐行ヲ闕ク有レハ則チ破毀ノ原因ヲ成ス  
者タリ

五十五 今若シ推シテ之ヲ論スレハ凡ソ審査員ノ裁決ヲ要スル徵買ノ  
事件有ル毎トニ必ス各一体ノ見任審査員ヲ編制セサル可カラズ然レ  
氏關係者ノ承諾スレハ則チ同一ノ見任審査員ニシテ併セテ數種ノ事  
件ヲ裁決スルヲ得可シ但夕此場合ニ在リテハ一事毎トニ其關係者  
ノ第三十四條ノ限數ニ照シ審査員在外ノ推理ヲ共行スルニ妨ケス此  
ノ如ク一体ノ見任審査員ニシテ併セテ數種ノ事件ヲ裁決スルハ各地

方就中巴里府ニ於テ歲二月ニ徵買ノ盛行セルヨリ以還乃チ普通ノ例  
規ト為レリ蓋シ此方法ヲ用フルモ能ク速ニ事務ヲ處辨シ而モ決シテ  
被徵買者ノ不利ヲ為スヲ見サルニ由ル  
千八百五十五年一  
月二日ノ破毀裁判然リトモ  
モ是レ必ス被徵買者ノ承諾ヲ取ルヲ要シ且ツ其調査書ニ其承諾ノ事  
旨ヲ明記セサル可カラズ  
千八百四十五年五月二十日及千  
八百五十三年六月七日ノ破毀裁判

五十六 見任審査員ハ定數十二名ノ悉ク見在スルニ非サレハ之ヲ編制  
セス又少ナクモ九名ノ參場スルニ非サレハ則チ有効ノ裁決ヲ為スヲ  
得ス  
第三十  
五條

一体ノ見任審査員ヲ編制スル時ニ當リテハ各自ヲシテ公正ニ其職掌  
ヲ充踐ス可キ誓約ヲ為サシム  
第三十  
六條  
此誓約ハ必ス其各般ノ職掌ヲ執行スル以前ニ之ヲ為サシム例ハ第  
三十七條ニ遵ヒ實地検査ヲ行フモ亦誓約ヲ為セル後ニ非サレハ則チ



能ハサルカ如シ千八百三十四年九月二十六日千八百四十二年十一月二十四日及千八百五十八年四月二十八日ノ破毀裁判

判

若シ夫レ關係者ノ承諾ヲ經テ數事件ノ為メニ編制シタル見任審査員ハ其各事件ニ向テ一一誓約ヲ為スルヲ要セズ唯其第一事件ニ着手スル以前ニ一回ノ誓約ヲ為セハ則チ足ル千八百五十五年七月二十五日ノ破毀裁判

五十七 審査長ハ第一ニ徵買者及被徵買者ノ第二十三條及第二十四條ノ制規ニ遵テ呈出セル賠償金ノ供給表及ヒ要求表ヲ審査員ニ示シ第二ニ供給若クハ要求ヲ証スル為メニ呈出セル細分圖所有券票及ヒ其他ノ証憑文書ヲ之ニ示ス又關係者若クハ其代理人ハ簡略ナル意見書ヲ呈出スルヲ得可ク而シテ審査員ハ其裁決ヲ資ク可キ人物ニ諮問シ或ハ一同ニ実地ヲ検査シ或ハ一人若クハ數人ニ委任シテ之ヲ検査セシムルヲ得可シ第三十七條ノ第一項第二項及ヒ第三項

行政官ハ時ニ或ハ其工師其他ノ官吏ヲシテ審査員ノ審庭ニ辯護ヲ為サシムルヲ有リ又時ニ或ハ代言人ヲ用フルヲ有リ關係者モ亦自ら辯護ヲ為シ若クハ代言人ヲ用フルヲ有リ然リ而シテ此審査員ノ審庭ニ於テ民事擔當人ノ或ハ關係者ノ信任ニ孤負スル有リテ大弊害ヲ致スト無キニ非ス是レ亘ク深ク戒慎ヲ加フヘキナリ

五十八 審査員ハ其審庭ノ論難ヲ聴キテ或ハ精密ナル探査ヲ施行スルノ甚ク必要ナルヲ覺トルヲ有リ蓋シ法律ニ於テハ審査員ニ對シ純然タル鑒定ノ方法若クハ証人質問ノ方法ヲ施行スルヲ許サスレテ純ニ尋常ノ探問及ヒ実地ノ検査ヲ為スノ権理ヲ與フル有ルニ又其探問及ヒ検査ノ法式ノ如キモ亦唯粗末之カ要領ヲ規定セルニ過キス蓋シ是レ陪審長ヲシテ其時際ノ景況ニ應ジ此権理ノ施行ヲ監視セシムルノ優ルニ如カスト為セルニ由レハナリ千八百五十一年十二月二十四日ノ破毀裁判



又法律ニ於テハ実地検査ヲ施行スル時期ノ得テ指定ス可カラサルカ  
為メニ之ヲ指定セサリニ故ヲ以テ審査員ハ審査長ノ審庭ノ閉鎖ヲ命  
スル有ルニ拘ラヌ実地検査ニ着手スルヲ得可シ抑モ審査員ノ其実  
地検査ヲ施行スルノ甚ク必要ナルニ感スルハ実ニ其審庭ニ於ケル関  
係者ノ論難ヲ聴取スルノ後ニ在リ  
千八百三十七年二月七日及千八百四十六年十一月十八日ノ破毀裁判

審査長ハ実地ヲ検査スル為メニ審査員ヲ伴行スルヲ得可シ然レモ  
是レ其義務ニ属スル者ニ非ス  
千八百四十三年三月二十七日ノ破毀裁判

五十九 審庭ハ必ス之ヲ公開シ而シテ其對審ハ之ヲ一席ニ終ルヲ要  
セズ延キテ數席ニ及ホスヲ得可シ  
第三十七條ノ第四項

此審庭ノ閉鎖ハ審査長之ヲ命シ既ニ閉鎖ヲ命スレハ則チ審査員ハ直  
チニ其會場ニ退キ而シテ頃刻モ他ニ散出スルヲ無ク會長ヲ指選シテ

更ニ審議ヲ盡シ投票ノ多數ニ依リテ賠償金額ヲ決定シ票數平分ノ場  
合ニ當リテハ會長ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス  
第三十八條

六十 審査員ノ賠償金額ヲ評定スルニハ精密ニ其負數ヲ指定セサル可  
カラヌ又其賠償ハ必ス金額ヲ以テスルヲ要シ而シテ被徵買者ノ兼  
諾スル有ルニ非サレハ則チ縱令ニ其一分クモ動産若クハ年支金若ク

ハ他所ニ換取セシムル物料等ヲ以テ之ニ充ワルヲ得ス  
千八百四十三年七月三日  
日千八百四十四年一月二日及千八百四十四年八月二十一日ノ破毀裁判  
然リトモ被徵買者ノ請求ニ應ヒテ金額ノ

賠償ト或種ノ工作トヲ擇取セシムル如キハ妨ケ無キナリ又被徵買者  
ノ請求ニ應ヒテ或種ノ物件ヲ換取セシメ若クハ同一ノ物料ヲ償取セ  
シムル如キモ亦然リ  
千八百四十年五月二十六日及千八百四十三年八月二十一日ノ破毀裁判

審査員ハ其決定ニ辨明ヲ付シ及ヒ各種ノ原素ヲ逐ヒ一一其賠償額ヲ  
特定スルノ義務ヲ有セス唯ク被徵買者ノ申述スル賠償要求ノ原由ヲ



評量シテ概テ其確實ナルヲ認定スルヲ要スル、千八百四十年五月二十六日

十四年三月二十一日  
及ヒ其他ノ破毀裁判

六十一 若シ審査員ノ評定セル賠償額ノ行政官ノ供給額ヨリ超過セサ  
レハ則チ行政官ノ供給額ヲ承諾セサル被徵買者其裁決ノ費用ヲ支辨  
セサル可カラズ若シ其賠償額ノ被徵買者ノ要求額ニ均當スレハ則チ  
行政官其裁決ノ費用ヲ支辨セサル可カラズ若シ其賠償額ノ行政官ノ  
供給額ヨリ超過シ而シテ被徵買者ノ要求額ヨリ減降スレハ則チ其裁  
決ノ費用ハ評定額ト供給額及ヒ要求額トノ差數ニ比例シテ以テ之ヲ  
行政官ト被徵買者トノ間ニ分擔セシム凡ソ賠償ヲ得可キ人ニシテ第  
二十五條及ヒ第二十六條ニ指定セル外限ヲ有セズ而シテ第二十四條  
ニ立定セル制規ニ遵ハサル者ハ審査員ノ評定セル賠償額ノ超過減降  
スルノ如何ニ拘ラス總テ其裁決ノ費用ヲ負擔セサル可カラズ第四  
十條

改定徵買法律第二十四條ノ制規ニ依レハ被徵買者ハ其贖戻スル要  
求額ヲ申述シテ以テ行政官ノ供給額ニ對當セサル可カラズ

然レモ若シ賠償額ヲ評定シ而シテ其給戻ノ未必ニ係ル場合第四十  
九條  
在リテハ審査員ノ裁令書ヲ以テ要債推理ノ有無ニ関スル争訟ノ裁判  
ヲ待チ以テ其裁決ノ費用ヲ科定スルヲ明示ス千八百四十三年三  
月一日ノ破毀裁判

六十二 審査員ノ裁決書ハ其裁決ニ參照シタル各審査員皆之ニ署名シ  
テ會長ヨリ審査員ニ呈致シ審査員ハ其裁決ノ執行ヲ公告シ且ツ其裁  
決ノ費用ヲ科定シ及ヒ行政官ヲシテ徵買ノ不動産ヲ占領セシム但チ  
行政官ハ第五十三條以下數條ノ制規ニ遵ヒ以テ之ヲ占領スルヲ要  
ス又審査員ノ裁決ノ費用ヲ科定スルニハ行政規則ニ指示セル費用額  
則ニ準依セサル可カラズ千八百三十三年九  
月十八日ノ布告凡ソ此費用ハ行政官ノ審  
査員招集ノ命令ヲ發スルヨリ以來ノ處務ニ関スル費用ニ限ル可キ者



ニシテ此ヨリ以前ニ係ル費用ハ何等ノ場合タルヲ論セズ然テ之ヲ行  
政官ノ負擔ニ歸セシム 第四十  
一条

審査員ハ初メ其招集ノ時ニ接領セル事件ヲ逐次ニ裁決シ以テ然テ其  
賠償金額ヲ評定スル後ニ非サレハ則チ決シテ解散スルヲ得ス 第四  
十四条

一条ノ見任審査員ノ着手セル事業ニシテ第二十九条ニ掲示スル常備  
審査員ヲ改選スル時ニ至リ尚ホ之ヲ卒ラサルモ依然之ニ従事シ其終  
局ヲ告ケサル可カラズ 第四十  
五条

審査員ノ既ニ其裁決ヲ終ハシハ則チ其裁決書ノ本稿及ヒ其他ノ書類  
ノ之ニ関係スル者ハ然テ之ヲ本郡民事裁判所ノ書記局ニ存置ス 第四  
十六条

第四款 賠償金額評定ノ規則

六十三 本来被徵買者ハ私創ノ工作ニ因テ其所有不動産ニ増加セシメ  
タル價直ヲ併美シ以テ其賠償ヲ要求スルヲ得ス是故ニ第五十二条  
ニ依ルニ凡ソ被徵買者ノ其所有地ニ改良ヲ加ヘ屋舎ヲ建造シ樹木ヲ  
植栽セル有ルヤ若シ審査員ノ其時候ト景況トヲ視テ以テ是レ多額ノ  
賠償ヲ占得セントスル目的ニ出テタル証據ヲ認定スレハ則チ之カ為  
メニ毫モ其賠償ヲ付共スルヲ無シ然レモ若シ其証據ヲ認定セサル場  
合ニ於テハ所有地ノ見状及ヒ其耕種并ニ其收穫ニ適應スル賣買價直  
ヲ酌量シテ以テ之カ賠償額ヲ評定セサル可カラズ

六十四 又凡ソ不動産ヲ徵買スルニハ或ハ其土地ノ一部ヲ割裂スルニ  
因テ他部ニ損害ヲ及ホシ若クハ其價直ヲ減降セシムルヲ有リ此ノ如  
キ場合ニ在リテハ均ク之ヲ賠償額ニ計入セサル可カラズ其之ヲ評量  
スルハ専ラ審査員ノ職掌ニ屬シ而シテ審査員ハ主本賠償金ノ外ニ於



テ別ニ附随賠償金ヲ給與ス可キヤ否ヤヲ決定ス

六十五 夫レ不動産ノ徵買ヲ必要スル共同工作ノ以テ各人民ノ所有地ノ價直ヲ減降セシムルヲ有ルハ此ノ如シト虽モ之ニ反シテ或ハ其價直ヲ増昂セシムルヲ有リ此ノ如キ場合ハ千八百七十九年九月十六日ノ法律第五十四條ニ於テ規定セリ所有リ曰ク公用徵買ヲ施スニ當リ同時ニ其占領スル土地ノ賠償ヲ供シ且其便益ヲ殘餘ノ土地ニ與フルニ因テ増昂セシメタル價直ヲ收ム可キ場合ニ於テハ彼此相償シ而シテ唯其差額ノニ所有主見實ニ之ヲ領受シ或ハ之ヲ納入スト是ニ歸テ之ヲ觀レハ其殘餘ノ土地ニ價直ヲ増昂セシメタルニ因リ當ニ所有主ニ供ス可キ賠償額ヲ減殺スルヲ得ルノミナラス却テ彼ヲシテ賠償金ヲ行政官ニ納レシムルヲ得タリ其後千八百三十三年ノ法律ヲ討議スルニ當リ此方法ノ甚タ節度ヲ踰スルヲ痛駁スル論旨ヲ採リ遂ニ其

第五十一條ヲ以テ之ニ改正ヲ加ヘタリ今此ニ其條文ヲ擧示セシ

曰ク凡ソ共同工作ヲ奉行スルニ當リ其徵買殘餘ノ土地ヲシテ直接ニ特別ノ價直ヲ増昂セシムルヲ有レハ則チ其増昂セル價直ハ之ヲ賠償金額ヨリ算減スルヲ得可シト

此條ハ全ク之ヲ千八百四十一年ノ徵買法律ニ復掲シ而シテ唯其結末ノ可得ノ文字ニ換フルニ可<sup>有</sup>ノ文字ヲ以テシタルノミ抑モ此制規ハ猶ホ其第五十二條ノゴトク僅ニ審査負ニ戒告スル効力ヲ有スル者タルニ過キスト虽モ審査負ハ此制規ノ存スルヨリシテ増昂價直額ノ徵買賠償額ト相償スル理由ニ依據シ以テ全ク其賠償金ヲ付與セサルヲ得サルニ至レリ  
千八百四十八年二月二十日ノ破毀裁判  
六十六 審査負ハ所有主、佃耕者、賃屋者、使用者其他第二十一條ニ揭示セル關係者等ノ各自ノ名義ヲ以テ要求スル賠償金額ヲ評定ス若シ夫レ



收額得有權ノ存スル不動産ニ関シテハ唯其不動産ノ総價直額ニ準美  
シテ以テ一項ノ賠償金額ヲ評定スルノ之蓋シ物体所有者及ヒ收額得  
有者ハ其権理ヲ物件ニ施行セシテ專ラ之ヲ賠償ノ金額ニ施行ス可  
キ者トス又收額得有者ハ必ス保証人ヲ立テサレ可カラス但夕父母ノ  
其子ノ財産ニ對シ法律上ノ收額得有權ヲ有スル如キハ復夕特ニ保証  
人ヲ立ワルヲ要セサルナリ  
破毀裁判所ハ其千八百四十七年二月二日ノ裁判ヲ以テシ巴里控訴裁  
判所ハ其千八百四十五年五月十六日ノ裁判ヲ以テシ里昂控訴裁判所  
ハ其千八百五十五年三月十八日ノ裁判ヲ以テシ民法第千三百二十  
八条ヲ施行ト以テ徵買者ハ記日ノ確實ナル賃貸契約書ヲ出示セサレ  
賃屋者ヲ對シテ賠償金ヲ付與スルノ義務ヲ有セスト決定シタリ然レ  
モ此裁判例ハ有理ノ駁撃ヲ受ケ遂ニ千八百六十一年四月二十七日  
ノ破毀裁判ヲ以テ之ヲ排棄スルニ至レリ但夕賃屋者ニ詐偽ノ行為有  
ル場合ノ如キハ此限ニ非ス

六十七 審査員ハ賠償ヲ要求スル名義ノ真偽ヲ決定シ且ツ賠償金額ノ  
算定ニ改更ヲ来ス可キ行為ノ効力ヲ裁決ス  
此一條規ハ第三十九條第四項及ヒ第四十九條ニ結合シテ以テ施行ス

可キ者トス  
其第三十九條第四項ニ依レハ賠償要求者ノ権理若クハ年限ニ関シテ  
紛議ヲ起生シ或ハ此他賠償金ノ評定ニ関涉セサル爭論ノ起生スルヲ

有シハ則チ審査員ハ其紛議及ヒ爭論ニ拘ラズシテ以テ賠償金額ヲ評  
定シ其紛議及ヒ爭論ノ處分ノ如キハ管轄裁判所ニ送付シテ以テ其裁  
判ヲ受ケシム

又其第四十九條ニ依レハ行政官ノ被徵買者タル見所有主ノ要償権理



ヲ拒争スル場合ニ在リテハ審査員ハ行政官ノ拒争セルニ拘ラスシテ  
恰モ其要償権理有ル者ノ如ク賠償金額ヲ評定シ審査長ハ其賠償金額  
ヲ保管金庫ニ供托シ以テ管轄裁判所ノ其争訟ヲ裁判スルヲ待ツヲ要  
ス

是故ニ若シ一人ニ徵買セル不動産ノ一部ヲ他ノ關係外人ノ已レノ所  
有ニ屬スト主張スル有レハ別ク審査員ハ二様ニ區別シテ以テ其賠償  
金額ヲ評定ス第一ニ不動産ノ全部ニ向テ賠償金額ヲ評定シ第二ニ関  
係外人ノ所有ニ屬スト主張スル証憑ノ存スル有レハ別ク二人者ノ部  
分ニ向テ各別ニ賠償金額ヲ評定スル即チ是ナリ  
千八百三十八年八月  
二十一日ノ破毀裁判

又審査員ハ損害ノ有無ニ因テ争訟ノ起生スル場合ニ於テモ亦其損害  
ヲ想像シテ以テ賠償金額ヲ評定セザル可カラズ然レモ是レ唯タ見時  
且ツ確實ノ損害有ルヲ認ムル場合ノニ限ル者コレテ將來且ツ不

確實ノ損害ニ關シテハ復タ特ニ此義務ヲ充踐スルヲ要セズ  
千八百  
四十五

年十二月十七日及七千八百五  
十五年一月三日ノ破毀裁判

六十八 審査員ノ評定スル賠償金額ハ何等ノ場合ニ於テスルモ決シテ  
行政官ノ供給額ヨリ減降セシムルヲ得ズ又被徵買者ノ要求額ヨリ  
超過セシムルヲ得ズ  
第三十九  
条ノ末項 此制規ハ千八百三十三年ノ法律ニ存

セサル者ニシテ要スルニ是レ各種ノ裁判所ニ向テ最少額ヨリ下シテ  
以テ裁決ヲ為スヲ禁スル原則ヲ之ニ擬施シタルニ外ナラス然レモ  
此ニ言ヘル供給額ト要求額トハ第二十三條及七第二十四條ニ準依シ  
テ以テ報申セル供給額要求額ヲ言フニ非ス蓋シ此二條ニ準依シテ報  
申セル供給額要求額ハ賠償金額ヲ確定スルニ至ルマテハ之ヲ改更ス  
ルヲ得可キ者トス故ニ此ニ言ヘル供給額要求額ハ徵買者及被徵  
買者ノ確定ノ意度ヲ以テ審査員ニ申告スル所ノ金額ヲ指ス者ト断セ



サル可カラサルナリ

若シ被徵買者ノ行政官ノ供給額ニ反言セス或ハ若シ之ニ反言スルモ  
而モ自ラ其要求額ヲ明言セサレハ則チ審査員ハ決シテ行政官ノ結言  
セル供給額ニ超過セシメテ以テ賠償金額ヲ評定スルヲ得ズ  
千八百  
四十二  
年二月二十二日千八百四十九年一月  
二日及ヒ其他ノ破毀裁判

今此ニ賠償金額ノ評定ニ関スル最後ノ規則ヲ奉示セシ是レ蓋シ第五  
十條ニ於テ規定セル所ナリ

其餘ニ曰ク公用ノ為メニ建造物ノ一部ヲ徵買スルヲ要スル有シハ  
則チ所有主ノ請求ニ應シ其全部ヲ奉ケテ之ヲ購買ス所有主ノ全部ノ  
購買ヲ請求スルニハ此法律第二十四條及ヒ第二十七條ニ指示スル期  
限内ニ其請求書ヲ審査長ニ呈致スルヲ要ス又土地ヲ徵買スルニ当リ  
其殘餘地ヲ全部ノ四分ノ一ニ縮減シ而シテ所有主ノ別ニ其接隣ニ土  
地ヲ有セス且ツ其殘餘地ノ十アムヨリ以内ニ係レハ則チ併セテ之ヲ  
ヲ購買スト

此制規ノ原則ハ千八百七七年九月十六日ノ法律第五十一條ニ於テ已ニ  
之ヲ立定セル有リ然レモ其全部ノ購買ハ唯之ヲ家屋其他ノ建造物ノ  
ニニ限レリ又千八百四十一年ノ徵買法律ハ千八百七七年及ヒ千八百三  
十三年ノ法律ト異ニシテ單ニ建造物ト言ヒ而シテ家屋ノ文字ヲ下サ  
ズ此ノ如ク語辞ヲ編屬セルノ目的ハ即チ唯チ家屋ニ附屬スル庭坪若  
クハ園圃ノミヲ徵買スル場合ニ當リテモ所有主ノ其家屋ヲ併セテ購  
買セシテヲ請求スルノ患害ヲ防クニ存セリ

此第五十條ニ云ヘル所ハ此ノ如シト虽モ所有主ハ其家屋ヲ併セテ購  
買セシテヲ審査長ニ請求スルヲ得サルモ而モ異常ノ處置ニ出テ之ヲ  
行政官ニ請求スルヲ得可シ  
千八百三十三年九月十八  
日ノ布告第二條第七項 是ヲ以テ此第五



十條ハ已ニ家屋ノ文字ヲ削除シタルモ截然其係累ノ跡ヲ絶ツヲ猶ホ  
第二十一條ノコトクスルヲ得サルカ為メニ往々ニ其目的ノ全効ヲ收  
ムル能ハサルノ悔ヲ貽セリ

且夫レ此全部ノ購買ヲ請求スル場合ニハ亦均ク第四十九條ヲ擬施ス  
可シ蓋シ徵買者ノ全部ヲ購買スルノ緊要ナルヲ認メス或ハ其請求  
ノ無効若クハ違規ナルヲ議スル有リ此ノ如キハ即チ是レ権理ノ有  
無ヲ争フ場合ニ係リ其争訟ハ必ス之ヲ管轄裁判所ニ送付ス可ク而シ  
テ審査負ハ豫メニ様ノ賠償金額ヲ評定シテ以テ其裁判ヲ下スヲ待ツ  
即チ其一ハ全部ノ徵買ニ充ソル賠償金額ニシテ他ノ一ハ一部ノ徵買  
ニ充ソル賠償金額ト為ス

千八百三十九年三月二十五日及千  
八百四十三年五月十五日ノ破毀裁判

千八百五十四年五月六日ノ巴里控訴裁判所ノ裁判ニ依ルニ徵買法律  
第五十條ニ豫定セル全部購買ノ請求ハ若シ所有主ノ自ラ之ヲ為サ  
ル場合ニ於テハ賃屋者乃チ之ヲ為スヲ得ル者ト決定セリ然レモ余  
ノ觀ル所ヲ以テスレハ此裁判例ハ全ク法律ノ明文ニ及ビ得テ採ル可  
カラザル者ニ似タリ

七十此第五十條ノ許典セル権理ハ是レ雙方ノ互相ニ使用スルヲ得  
可キ者ニ非ス故ニ行政官ハ何等ノ場合ニ於テスルモ其工作ノ舉行ニ  
必要ナル區域ヲ踰エテ以テ徵買ノ権理ヲ不動産ノ全部ニ擴施スルヲ  
ヲ得ス然レモ千八百六十二年三月二十六日ノ布告ヲ以テ此原則ニ及  
スル制規ヲ立テタリ是レ蓋シ專ラ巴里府ノ工作ニ関セル者タリトモ  
其他ノ都府ニ向テモ亦均ク之ヲ施行スルヲ得可シ

此布告  
第九條

其第二條ニ曰ク凡ソ巴里府ノ街路ヲ展廣シ若クハ改修シ若クハ開通  
スル為メニ不動産ヲ徵買スルニ当リテハ行政官ハ若シ殘餘地ノ面積  
及ビ形状ノ人身ノ健康ヲ保全スルニ足ル可キ建築ヲ為スニ耐ハスト



認めらるるハ則チ其不動産ノ全部ヲ舉ケテ徵買スル権理ヲ有ス又其  
不用ニ屬スト認めらるる日街路ヲ廢毀スル為メニ其公路私地分界線外ノ  
不動産ヲ徵買スルノ必要ナルニ於テハ亦均ク之ヲ徵買スルヲ得可  
シ而シテ其分界線外ノ徵買土地ニシテ人身ノ健康ヲ保全スルニ足ル  
可キ建築ヲ為スニ耐ハサル者ハ千八百七十九年九月十六日ノ法律第五十  
三條ニ照準シ或ハ協約法ヲ用テ或ハ徵買法ヲ用テ之ヲ其隣接ノ土  
地ニ併合セシム又其徵買スル土地ノ價直ヲ評定スル法式及ヒ裁判管  
轄ハ尋常ノ徵買法ニ從ヒ且ツ審査員ノ裁決ニ付スルノ通路修築ノ措  
置ニ因テ公路ニ充ツル土地ノ購買スル契約書及ヒ其他ノ文書ニ向テ  
モ亦千八百四十一年五月三日ノ法律第五十八條ヲ擬施ス可シ

第五款 徵買審査員ノ裁決ニ對スル控告及ヒ其裁決ノ解釋

七十一 凡ソ審査員ノ裁決及ヒ審査員ノ裁令ニ對シテハ唯獨リ破毀裁

判所ニ控告スルヲ得ルニシテ其控告モ亦唯獨リ第三十條第一  
項第三十一條第三十四條第二項第四項及ヒ第三十五條乃至第四十條  
ノ制規ノ違反ニ對シ之ヲ為ストヲ得ルノニ又其控告ノ期間ハ十五日  
ニシテ裁決ノ本日ヨリ起算シ而シテ其控告ハ第二十條ニ規定セル如  
ク構成し通知し及ヒ其裁判ヲ得可キ者トス

第四十  
二條

徵買ノ裁判ニ對スル控告ハ三日ヲ以テ期間ト為ス但シ其裁判ノ通  
知ヲ得タル本日ヨリ起算ス

第十  
二條

第四十二條ノ此ノ如ク控告ヲ為ストヲ得ル場合ヲ限レル有ルニ拘ラ  
ズ縱令ヒ其指定セル場合ノ外ニ係ルモ審査員ノ裁決ニ對スルト審査  
長ノ裁令ニ對スルトヲ問ハスニテ凡ソ非管轄若クハ權限踰越ニ關ス  
ル控告ハ皆其受理ヲ得可キ者ニ似タリ蓋シ此原則ヲ施行スルハ其何  
等ノ裁判所ニ係ルヲ論セサレハナリ嘗テ已ニ千八百四十一年ヨリ以



前ニ在リテ破毀裁判所ハ千八百三十三年ノ法律第四十二條ニ擧數セ  
ル場合ノ外ニ於ケル審査長ノ裁令ニ關シ亦此ノ如ク裁判セシテ有リ  
千八百三十七年一月二日ノ破毀裁判此他破毀裁判所ノ審査員ノ裁決ヲ審理スルヤ其權  
限ヲ踰越セルカ為メニ之ヲ破毀シ其第三十條ノ制規ニ違反セルカ為  
メニ之ヲ破毀シ加之ノミナラス第四十四條ノ如キハ第四十二條ニ擧  
數セサル者ナルニ其制規ニ違反セルカ為メニ亦然ク裁判ヲ下セル有  
ルヲ觀ハ則テ均ク此原則ヲ審査員ノ裁決ニ施行セル者タルヲ知  
ル可シ千八百五十一年一月十四日ノ破毀裁判

七十二 審査員ノ裁決ヲ破毀セル場合ニ於テハ其事件ヲ新ニ同郡内ニ  
選定スル審査員ニ送付ス然リト雖モ破毀裁判所ハ其時際ノ景況ニ隨  
テ隣郡内ニ選定セル陪審員ニ送付シテ以テ徵買不動産ノ賠償金額ヲ  
評定セシムルヲ得可ク而シテ縱令ニ其管轄ノ州ヲ異ニスルモ亦妨

ケ莫シ此場合ニ當リテハ第三十條ニ照準シテ其選定ヲ為ス第四十  
三條  
凡ソ法律ニ新選審査員ト稱スル場合ニ於テハ必ス原選審査員ノ數内  
ニ入ラサリシ人ヲ以テ審査員ヲ組織セサル可カラサル者ト領會スル  
ヲ要ス千八百五十三年六月八日ノ破毀裁判

七十三 審査員ノ裁決ヲ解釈シ及ニ其執行ヲ管知スルハ專ラ司法裁判  
權ノ職掌ニ屬ス千八百四十二年二月二十九日及  
七同年七月十六日ノ參議院ノ裁判

第六章 賠償金ノ交付

七十四 審査員ノ額定セル賠償金ハ其不動産ヲ占領スル以前ニ必ス之  
ヲ有權者ニ交付ス可シ其有權者トハ審査員ノ裁決ニ於テ關係者ト為  
リ且ツ其裁決ニ於テ指定セル人ヲ謂フ此有權者ハ徵買者ニ對シ自己  
ノ分限ヲ證明スルヲ要セス但夕關係外人ハ此有權者ニ對シテ其權  
理ヲ證明スルヲ要ス



千八百三十六年五月二十一日ノ法律第十五條ニ於テ一個ノ特別ナル  
場合ニ向テ上文ノ<sup>定</sup>則ニ對スル特別ヲ設ケ而シテ破毀裁判所ハ嘗テ  
此特例ノ正理ニ合スル者タルヲ認識シタリ  
千八百四十四年二月二日ノ破毀裁判

此特例ト第六十五條以下ノ各條ノ制規トヲ除ケハ則チ此定則ハ復タ  
一モ他ノ特例ヲ容ル、有ラス是ヲ以テ徵買ノ賠償金ハ必ズ豫メ之ヲ  
交付セサル可カラズ假令ヒ何等ノ事情有ルモ決シテ其交付以前ニ強  
要ノ占領ヲ行フヲ得ス例ハ行政官ノ一水流ヲ占用スルニ當リ其  
水流ヲシテ某製造場ノ器械ヲ運轉スル原状ニ復セシムルヲ得ル場  
合ノ如キモ亦必ズ豫メ其賠償金ヲ交付セサル可カラズ  
千八百三十七年二月七日ノ

破毀  
裁判

七十五 或ハ行政官ノ徵買ノ法式ヲ踐行セズ又豫メ賠償金ヲ交付セズ  
若クハ豫メ之ヲ保管金庫ニ供托セズシテ實際ニ土地ヲ占領し而シテ

此レニ工作ヲ奉行スルヲ有リ此ノ如キ場合ニ當リテハ裁判所ニ於テ  
亘ク豫メ額定シ且ツ交付スヘキ賠償額ヲ評定シ及テ不法ノ占領ニ生  
スル損害額ヲ裁決スルハ固ヨリ其職權ニ存ス加之ノミナラス從來參  
議院ハ裁判權ニシテ行政權ノ施行ニ若クハ許可セル工作ノ停廢若ク  
ハ撤去ヲ命令スル是レ三權分立ノ原則ニ悖反スト審決シタルニ  
千八百四十三年六月二十九日、千八百四十五年七月四日、其後遂ニ此ノ如キ不法  
千八百四十四年十二月十一日及ヒ其他ノ各裁判

ノ占領ヲ行ハル場合ニ於テハ裁判權ノ其工作ノ中止ヲ命令スルヲ得  
可キヲ認識シ而シテ其撤去ヲ命令スル如キハ依然之ヲ拒却シタリ  
七十六 若シ有推者ノ賠償金ヲ領收スルヲ拒ム有レハ則チ徵買者ハ  
其賠償金ヲ保管金庫ニ供托シ若クハ見実ニ供給シテ以テ不動産ヲ占  
領ス若シ政府若クハ一州ノ奉行スル工作ニ係レハ其見実ノ供給ハ審  
査員ノ評定セル賠償額ニ照シ支発証票ヲ交付シテ以テ之ヲ為ス此支



發証券ハ管轄支發傳令官之ヲ發付シ出納検査官之ヲ檢証シ而シテ其  
票面ニ記載セル金庫ヨリ見金ヲ支發ス又若シ有權者ノ此支發証券ヲ  
領收スルヲ拒ム有レハ則チ見金ヲ供托シ而ル後ニ其不動産ヲ占領  
ス第五十三條ノ第二項  
第三項及ヒ第四項

邑ノ舉行スル工作ニ關シテハ見金ヲ以テ供給セサル可カラズ  
凡ソ徵買スル不動産ニ抵當權ノ存スル有リ若クハ其他有權者ニ賠償  
金ヲ交付スルニ故障ノ生スル有レハ則チ復タ見実ノ供給ヲ為サス此  
場合ニ於テハ行政官ノ交付ス可キ賠償金ヲ保管金庫ニ供托シ以テ日  
後ニ普通法ノ定則ニ照準シテ分配シ若クハ交付スルヲ得可カラシム  
ルハ則チ以テ其不動産ヲ占領スルヲ得可シ第五十  
四條

七十七 若シ所有主ノ以テ行政官ノ供給ヲ承諾シ而シテ第二十四條及  
七十七條ニ指定スル期限内ニ關係外人ノ争難スル無ケレハ則チ  
其賠償金ハ之ヲ保管金庫ニ供托シ以テ普通法ノ定則ニ照準シテ有權  
者ニ交付シ若クハ分配スルヲ得可カラシムルヲ要ス第五十  
九條

七十八 法律ニ於テハ徵買ノ為メニ日久ク所有主ヲ困苦ヲ置カサラン  
ト欲シ第十四條  
第二項随テ徵買者ノ徵買裁判ヲ經タル後ニ賠償金ノ評定  
ヲ促カシ及ヒ其交付ヲ果スノ遲延スルヲ戒禁セリ是レ即チ第五十  
五條ノ存スル所以ナリ

其條ニ曰ク若シ徵買裁判ヲ經タル以後ノ六月内ニ行政官ノ賠償額ヲ  
評定セシムルニ着手セサレハ關係者ハ其評定ノ着手ヲ請求スルヲ  
得又若シ審査員ノ評定裁判ヲ經タル以後ノ六月内ニ行政官ノ賠償金  
ヲ交付セサレハ關係者ノ其交付期限ノ滿了スル本日ヨリ之カ利息ヲ  
領受スルハ即チ其推理ニ屬ス

此第五十五條ハ以テ之ヲ協約讓與ノ場合ニ施サズ蓋シ協約讓與ノ場



合ニ在テハ必ス其契約書ニ於テ利息ヲ賦課シ若クハ賦加セサルヲ  
掲記セサル可カラズ然ルニ若シ之ヲ掲記セサレハ則チ民法第千六百  
五十二條ニ設ル總則ニ遵依シテ以テ之カ處置ヲ為ス可キ者タリ

第七章 雜則

第一款 徵買ニ必要ナル文書ノ錄製法式其送達及ヒ登記稅其  
他ノ課稅ノ免除

七十九 余ハ既ニ上文第二十六項ニ於テ賣買契約書若クハ價直領收証  
票其他土地ノ購買ニ関スル文書ハ皆是州長ノ行政上ノ法式ニ遵依  
シテ以テ其稜凌ヲ為スヲ得第五十  
六條可キヲ說示セリ蓋シ州長ノ此權  
力ヲ施行スルハ多クハ協約讓與ノ場合ニ在リトモ然レモ是レ單ニ  
此場合ノニ限ルニ非ス又是レ單ニ政府ノ不動産ヲ購買スル場合ノ  
ニ限ルニ非スレテ若シ州長ノ必要ナリト判定スル有レハ則チ工

受讓者ノ徵買ヲ行フ場合ニ干涉スルモ亦妨ケ莫キナリ

八十 凡ソ政府若クハ一州ノ徵買ヲ施行スル中此改定徵買法律ニ指示  
スル各般ノ送達及ヒ通知ハ其不動産ノ見在セル州ノ州長ノ請告ニ因  
テ之ヲ為シ第五十七條  
第一項一邑ノ徵買ヲ施行スルニハ邑長ノ請告ニ因テ  
之ヲ為シ千八百四十二年一月  
十二日ノ破毀裁判又若シ受讓者ノ徵買ヲ施行スル場合ニ  
於テハ受讓者ノ請告ニ因テ之ヲ為ス

此各般ノ送達及ヒ通知ハ裁判所ノ使吏若クハ裁判所ニ向テ其錄製ス  
ル調査書ノ正実ヲ証明スル權カヲ帶ヒル行政屬官之ヲ為スヲ得第五  
十七條  
第二項然リ而シテ此行政屬官ハ必シモ其錄製スル調査書ニ對主ノ辨  
妄証憑ヲ呈出スルニ至ルマテ効力ヲ存セシムルノ權理ヲ有スル者  
ニテ要セス唯チ對主ノ反對証憑ヲ呈出スルニ至ルマテ効力ヲ存セ  
シムルノ權理ヲ有スレハ則チ以テ此各般ノ送達及ヒ通知ヲ為スニ任



スルヲ得可シ故ヲ以テ此分限ヲ有スル行政屬官ハ其負數甚ク多ク  
シテ今此ニ之ヲ舉クル如キハ實ニ無益ニ屬ス 調査書ノ款目ヲ參觀ス  
可シ然リト雖一邑ノ公益ニ関シテ徵買ヲ施ス場合ニ當リテハ邑長

ハ縱令ニ裁判所ニ向テ其錄製セル調査書ノ正実ヲ証スル分限ヲ有ス  
ルモ此各般ノ送達及ニ通知ヲ為スヲ得可カラズ 千八百五十五年四月三日ノ破毀裁判

此各般ノ送達及ニ通知ヲ為スニハ務メテ訴訟法第六十一條、第六十三  
條、第六十四條及ニ第六十八條ノ制規ニ遵依セサル可カラズ然レモ若  
シ有形ノ法式ニ涉ラサル疎漏ノ失錯ハ以テ其無効ヲ來スヲ無キナリ

千八百四十二年四月四日ノ破毀裁判

八十一 工作經畫書、調査書、証認書、送達書、裁判書、契約書、領收証票及ニ其  
他見行法律ニ照遵シテ錄製セル各般ノ文書ハ皆無稅ヲ以テ之ニ証印  
ス而シテ其登記ヲ要スル場合ニ於ケルモ亦登記稅ヲ課收スル無シ又

抵當管理局ノ公簿ニ登録スルモ亦然リ凡ソ州長ノ徵買不動産指定ノ  
布告ヲ發スル以前ニ協約購買ニ関シテ納致セル稅金ハ納致以後ノ二  
年内ニ其不動産ノ州長ノ布達中ニ包載シ有ルヲ証明スレハ則チ其  
還付ヲ得可シ然レモ此稅金ヲ還付スルニハ唯其工作ノ舉行ニ必要ナ  
リト認定シタル不動産ノ部分ノニニ比例スル者トス 第五十八條

此ノ如ク課稅ヲ免除スル特例ノ存スル有ルモ凡ソ公用ノ為メニ不動  
產ヲ購買スル場合ニ於テハ總テ其課稅ヲ免除ニ付スル者ト領會スル  
ヲ得可カラズ蓋シ此特例ハ唯是レ第二條ニ遵依スル布告ヲ以テ徵  
買ヲ公告スル不動産ニ向テ之ヲ施行ス可シ是ヲ以テ一邑ノ其工  
作ニ要用スル為メニ協約法ヲ以テ土地ヲ購買スル場合ノ如キハ縱令  
ニ政府ノ其工作ノ舉行ヲ准許スルモ若シ其公告ヲ為スニ非サレハ則  
チ決シテ其証印稅及ニ登記稅ノ免除ヲ得ルヲ能ハズ又縱令ニ第二編

22



ニ規定スル法式ノ多半ヲ踐行シタル場合ノ如キモ亦以テ然リトス  
百四十四年六月十九日、千八百四十八年三月六日、千八百四十九  
年一月三十一日、千八百五十四年一月三十日及ヒ其他ノ破毀裁判  
ハ千

第二款 先買ノ推理

八十二 公用工作ノ為メニ土地ヲ購買シ而シテ之ヲ其用ニ供セサル  
有レハ則チ原所有主若クハ其推理ヲ代有スル人ハ其土地ノ買回ヲ請  
求スルヲ得而シテ其價直ハ協約ヲ以テ之ヲ額定ス若シ其協約ノ諧  
ハサレハ審査負上文ニ説示スル法式ニ遵ヒテ之ヲ評定ス審査負ノ此  
買回ノ價直ヲ評定スルニハ如何ナル場合ニ於ケルモ決シテ其購買ノ  
價直ニ超過セシムルヲ得ス  
〔第六十條〕  
徵買セル土地ト公用ノ公告ヲ発シタル後ニ協約ヲ以テ購買セル土  
地トヲ問ハス其原所有主ハ此先買ノ推理ニ據テ之ヲ買回スルヲ  
得可シ

凡ソ行政官ノ其購買シタル土地ヲ復タヒ賣却スル場合ニ於テハ第六  
條ニ指定スル法式ニ遵ヒテ之カ公告ヲ為サ、ル可カラス又原所有主  
ノ買回セント欲スル者ハ此公告ヲ発セル以後ノ三月内ニ其申請ヲ為  
シ而シテ雙方ノ協議ニ因ルト審査負ノ裁決ニ因ルトヲ論セス已ニ買  
回ノ價直ヲ額定スレハ則チ必ス其本月内ニ買回ノ契約ヲ締結シ且ツ  
價直ヲ納致セサル可カラズ凡ソ此等ノ順叙ヲ踐ムハ即チ買回者ノ義  
務ニ屬シ之ヲ踐マサレハ則チ第六十條ニ於テ許共セル推理ヲ喪失ス

第六十條

此第六十條及ヒ第六十一條ノ制規ハ所有主ノ第五十條ノ効力ニ據リ  
テ行政官ノ自由ニ使用スルヲ得可キ土地ヲ購買スル場合ニ向テハ  
之ヲ施サ、ルナリ  
〔第六十條〕

八十三 政府ノ購買セル土地ニ對シ此三條ノ制規ヲ施行スルノ方法ハ



己二千八百三十五年三月二十二日ノ布告ヲ以テ之ヲ規定シタリ

此三條ノ制規ハ千八百三十三年七月七日ノ法律ニ於テモ亦之ヲ異  
ニスルヲ見サレナリ

其布告第一條ニ曰ク凡ソ公用ノ工作ニ供スル為メニ購買セル土地ノ  
全部若クハ一部ヲ其用ニ供セス若クハ供セサラレトスル場合ニ在リ  
テハ其土地ヲ官有財産管理局ニ交付シ以テ若シ原所有主若クハ其權  
理ヲ代有スル人ノ要請スル有レハ千八百三十三年七月七日ノ法律第  
六十條及ヒ第六十一條ニ照シテ之ヲ彼ニ賣還ス此賣還契約ハ本州州  
長ノ面前若クハ州長ノ委任ヲ受ケタル郡長ノ面前ニ於テ之ヲ締結ス  
但シ官有財産管理局ノ主務員及ヒ關係者ノ屬官之ニ干涉シ以テ其結  
約ノ場所ニ臨ムヲ要ス其賣還ノ價直ハ之ヲ官有財産管理局ノ金庫ニ  
納入スト

又其第二條ニ曰ク若シ原所有主若クハ其權理ヲ代有スル人ノ過期失  
權ノ例ニ罹リテ千八百三十三年七月七日ノ法律第六十一條及ヒ第六  
十二條ノ許典セル先買ノ特權ヲ喪失スル有レハ官有財産管理局ノ指  
揮ヲ以テ官有財産轉付ノ法式ニ遵ヒ其土地ノ全部若クハ一部ヲ賣却  
スト

八十四 若シ二人ノ互ニ買回ノ權理ヲ有スト争フ有レハ則チ行政官  
ハ其賣還ノ決行ヲ中止シ以テ管轄裁判所ノ裁判ヲ待ツ

議院  
裁判

然レヒ工作ノ用ニ供セル土地ノ不用ニ屬スルヲ決定スルハ專ラ行

政官ノ權内ニ存ス

ル者タルヲ決定スレハ則チ第六十一條ニ規定セル所ニ遵ヒテ其賣却

ノ公告ヲ為ス

千八百六十二年十二月  
二十日ノ破毀裁判

故ニ行政官ハ其不用ニ屬ス

千八百四十年  
四月一日ノ參